國師遷化の後は、何を須ひやうぞと問ふたを、國師本分を用ひよと爲人して云はれた也、又百年の後所須何物ぞと蹤跡を止めて造作に渉らふとした處の色相の惑いを、ぬかうために本分を爲人して見せしめた也。先師下語に鐵丸無二縫罅一。

帝云、請師塔樣。下語云。隨僂傲。

作二無縫塔一と云ふたを心得ずして、請師塔樣と云はれた也。又、可惜許、本分を爲人したれども心得ず、字跡ばかり心得て塔の作樣は何と作り候はうぞと問たは隨僂傲なり。又帝が本分を心得ざるはヲカシイ事かなと云ふ方もあり。故に可惜許也。又無縫塔は本分を爲人せられたれども心得ずして、請師塔樣とイカタを出せと云ふたはアラあつたら物よと云ふ方もあり。又下語して云く、再問不レ妨、又、好問。此二句は同心なり、鈍には問ふたれども、無縫塔を作れと云ふたに、イカタを出せと云ふたは妨げうする程の再問ではない程に好問ぞと也。

國師良久云。會麽。下語云。無孔鐵槌當面擲。

本分を爲人して會麽と云はれた也。良久は本分の方なり。會麽は爲人の方なり。又圜語云く、停レ囚長レ智と、停囚は良久の處なり。長智は會麽の處に用ふる也。先師云く是等が祖師の妙處で有うぞと云云又良久の上に何の道す事が有うぞと云ふ方もあり。故に無孔の鐵槌を當面に擲つ也。先師の下語も同しぞ。

帝云、不會。下語云。鈍鳥逆レ風飛。一死不二再活一。一處不レ通兩處失レ功。自救不了。

四ツ付けてソロ　先師下語に舌頭無レ骨。漆桶不レ會。

國師云。吾有二付法弟子耽源一。却諳二此事一。請詔問レ之。下語云。養レ子方知二父慈一。憐レ兒不レ覺レ醜。

吾が弟子を隨分と思ふて云はれた程に兒を憐んで醜を覺へずと也。

國師遷化後。帝詔二耽源一問二此意如何一。下語云。貧兒思二舊債一。

前の事を思ひ出して問ふたなり。先師下語に見レ之不レ取思レ之千里。貪二着天上月一失二却掌中珠一。

源云。湘之南潭之北。下語云。山青綠水。

什麽の道程もない處を湘南潭北と云はれた也。先師下語に、山是山水是水。主山高案山低。

雪竇着語云。獨掌不二浪鳴一。下語云。月白風清。

手を合せてこそ鳴れ。片手では何として鳴る可きぞ。道理も無いぞ。着語は如此カイソウテする也、下語は古則を見下してするなり。先師下語に雪上加レ霜。叩必應。

中有二黃金一充二一國一。下語云。充二塞六合一。

充塞六合とは本分を指して云へり、黃金とは本分にとりたぞ。又拋二向面前一。上では無縫塔を指

して云ふやうで本分のドツコニモある處を云はれた也。先師下語に、幽澗泉清高峯月白。日出乾坤耀。

雪竇着語云。山形柱杖子。下語云。黑鄰皴地。月白風清。

本分を指して山形の柱丈子と云へり。黑鄰皴地は黑き杖なり。又、山形主丈子とは黑木作りの山出しの主丈の其儘な處を本分に用ひて云へり。黑鄰皴地とは柱杖のこぶしたゝくれた處を云ふなり。月白風清、是れも其のまゝな處を現成に見る也。先師下語に尺長寸短。

無影樹下合同船。下語云。天際日上月下。

是れは現成の上を指して合同船と云ふた也。先師の下語に南地竹北地木。松直棘曲。又下語に銀山鐵壁。

影もない樹と云ふが有つてこそ、サテ合同船と云ふは、ともあい船ぞ、圓木船のことなり、船なれは水邊にてこそ有ふずれ、樹下にあると云ふも無用處の何の道理もない事なり。又影無き樹と云ふもないことぞ。何の道理もないことなる程に銀山鐵壁と云ふ句を着くる也。其故は銀山と云ふも無く、鐵壁と云ふもなきものなり。畢竟何の道理もないことぞ。本分に用ひて云はれたぞ。

雪竇着語云。海晏河清。下語云。檻前山深水冷。

是れも見へわたりたる處を眞直に云ふた也、現成の方ぞ。又、天際日上月下。山青水綠。天高地低。

海晏河清は太平なることにして何の道理もない現成底を眞直に云ふた也。先師下語に泣露千般草吟風一樣松。又、同坑無異士。

瑠璃殿上無知識。下語云。萬里一條鐵。

瑠璃殿上と云ふを色相に用ひ、無知識と云ふを本分に用ひて萬里一條鐵と見るぞ。又、瑠璃殿上無知識とは、誰人でも結構な殿上にばかり知識があると心得る也。無縫塔などを立つるを好いと思ふ也。其は皆色相の上の事でこそあれ。瑠璃殿上無知識とは無縫塔などのやうなる色相の上には知識は無いぞと本分を顯はして云ふた也。去る程に萬里一條鐵と云ふ句を着くる也。瑠璃殿上と云ふは色相の方、無知識と云ふは一條鐵なり。又、瑠璃殿上と云ふは無縫塔を指して云ふやうで本分を云ふた也。サテ無知識と云ふは截斷に用ふる也。無縫塔と云ふた處を知音して知る者がないぞと云ふ心也。知音少しなる處を截斷に用ふる也。去る程に瑠璃殿上無知識と云はれたぞ。先師下語に獨坐欽寰宇。上無攀仰。下絶弓弧。風吹不入。

雪竇着語云。拈了也。下語云。蝦跳不出斗。

色々にさまをかへて云ふたれども、本分現成色相の間を云はれた程に、向上の眼から見下して

サノミ跳ぬぞと云ふ也。又、靈龜曳レ尾。雪竇の拈了也と云はれた處に、色々が備はりたぞ。本分現成、色相、爲人、切斷、悉く備る也。雪竇の此の古則を好く見下して拈了也と云はれた也。玆で拈了と云はれた處切斷が備つたぞ。何故に今日師家學人の上より、蝦跳不レ出レ斗と云ふ句を着けたそなれば、斯く云ふ雪竇も悉くあとて云ひおいたことを云はれた程に蝦跳不レ出レ斗と下語した也。サテ靈龜曳レ尾とは、雪竇の拈し了りたそと切斷して云はれたも、蹤跡がある物よと今日の學人の上より打ち落して下語した也。先師下語に水洒不レ着。一彩兩塞。

第三節　本則評唱和譯

【讀方】　肅宗代宗は皆玄宗の子孫なり、太子たりし時常に參禪を愛す。國に巨盜有るが爲めに玄宗遂に蜀に幸す。唐もと長安に都す。安祿山が爲めに僭據せられて後に洛陽に都す。肅宗攝政す。是の時忠國師、鄧州の白崖山に在りて住菴す。今の香嚴道場是れなり。四十餘年山を下らず。道行帝里に聞ゆ、上元二年中使に勅して詔して入内せしむ。待するに師の禮を以てして甚だ之れを敬重す。嘗つて帝のために無上道を演ぶ。師朝より退く、帝自ら車を攀ぢて而して之れを送る。朝臣皆慍る色あり。其の不便を奏せんと欲す。國師他心通を具して而して先づ聖に見みへて奏して曰く、我天帝釋の前に在りて、栗散天子を見るに閃電光の如くに相似たりと。帝愈々敬重を加ふ。代宗の臨御に及んで復た延いて光宅寺に上らしむること十有六載、機に隨つて說法す。大曆十年に至りて遷化す。山南府の青鉦山和尙、昔國師と同行たり。國師嘗つて常に奏して他に詔せしむ。三たび詔すれとも起たず。常に國師の名に耽り利を愛し人間に戀着することを罵る。國師他の父子三朝の中に於いて國師と爲す。他家の父子、一時に參禪す。傳燈錄の考ふる所に據れば、此れは乃ち代宗の設けたる問ひなり。若し是れ國師に如何なるか是れ十身調御と問はゞ、此れ却りて此れ肅宗の問ひなり、國師緣終りて將に涅槃に入らんとす。乃ち代宗を辭す。代宗問ふて曰く、國師百年後所須何物ぞと。只是れ平常一箇の問端なり。這の老漢風無きに浪を起こして却りて道ふ。老僧がために箇の無縫塔を造れと。且らく道へ白日青天、此の如くにして什麼をか作さん。箇の塔を做るときは便ち了せん。什麼としてか却りて道ふ箇の無縫塔を做れと。代宗也また妨げず作家なることを。儞に一拶を與へて道く、請ふ師の塔樣と。國師良久して云く、會す麼。奇怪なり此の些子、是も是れ參し難し。大小大の國師、佗に一拶せられて直に得たり口匾擔に似たることを。然も此の如しと雖も、若し是れ這の老漢にあらずんば、幾乎ど弄倒し了らん。多少の人道ふ、國師不言の處是れ塔樣と。若し恁麼に會せば達磨の一宗地を掃つて盡きん。若し良久便ち是と謂はゝ、啞子も也た禪を會すべし。豈見ずや外道佛に問ふ。有言を問はず、無言を問はず。世尊良久す。外道禮拜し贊嘆して曰く。世尊の大慈大悲我が迷雲を開いて我をして得入せしむと。

外道去るに及んで後、阿難佛に問ふ。外道何の證する所有りてか而かも得入と云ふ。世尊云く、世の良馬の鞭影を見て行くが如しと。人多く良久の處に向つて會す。什麽の把鼻か有らん。五祖先師拈して云く、前面は是れ珍珠瑪瑙、後面は是れ瑪瑙珍珠、東邊は是れ觀音勢至、西邊は是れ文殊普賢、中間に箇の旛子有りて風に吹着せられて胡盧々々と道ふと、國師云く、會す麽。帝曰く不會。却りて些子に較れり。且らく道へ這箇の不會と武帝の不識と是れ同か是れ別か。然かも似たることは則ち似たりと雖も、是なることは則ち是ならず。國師云く、吾に付法の弟子耽源と云ふものあり。却りて此の事を諳す。請ふ詔して之れに問へど。雪竇拈して云く、獨掌浪りに鳴らず、代宗の會せざることは則ち且らく置く。耽源還りて會すや。只箇の請ふ師の堪樣と道ふことを消す。盡大地の人奈何ともせず、五祖先師拈して云く、儞は是れ一國の帥、箇の什麽の爲めにか道はずして却りて弟子に推與する。國師遷化の後、帝耽源に詔して此意如何と問ふ。源便ち來りて國師の爲めに胡言漢語して道理を說くに自然に他の國師の說話を會す。只一頌を消すと。祖庭事苑に出齊時に湘之南潭之北。中に黃金あり一國に充つ。無影樹下の合同船。瑠璃殿上に知識なし。耽源名は應眞。國師の處に在りて侍者と作る。後吉州の耽源寺に住す。時に仰山來りて耽源に參す。源言は重く性は惡ろく犯すべからず。住する事を得す。仰山先づ去つて性空禪師に參す。僧有り性空に問ふ。如何なるか是れ祖師西來意。空云く、人の千尺井中に在るが如き寸繩も假さずして此人を出し得ば卽ち汝に西來意を答へん。僧云く、近日湖南の暢和尙亦人の爲めに東語西話す。空乃ち沙彌と喚びて這の死屍を拽出し着せよと云ふ。沙彌は仰山後に擧して耽源に問ふ。如何んが井中の人を出得せん。耽源云く、咄、癡漢、誰か井中に在る。仰山契はず。後溈山に問ふ、山乃ち慧寂と呼ぶ。山應諾す。僞云く出し了れり。仰山此れに因りて大悟して云く。我耽源の處に在りて體を得、溈山の處におひて用を得たりと。只是れ這の一箇の頑子人の邪解を引くこと少なからず。人多く錯りて會して道ふ、相は是れ相見。譚は是れ譚論。中間に箇の無縫塔あり所以に道ふ黃金あり一國に充つと。帝國師と對話する便ち是れ無影樹下の合同船。帝會せず。遂に道ふ瑠璃殿上に知識なしと。又、有る底は道ふ。相は是れ相州の南。潭は是れ潭州の北。中に黃金あり一國に充つとは官家を頌す。眨眼顧視して云く、這箇は是れ無縫塔と。若し恁麽に會せば情見を出でず。只雲竇の四轉語を下すが如きは又作麽生か會せん。今の人殊に古人の意を知らず、且らく道へ湘之南潭之北、儞作麽生か會す。中に黃金有り一國に充つ、儞作麽生か會す。無影樹下の合同船、儞作麽生か會す。瑠璃殿上知識なし、儞麽生か會す。若し恁麽に見得せば、妨げず平生を慶快することを。湘之南潭之北、雪竇道く獨掌浪りに鳴らず、已むことを得ずして儞が爲めに說くと。中に黃金あり一國に充つ。雪竇道く山形の拄杖子と。古人道ふ拄杖子を識得せば一生參學の事畢んぬと。無影樹下の合同船、雪竇道く海晏河淸。一時に戶牖を豁開して八面玲瓏たり、瑠璃殿上に知識無し。雪竇

道く拈了也と。一時に爾がために說き了れり。妨げす見難きことを。見得せば也た好し。只是れ些子も錯つて認むる處あらば、語に隨つて解を生ず。末後に至りて云ふ拈了也と。却りて些子に較れり。雪竇分明に一時に下語し了りて、後面單に箇の無縫塔子を頌す。

【字解】一。肅宗。　肅宗は唐の第八主玄宗の第三子、代宗は唐の第九主肅宗の長子である。我が國では孝謙淳仁稱德光仁四帝の御宇で奈良朝の末葉に當る時代である。

二、國に巨盜あるが爲めに玄宗遂に蜀に幸す。　巨盜は安祿山を指したもので、玄宗の天寶十四年に祿山謀反を起し。顏眞卿が義兵を起して賊を討つたけれども不幸にして不利。それがため翌至德元年、肅宗の世に至りて祿山遂ひに京師を陷れ京に入つたから、帝は遂に蜀に蒙塵せられたことである。

三。忠國師。　忠國師名は慧忠と申した方で、永喜眞覺。南岳懷讓。青原行思。荷澤神會など諸大德と共に、法を六祖の慧能大師に嗣いた人である。生れは越州諸暨の人で姓は冉氏と申した。唐の第六主肅宗皇帝及び其の子の代宗の歸依をうけて國師の號を賜つたから常に忠國師忠國師と申して居る。始めは南陽の白崖山香嚴寺に住して居られたが、後代宗の請によつて西京の光宅寺にうつられた。故に傳燈錄などには西京光宅寺の慧忠禪師として機緣が載つて居る、代宗の太曆十年十二月九日に遷化をせられて太證禪師と申す勅號をさへ賜つたと云ふことであるから、此の本則の問答は爰に肅宗となつてあるけれども、之れは代宗の間違いであつて、卽ち代宗が國師の愈々御臨末と云ふ時に態々御臨幸になつて訣別をせられた時に此の問答があつたものと考へられるものである。

四。上元二年。　肅宗の代には、年號が四度改つて、至德が二年。上元が二年。寶應が一年。都合七年間か肅宗治世の御宇であるから、上元二年は帝の卽位第六年。日本では淳仁天皇の天平寶字五年に相當する年である。

五。中使に勅して入內せしむ。　中使は宮中の使者卽ち勅使のことで、傳には、中使孫朝進に勅して詔をもたらして徵して京に赴かしめて侍するに師の禮を以てす。初め千福寺の西禪院に居らしむと見えてある。

六。帝自ら車を攀して之れを迎る。　之のことは諸傳には見えて居ないやうであるが、兎に角非常に御歸依の深かつたことと見へる。

七。朝臣皆慍る色あり其の不便を奏せんと欲す。　慍色は心に含み怒ることで、不便は不都合と申すも同じ意味である。

八。國師他心通を具して等。　之れを傳には、時に西天の大耳三藏と云ふものあり。京に到る。云く他心の慧眼を得ると。帝敕して國師を試驗せしむ。三藏纔かに師を見て便ち禮拜して立つ。師問ふて曰く、汝他心通を得たりや。對へて曰く不敢乃至三藏良久して去る處を知るなし。師叱して曰く、這の野狐精他心通は什麼の處にかある云々と見へてある。

九。他の父子三朝の中に於て。　三は恐らくは二の誤りであつて、卽ち肅宗代宗の兩帝を指したものである。

一〇。如何なるか是れ十身調御。　これは肅宗の問ひであつて、傳には、肅宗の問ふ、如何なるか是れ十身調御。師乃ち起立して曰く、還つて會すや。曰く不會。師曰く老僧がために淨瓶を過し來れと見へてある。

一一。只是れ平常一箇の問端なり。　この問いは尋常一樣のありふれた問端である。

一二。風なきに淚を起す。何やら意味ありげに申さゝが、此の中に龍でも潛んであるのではあらうかと云ふ。

一三。外道佛に問ふ。　是の因緣は只良久の類則に引いたもので、良久はやゝヒサシクと讀むから、暫時默して萬機を停止し居る姿である。

一四。中間に箇の旛子あり風に吹着せられて胡盧々々と道ふと、　旛蓋の風に吹かれて互にふれ合ふて胡盧と云ふ音響が出ると云ふのである。胡盧々々は哆哆啰々と同じで別に意味はない。

一五。雪竇拈して云く獨掌は淚りに鳴らず。　一本には此の文を削つてある。有るも可無きも可どちらでも宜しい。

一六。祖庭事苑に出齊時。　宋の東越の禪僧善鄉師節が撰述したもので八卷あつて今日で申せば一種の字典のやうなものである。此れは盲僧の添へたものらしい。削つた方が宜しい。事苑の作者は圜悟と同時代の人であるから。圜悟が事苑を引く

ことは寓ないことであらう。

一七。 時に仰山來りて耽源に參す。　仰山は袁州仰山の慧寂禪師と申した人で潙山靈祐の法嗣である。此の事を仰山の傳には初耽源に謁して已に玄旨を悟り、後に潙山に參して遂に堂奥に陞ると見へてある。

一八。 性空禪師。　百丈懷海の法を嗣いだ潭州石霜山の性空禪師で潙山靈祐黄檗希運等と同參の古佛である。

一九。 如何なるか是れ祖師西來意。空云く云云。之の因緣は傳燈錄に見へて居る。

二〇。 近日湖南の暢和尚亦人の爲めに東語西話す。　暢和尚は潭州龍牙山の圓暢禪師と申した方である。暢和尚は色々と途方もないことを云はるゝが、和尚も一味同類では御座らぬかのと云ふ。

二一。 咄。痴漢、誰か井中に在る。　此の馬鹿野郎奴。能く目をあけて見ろ。誰か井中に居るやうであるぞと云ふ。

二二。 潙山。　潭州潙山の靈祐禪師と申した人で百丈の法を嗣いで潙仰宗の高祖となられた人である。

二三。 中に黄金あり一國に充つとは官家を頌す。　支那では官と云へば人の汎稱で、旅人のことを客官と云ひ看客のことを看官などと云ふそうであるが、茲では矢張り禁中のことを指したもので肅宗皇帝はサスガに偉い人であると申したものと見へる。

二四。 古人道く柱杖子を識得せば一生參學の事畢んぬと。　これは長慶の慧稜禪師の言はれた語である。

二五。 妨たげず見がたきことを。　千古萬古人に與へて見せしむべきものである。諸人卽今目を明いて見よ、山は青く水綠りに月は白く風は清いと云ふ。

第四節　類則提唱

其一　祖師西來意

有僧問性空如何是祖師西來意。下語云。問得可始得。

空云如人在千尺井中不假寸繩出得此人卽答汝西來意。下語云。平生心膽向人傾。

人の千尺の井中に在るが如しとは答へまいと云ふ義ぞ。寸繩をからずして井中の人をば何として取り出されやうぞ、ナラヌことを云ふたものよ。西來意の上には問はふことも、答へようことも有りてこそじや程に。答へぬ處こそ西來意を爲人した者よ。

僧曰。近日湖南暢和尚。亦爲人東語西話。下語云。隨便撥。

暢和尚は東語西話して爲人召さるゝが、性空はなぜに答話をば召されぬぞと、西來意をば心得いで字面に就いてまはつた。東話西語は杜撰不少と云ふ方語ぞ。暢和尚不心得なことをせらるゝぞ。

空乃喚沙彌拽出這死屍着。下語云。痛處下針錐。

痛めて云へり、死屍は死却した者ぞ。此沙彌とは仰山なり。

山後擧問耽源如何出得井中人。耽源云。咄。痴漢。誰在井中。下語云。和盤推出夜光珠。無孔鐵槌當面擲。

井中に誰も無いと云ふ處が本分ぞ。西來意を問ふたに本分を答へたは心性一致の用ぞ。誰れか

有ると云ふたは誰れも無いと響く處を爲人に用ふる也。咄はツタナシと云ふ方、又は拂ふ方ゾ。痴漢はグチと云ふ方ぞ。仰山を指して云へり。

仰山不レ契。下語云。可惜許。鈍鳥逆レ風飛。

何も落し句なり。

後問ニ溈山一。山乃呼ニ慧寂一。山應諾。溈山云。出了也。下語云。百花春到レバ一時ニ開。

慧寂と云ふたにヤツと答へたは道理も無いことぞ。道理も無い處こそ西來意よ。コヽぞ井中の人を出し得た者よと答へたぞ。無心の上を答へて直指したほどに百花春到レバ一時ニ開ぞ。

仰山因レ此大悟云。我在ニ耽源一。處得レ體。溈山處得レ用。下語云。瓦解氷消。

源は本分を答へらるゝ。山は道理も無くマススグに答へられた。爲人と云ふも本分に備るほどに本分を指して體と云ふ。爲人を指して用と云ふたぞ。體用共に全備の眼を具して云ふたぞ。

其二　柱杖子

古人道。識ニ得柱杖子一生參學事畢。下語云。萬里一條鐵。

柱杖は本分ぞ。本分をだに識得したらば、參學のことは了畢ちやぞ。又云柱杖子とは色相を云ふたぞ。色相をだに識得し截斷したらば、一生參學の事は了畢せいではかなはぬと、兩面目備はりたぞ。本分の上には參禪參學と云ふことが有つてこそ。ない處が了畢ちやぞ。

其三　一生參學事畢

長慶稜禪師拈ニ拄杖一示レ衆云。識ニ得這箇一一生參學事畢。雲門云。識ニ得這箇一爲ニ什麼一不ニ肯住一。下語云。這老賊。

雲門こゝで此古則を擧揚して識ニ得這箇一爲ニ什麼一不ニ肯住一と云はれた處が賊ぞ。這箇とは本分なり。本分を識得したらば、一生參學事了畢せいでは、本分上に到りて住るちやは住まらざるちやはと云ふて何物かあらふぞ。其を雲門の批判して、爲ニ什麼一不レ住と云はれたが賊ぞ。先師曰く、是れは蓮華峰庵の拈ニ拄杖一示レ衆云。古人到ニ這裏一爲ニ什麼一不ニ肯住一と云ふ機緣を取りて云ふたものぞ。問ふて曰く、識ニ得這箇一爲ニ什麼一不ニ肯住一意旨如何。云く、這箇を識得するが故に。長慶は拄杖を本分に用ひて識ニ得這箇一一生參學事畢と本分をだに識得したらば、參學の事は畢ると云はれたを、雲門の其上を批判して爲ニ什麼一不レ住と云はれたは賊ぞ。又雲門の上を批判して先師の意旨如何と拶して見られたは這箇を識得したゆへに不住と云はれたぞ。雲門の働きを學者に知らしめん爲めに拶して示された也。此古則は碧巖の中にはなけれども、本則の批判に此古則かたきなる公案あるに依りて是れを參す。

第五節　頌

無縫塔（這一縫大小大。道什麼）見還難（非眼可見。瞎）澄潭不許蒼龍蟠（見麼。洪波浩渺。蒼龍向什處蟠。這裏直得摸索不着）層落落（莫眼花。眼花作什麼）影團團（通身是眼。落七落八。兩兩三三舊路行。左轉右轉隨後來）千古萬古與看（見麼。瞎漢作麼生看。闇梨覷得見麼）

【讀方】頌に曰く、無縫塔這の一縫大小大。什麼と道ふぞ。見んとすれば還つて難し。眼の見る可きに非ず。瞎澄潭許さず蒼龍の蟠ることを。見るや。洪波浩渺。蒼龍は什麼の道に向つてか蟠まる。這裡直に得たり摸索不着。層落々眼花すること莫れ。眼花して什麼をか作す。影團々。通身是れ眼。七に落ち八に落ちん。兩々三々舊路に行く。左轉右轉して後に隨い來る。千古萬古人に與へて看せしむ。見るや。瞎漢作麼生が見ん。闇梨覷得見ずや。

【字解】一。這の一縫大小大。　始に無縫塔と云ひ出して宇宙萬象の本體本分を一句に呈露しられたけれども、既に言句に出しては早や縫目が付く。雪竇老人、大でもあれ小でもあれ此の縫目は藏れぬものであらうか。思ひ餘りありて言從はずと申すが此のことであらう。折角無縫塔と迄言い出しても矢張第二第三に落ちた。今少しの處であるに惜いことであると云ふ。大小大は始めが大で後が小と云ふので龍頭蛇尾と云ふことである。雪竇老人は大見識を言句にあらはして見せられたがサスガは雪竇である、第二第三に落ちたけれどもイカサマ本分に近い紙一重であると云ふ。

二。什麼と道ふぞ。　兎角口先に上すで惡るいがこれと云ふも雪竇の老婆心の致すところで大悲止むを得ざるが故である。諸人忽諸にしては成らぬぞ。好く聞いておけ。

三。眼の見るべきに非ず。　此の無縫塔は言葉にさへ言へぬものを、何として眼で見られようぞ。耳で聽いても聽こへまい、マア鼻でドも見るかの、

四。瞎。　シイて見やうとすれば眼がつぶれるであらう。

五。見るや。　澄潭の死水の中には龍は棲まぬものと聞いて居るが、其處のスミハタツた水の中に活龍が居るであらうか。諸人見へたかな。蟲眼鏡でもお貸し申さう。

六。洪波浩渺。　澄潭の死水に龍は居らぬと、洪波浩渺白浪滔天。ハテナ風無くして浪が起つた、龍でも居るのであらう。

七。蒼龍は悠麼の處に向つてか蟠まる。　死水に接まず活水に住せず、忽ちにして深淵にあり。忽にして天空にあり。サテハ何處に蟠つて居るであらう。

八。這裏直ちに得たり摸索不著。　ハテサテわからぬことかなと云ふ。

九。眼花すること莫れ。這箇の無縫塔は　上三十三天を貫穿して空涯々、十方法界に充ち滿ちて居るそうで層落々とサテも見事なことであるが。うつかりと見て驚天して眼を廻はさぬやうにするがよいぞ。目玉がとび出るであらう。然しながらお互に長生きはしたいものである。ドレ老人も飛行機にでも乘りて見物に出かけよう。

一〇。眼花して什麼をか作す。　坐下の諸人飛行機で見物に出掛けるとな。アブないことである。長生きはしたくないもの、サツカリト見とれるなよ。トンダ怪我をするであらう。

一一。通身是れ眼。　影團々と影迄見へると、望遠鏡でも持ちやるかの、十二通身是れ眼となる、定めしスキトチツタことであらう。

一二。七に落ち八に落つ。　眼がちらついて見へぬとな、ツウであらふと思つた、

一三。兩々三々舊路を行く。　國師も耽源も雪竇も、皆同じ所をうろついて居るぞ、變つたところへは行けまい。

一四。左轉右轉して後に隨い來る。　ニツケでもあるまいに、誰も彼も國師に付いて廻つて居る。男らしくもない。

一五。見るや。此の層落々たる無縫塔は千古萬古、無始劫來未來永劫嚴然と樹立せられた大塔であるから、誰でも歴々分明と見へる筈である。諸人何と見へるかナ。

一六。瞎漢作麼生か看ん。然し盲人どもには見へまい。雪竇お前も見えたかな。

一七。闍梨覿面見すや。　誠に心もとないことである。並に秘藏の眼鏡があるから貸そう程にトクと參究して見られよ。

【講義】　此頌は三言四句七言二句の一頌であつて、三三七三三七の六句から出來て居る。サテ第一に無縫塔と本則の主眼を拈し來りて、皆さん、丸くもなく四角くもなく、又高くも低くもない盡大天地唯一の無縫塔を一度び拜んで御らうじ徹見して見よ、其の功德は無量無邊であるから、頓兵衞も角兵衞も其身其儘成佛する事が出來て。横に十方にはたり豎に三世を貫く十身具足の結構な佛になられますぞ。見んとすれば還りて難し。然し丸くも四角くも太くも細くもなき縫目のない無縫塔が中々見へてたまるものでない。勿體ない。そうやす〳〵と拜がめませぬぞ。眼の見るべきに非ず、耳の聽くべきに非ず、鼻の嗅くべきに非らざる七寶合成の金色燦たる無縫塔。ソレ見へたかな。どうぢやな。ナニ見へぬとな、這のあき盲め、衆生世間國土世間智正覺世間と三世間を融じ十方に渉りて靡漫せる沒縫跡の哆哆卿卿、這箇の無縫塔は言葉にさへ言はれぬものが見へてたまるものでない。聽へてたまるものでない。ソラ眼をあいて見よ、瞎。ウツかりすると目がつぶれるぞ。澄潭には蒼龍の蟠まるを許さず、國師良久して曰く會せりやと云ふ、此の良久の二字が價千金であつて千萬億兩にも換へがたい大切な良久である。龍が出るか蚯蚓が出るか。鬼が出るか佛が出るか。諸人澄潭の死水には蒼龍は潛まぬと云ふことである、蒼蒼淸澄の碧天には蒼龍は宿らぬものと聞いて居る。黑漫々の天空か、白浪滔天の活水か。結局蒼龍は什麼なる處に蟠まつて居るであらう。玉眼金鱗、火勢焰々、それが模索不着とは何事であるか。諸人恁麼ならば實參實究して這箇良久底の蒼龍を識得して見よ。畢竟一生參學の事をはつて、山靑水綠天下は大平であらう。層落々。偖も立派な高塔である。影團々。アノ影の輝き渉る美はしさよ。夫れでも未だ見へぬか、千古萬古人に與へて看せしむ、無始刼來未來永刼、嚴然と樹立せられたあの無縫塔を能く目あいて見よ、目撞くなよ鼻つくなよ。徧界曾つて藏せず、諸人好く氣を付けて看よ。必ず歴々分明に見らるゝであらう。

第六節　頌評唱和譯

雪竇當頭に道ふ。無縫塔見んとすれば還りて難しと。然も獨露して私無しと雖も、則ち是れ見んと要する時還りて難し。雪竇忒煞慈悲、更に儞に向つて道ふ。澄潭には蒼龍の蟠ることを許さず。五祖先師道く。雪竇頌古の一冊、我は只他の澄潭許さず蒼龍の蟠と云ふ一句を愛すと。猶些子に較れり。多少の人が他の國師良久の處に去りて活計を作す。若し恁麼に會せば一時に錯了也。道ふことを見すや、臥龍は死水を鑑みず。無處には月ありて波澄み、有處には風無ふして浪

起ると。又道ふ臥龍長へに怖る碧潭の清きことをと。若し是れ這箇の漢ならば、直饒ひ洪波浩渺白浪滔天なるも、亦裏許に在りて蟠らず。雪竇此に到りて頌し了る。後頭に些子の眼目を着て一箇の無縫塔を琢出す。後に隨つて說ひて道ふ。層落々たり影團々たり。千古萬古人に與へて看せしむ。爾作麼生か看ん。卽今什麼の處にかある。直饒爾見得して分明なるも也た錯りて定盤星を認むること莫れ。

【字解】一。五祖先師。　圓悟老師の本師たる五祖法演禪師のことである。

二。雪竇頌古の一册。　澄潭不レ許蒼龍蟠の一句は是れたゞに雪竇頌古一册を包容するのみではない、盡大地、大乘佛敎の眞意義は皆此の一句に攝在して居るのである。三世の諸佛は之れが爲めに出世し、釋迦世尊此れが爲めに八萬の法藏を說き玉ふたのであるぞ。

三。臥龍は止水を鑑みず。　這の三句は第九十五則長慶阿羅漢三毒の條の頌に見へて居る、活龍の棲む處、活龍の宿らぬ處、諸人會せりや。

四。直饒爾見得分明なるも也た錯つて定盤星を認ること莫れ。　圓悟の大慈悲至れり盡せりである。諸人能く心せよ。切角見得分明なるも鹿を認めて馬となし、龜を認めて鼈となす底の見得ならば何の所詮もないぞ、度量衡の目は品の輕重によりかはるものである。同じ目計りを見る愚かさを矣り返すなよと云ふ。

第十九則　俱胝指頭禪

第一節　垂示

垂示云。一塵擧大地收。一花開世界起。只如塵未擧花未開時。如何着眼。所以道如斬一絲。一斬一切斬。如染一絲。一染一切染。只如今便將葛藤截斷運出自己家珍。高低普應。前後無差。各各現成儻或未然。看取下文。

【讀方】垂示に曰く、一塵擧げて大地收まり。一花開けて世界起る。只塵未だ擧らず花未だ開かざる時の如くんば、如何んか眼を着けん。所以に道ふ一絲を斬るが如しと。一斬一切斬。一絲を染むるが如し。一染一切染、只如今便ち葛藤を持つて截斷して自己の家珍を運出せば、高低普く應じ前後差ふことなく、各々現成せん、儻し或は未だ然らずんば下文を看取せよ。

【字解】一。截斷して。　截斷はキリタツこと、有る物を捨つるに非ず、無きものを捨つるに非ず、有の無の離れて、一切の思慮妄想萬慮分別を揑て看よ、無の無、空の空で、有に非ず無に非ずして而も有も無である。これを本來無と云ふ。是くの如く知るが卽ち截斷である。此れを決斷の心、金剛の寶劒といふ。諸人水もたまらぬ切れ味を見よや。

二。自己の家珍。　人人自己一生受用不盡底の家珍である。太郎の家珍は銃とサーベル、鈍兵衞の家珍は鋤と鍬。借問す諸人の家珍は果して何であらう。ベス曰くワン。

【講義】一塵擧ぐれば大地收り一花開けば世界起る、梅が咲けば春楓が散れば秋、一花開けば春は來り一葉散れば秋と知る。一塵一花と云へば微細なものであると思ひ、宇宙世界と云へば廣大なるものと思ふが人情であるが然し之れは妄想であり凡夫の妄見である。一塵を離れて果して世界があるか。一花を離れて果して宇宙があるか。世界は幾多の一塵からなり。宇宙は幾多の一花から出來て居るのである。それ故に若しも之れも一塵之れも一花と除き去つたならば、此の大きな世界もなく此の廣大なる宇宙もなくなるであらう。一卽一切、一切卽一、重々無盡主伴具足であつて、一塵を擧くれば盡大地は其の中に收まり、一花を擧くれば十方法界の春色は一時に來つて互に主となり伴となりて、主に伴を攝し伴に主を攝し相卽相入無碍自在である。されば梅の一花楓の一葉に盡大地の萬象を攝することも出來れば、足下の一砂一石にも盡法界の萬物を包容することも出來る。之れが卽ち事々無碍法界であり之れが卽ち六大無碍と申すのである。さりながら是くの如きの所談は別に妙でもなく奇でもなく平々凡々。衲僧家に取りては喫茶飯事に過ぎぬ。只塵未だ起らず花未だ開かざる時の如くんば如何か眼を着けん。一塵已に擧り一花已に開いて後では遲い土用の種蒔寒中の麥蒔きで最早何の役にもたゝぬ。そこで天地未分萬物未生以前に向つて達觀し、父母來生已前に向つて自己を識得せねば半文錢の價いもない。天地未分混沌の前は何であつたか、地獄の釜の其の前の自己は何であつたか、有か無か、無か有か、一塵擧らず一花開かず、眼見も及ばざる底の前は何であつたか、柳は綠花は紅、綠なす前の柳は何か、紅なす前の花は何か、サテ何であつたであらう。爰が是非とも參究して見なければならぬところである。所以に道ふ一綟絲を斬るが如し一斬一切斬。一綟絲を染るが如し一染一切。一微塵中に三千の大千を攝し、一塵に大地が收まりて在るから、一塵を處分すれば大地を處分することになる、譬へば一カセの絲は一箇處ブツツリと切斷すれば悉くばら〳〵になり、又一小手卷の絲をヅブりと藍瓶につければ悉く藍色になるやうなものである。それ故に一塵を除き去れば世界は爲に崩解し、一花を取り去れば宇宙は乃ち成り立たぬことになる。只如今便ち葛藤を將つて截斷して自己の家珍を運出せば、高低普く應じ前後差ふことなく各々現成せん。人人各自の上に於て能く思ひ合せて見よ、お互動もすれば種々樣々なる妄想執着、富みだの名譽だの學解だの識見だのと、色々の閑葛藤の爲めにしばり縛ばられて自由を得られぬことになつて居る、之れを繫縛と云ひ又三界の苦倫と申す。そこで如今人々脚下の紅絲線を截斷し、一切四の五の葛藤を截斷して、人人自己一生受用不盡底の家珍と、自己の本心本性天眞爛熳の處をさらけ出して見よ、如何なる境遇に於ひても、如何なる事情に立ち至りても、自由自在に活潑々地の運動が出來る。それ故に人は是非とも彼の赤子の如き心を持たねばならぬ。彼の赤子を眺めて見よ、あれが卽ち無我無心である。欲もなければ得もない、呑みたいときには呑み、垂れたい時には垂れる、泣くも笑も思ひの儘で、ハ

丶かる處もなく、恐るゝ處も無い、爰が自由自在各々現成の味いである。儻し或は未だ然らずんば下文を看取せよ。玆に好い手本があるから、此の公案を能く領得して見よ、觸目現成全躰露現の妙境が自然に發現して、玆に自由自在無障碍底の妙用を得ることが出來るであらう。

第二節　本則

舉俱胝和尚。凡有所問有什麼消息。只竪一指。這老漢也要坐斷天下人舌頭。熱則普天普地熱。寒則普天普地寒。換却天下人舌頭。

【讀方】俱胝和尚凡そ所問有れば什麼の消息かある。鈍根の阿師只一指を竪つ這の老漢也た天下の人の舌頭を坐斷せんことを要す。熱する時は普天普地熱し寒する時は普天普地寒す。天下人の舌頭を換却す。

【字解】一。俱胝和尚。婺州金華山の俱胝和尚は、閩州大海山の法常禪師の法を嗣いだ人であるから南岳下の第五世で、唐土佛心宗の開祖逢磨大師十一世の法孫である、杭州の天龍和尚から、一指頭の禪と云ふことを相承して、生涯誰が何と云ふても、只指一本たゞて見せると云ふことより一言一句も說かなかつた人で誠に一風變つた化風のある人であつた。

二。什麼の消息がある。鈍根の俱胝和尚には何人も用事はあるまい、何を申しても一指頭で別に替つた消息もなからう。

三。鈍根阿師。只指一本立てるより外何にも知らぬ鈍物であるから、三才の童子にも劣つた馬鹿ものである。

四。這の老漢也た天下人の舌頭を坐斷せんことを要す。ネソが事すると云ふから中々馬鹿にはならぬ、如何にも尊貴な、如何にも嶮峻な鈍根である。

五。熱するときは普天普地熱し寒するときは普天普地寒す。　此着語は次の天下人の舌頭を換却すと云ふのと共に評唱中の語句が混入したのだと風外老人の耳林抄に申してあるが如何にもそふ思はれる。强いて辨を付ければ、盡天盡地指一本と云ふ說もあるが。矢張り、言思雙絕の本分には指一ツサスことも出來まいにと見た方が宜しからう。

第三節　本則提唱

俱胝和尚凡有所問只竪一指下語云。突出難辨。

本分の上をば言語道斷心行所滅と用ゆ、其の上をば何とも云ふべきやうの無き處を一指を竪て諸人に示したぞ。令日の上になす業は悉く本分に歸へる處を用ひて、何事を問ふとも一指を竪てゝ見せたぞ。此公案は本分が面で直指爲人の方もあり、されども句は本分一致までの句ぞ。萬法の活に提露して知らしむるが如く、本分上は突き出して辨じ難き處を、一指を竪てゝ爲人して見するなり。先師の下語に、劈不開。日暖風和。山是山水是水に着けられたり。先師云く、何故に一指を竪てゝ本分を指したぞ此理如何。答ふ、山河大地草木國土悉く雨ふり風吹くことも本分にて候。何を幷ち來りて問へども、我は本分ばかり。行住座臥まつて居ると指して候。突出難辨とは、皆本分の上には、はつれざれは一指を竪て本分を指して見せらるゝ也。本分は目前にあれども愚人はいさゝかも辨せざるなり。

第四節　本則評唱和譯

若し指頭上に向つて會せば、則ち俱胝に辜負せん、則ち生鐵鑄就するに相似ん。會も也た恁麼に去り、不會も也た恁麼に去り、高も也た恁麼に去り、低も也た恁麼に去り、是も也た恁麼に去り、非も也た恁麼に去る。所以に道ふ一塵纔に起れば大地全く收まり、一花開かんと欲して世界便ち起る。一毛頭の獅子、百億毛頭に現すと。圓明道く、寒するときは則ち普天普地寒し、熱するときは則ち普天普地熱すと、山河大地下も黃泉に徹し、萬象森羅も上霄漢に通ず。且らく道へ是れ什麼物か恁麼に奇怪なることを得たる。若也た識得せば一揑を消せず。若し識不得ならば人を礙塞殺せん。俱胝和尙は乃ち婺州金華の人なり。初め住庵の時、一尼有り。實際と名づく。庵に到りて直に入りて更に笠を下さず。錫を持して禪牀を遶ぐること三匝して云く、道い得ば卽ち笠を下さん。是くの如く三たび問ふ。俱胝對ふるなし。尼便ち去る。俱胝曰く天勢稍や晚れぬ。且らく留まつて一宿せよと。尼曰く道い得ば卽ち宿せん。胝又對ふる無し。尼便ち行く。胝嘆じて曰く、我れ丈夫の形に處すると雖も而かも丈夫の氣なしと。遂に發憤して此の事を明んと要して庵を棄て諸方に往つて參謀し打疊行脚せんと擬す。其夜山神告げて曰く、此を離るゝことをもちいず。來日肉身の菩薩あり來りて和尙のために說法せん。去ることをもちいじと、果して是の次の日、天龍和尙庵に到る。胝乃ち迎へ禮して前事を陳ぶ。天龍只一指を竪てゝ之れを示す。俱胝忽然大悟す。是れ他當時鄭重に專注す。所以に桶底脫し易し。後來凡そ所問有れば只一指を竪つ。長慶道く、美食は飽人の喫にあたらずと。玄沙道く、我れ當時若し見ば指頭を拗折せんと。玄覺云く、玄沙恁麼に道ふ意作麼生。雲居の錫云く、只玄沙恁麼に道ふ如くんば是れ伊を肯してか、是れ伊を肯はざるか。若し伊を肯はゞ何ぞ指頭を拗折せんと言ふや。若し伊を肯はずんば、俱胝の過恁麼の處にか在る。先曹山云く、俱胝承當之處莽鹵なり。口一機一境を認得す。一等に是れ手を拍ち掌を撫す、他の西園を見るに奇怪なりと。玄覺又云く、且らく道へ俱胝還りて悟るや也た未だしや。什麼としてか承當之處莽鹵なる。若し是れ悟らざれば又平生只一指頭の禪を用ひ盡さずと道はんや。且らく道へ曹山の意什麼の處にか在ると。當時俱胝、實に然も會せずば他の悟後に到るに及んで、凡そ所問有れば只一指を竪つ、什麼に因りてか千人萬人羅籠すれども住せず、他を撲すれども破れず、儞若し用ひて指頭の會を作さば決定して古人の意を見ず。這般の禪は參し易し。只是れ會し難し。如今の人纔に問着すれば也た指を竪て拳を竪つ。只是れ精魂を弄す。也た須く是れ徹骨徹髓見透して始めて得べし、俱胝庵中に一童子あり。外に於いて人に詰められて和尙尋常何の法を以てか人に示すと曰はれて、童子指頭を竪起す。歸りて師に擧似す。俱胝刀を以つて其の指を斷つ。童子叫喚して走り出づ。俱胝召すこと一聲。童子首を回へす。俱

胝却りて指頭を竪起す。童子豁然として領解す。且らく道へ箇の什麼の道理をか見る。遷化に至るに及んで家に謂つて曰く、吾れ天龍一指頭の禪を得て、平生用ひ盡さず會せんと要すやと云ふて指頭を竪起して便ち脫去す。後來明招の獨眼龍、國泰の深師叔に問ふて云く、古人道く、俱胝只三行の咒を念じて便ち名一切の人に超ゆることを得たりと。作麼生が他のために三行の咒を拈却せん。深亦一指頭を竪起す。招曰く、今日に因らずんば爭かでか這の瓜州の客を識得せんと。且らく道へ意そもさん。秘魔は平生只一拶を用ふ。打地和尙は凡そ所問あれば只地を打すること一下す。後人は他の棒を藏却して如何なるか是れ佛と問はれて、他只口を張る、亦是れ一生用い盡さず。無業云く、祖師此の土に大乘の根器有ることを見て、唯心印を單傳して迷塗を指示す。之れを得るものは愚と智と凡と聖とを揀ばず。且つ虛の多からんより實の少なからんには如かず。大丈夫の漢、卽今直下に休歇し去りて、頓に萬緣を息し去らば、生死の流れを超へて迥かに常格を出づ。縱ひ眷屬莊嚴あるも、求めざるに自ら得。無業一生凡そ所問有れば、只道ふ妄想する莫れと。所以に道ふ一處透れば千處萬處一時に透る。一機明きらむれば千機萬機一時に明きらむと。如今の人總に不恁麼。只管に意を恣にして情解して他の古人省要の處を會せず。他豈に是れ機關轉換の處なからざらんや。什麼としてか只一指頭を用ふる。須らく知るべし俱胝這の裏に到りて深密爲人の處あることを。省力を會得せんと要すや。他の圓明の寒する時は則ち普天普地寒し。熱する時は則ち普天普地熱すと道ふにかへす。山河大地、通上孤危、森羅萬象、徹下嶮峻。什麼の處よりか一指頭の禪を得來る。

【字解】一。會も又恁麼にして去り不會も也た恁麼にして去る。此の老和尙中中ずるい人であつて、會も不會も是も非も何も角も悉く指一本で仕舞はれたと云ふことであるが、此の指一本こそ實に此上もない調法な指で鍼に一生用ひきつても用いつくされぬ結構な指であつた。故に予の友人で此の指を見て來た人が此の指に、此の指一本價い千金と云ふ張り札があつたと云ふことを話して居つた。

二。圓明。　德山の緣密圓明大師のことで、大師は雲門大師の法を嗣いだ人である。

三。初め住庵の時一尼あり。　這の老尼之れ何者であらう、野狐か白牯か或は又觀音の普門示現であらうか。傍らに人ありて云ふ。是れは是れ觀音大士佛心印を傳ふと。

四。丈夫の形に處すと雖も而も丈夫の氣なし。　丈夫とは大丈夫で男子のことである、男子でありながら男子の意氣なくして何としやう、實際尼を見よ、尼は之れ普門示現か、實業の凡夫か、恐らくは獅子奮迅の文殊大士であらう。

五。遂に發憤して此事を明めんと欲す。　此れが吾が宗の大信心である。吾れ此の事を明めずんば死すとも休せず、何人も此の位ゐの大勇猛心大菩提心がなければならぬ。さもなければ實際尼に笑はれることであらう。

六。打疊行脚せんとす。　打疊とは何も角もヒッ疊んで捨却することで、經もいらず論もいらず、祖錄祖釋皆之れ不淨をぬぐふの故紙とある。三衣一鉢こそ之れ沙門の通規であるからと云ふがそんなものはどうでもよい。妄想妄念を脫却し單刀直入驀頭に進んで見よ、淸風明月之れを用ゆるに不盡、實に何とも面白いことである。

七。天龍和尙。　杭州の天龍和尙は大海山の法嗣祖師の法を嗣いだ人である。僧あり問ふ。如何か是れ祖師西來意。師拂子を竪起す。僧問ふ。如何か三界を得出し去らん。師云く、汝卽今什麼の處にか在る。と云つた樣な人である。

八。鄭重に專注す。　ワキ目も振らず、縱橫も見ず純一無雜に志すことである。何人か見透得するも鄭重に專注し見透得せ

ざるも鄭重に專注するものであらう。ナマ兵法は大疵の本と云ふから、人人各自綿密なれ鄭重なれと云ふより外はない。

九。長慶道く。　美食は飽人の喫に中らず。長慶は福州長慶の慧稜禪師と申した人で雪峰大師の法を嗣いだ人である。俱胝和尚の一指はイカサマ甘まそうなるが、長慶などには鼻についてとても食はれそうにもないと云はれたものと見へる。百味の飲食も餓鬼が見れば火になると云ふことであるからいかさまそうであらう。

一〇。玄沙道く。　我れ當時若し見ば指頭を拗折せんと。玄沙は福州玄沙の宗一大師で同じく雪峰の法を嗣いだ人である。此の和尚エライ人の惡いことを云いだしたもので俱胝の一指ナンテ拙僧が當時若し居つたならばヒンネジツてへこまそふものをと云ふて居られる。然し玄沙も何れ口の先き丈けのことであらう。

一一。玄覺。　玄覺は金陵報慈道場の沙門で謀は行言と申した人である。受法の師は清益文益禪師である。

一二。雲居錫。　洪州雲居山眞如院の沙門清錫禪師と申した人で同じく清涼文益禪師の法を嗣いで淳化二年に入寂した人である。

一三。先曹山。　撫州曹山の本寂禪師と申した方で曹洞宗の高祖洞山大師の法を嗣いだ人である。唐昭宗の天福元年六月壽六十有二で以つて入寂せられた。（一說天福三年）元證大師と諡す。

一四。莽鹵なり。　莊子則陽篇に君爲レ政焉勿二莽鹵一とありて其の註に猶粗率也とあるから即ち不精の貌である。

一五。西園。　南岳西園寺の曇藏禪師と申した人で馬祖大師の法を嗣いだ人である。

一六。俱胝庵中に一童子あり。　俱胝和尚の秘藏弟子である。或る時人からして和尚尋常何の法を以つてか人に示すと問はれて、一指頭を竪起して之れに示し、其の後庵に歸つてから門に此の事を告げたところが、俱胝和尚はスカサズ其の指頭を切つてしまはれた。童子が大に驚いて叫喚の聲を發しつゝ逃げ出した處が、其の時和尚か寺内から童子の名を喚ばれたから、フトふりかへつて見ると和尚は例の如く一指を竪立して居られた。童子は之れを見るや否や豁然として大悟したと云ふことである。

一七。明招の獨眼龍。　明招の德謙禪師は法を羅山道閑禪師に嗣いだ人である。左眼をいためて居られたから時人多く明招の獨眼龍と稱したと云ふことである。

一八。國泰の深師叔。　婺州金華山國泰院の琛禪師と申した方で玄沙師備大師の法を嗣いだ方である。玄沙は雪峰の法嗣で德山の孫であり、羅山道閑は嵩頭の法嗣で同じく德山の孫である。

一九。三行呪。　婺州の俱胝寺は俱胝觀世音の名に因んで立てたものであつて俱胝和尚は爰に居られたのである。俱胝佛母准提陀羅尼經に俱胝觀音が呪を說いてある。南謨颯哆喃三藐三勃陀俱胝南怛姪他唵所戾主戾准提婆婆訶と云ふが之れである。

二〇。瓜州の客。　瓜州は楊州の楊子州の北にあつて婺州を去ること一千餘里支那里程の處にある地名である。國泰院は卽ち此の地にあるものであるから瑞和尚を稱するに瓜州客を以つてしたのである。

二一。秘魔。　五臺山秘魔巖和尚は荊州永泰寺の靈湍禪師の法を嗣いだ人である。常に一木叉を持して、僧の來つて禮拜するもの〻ある毎に、其の木叉で以つて頸を叉却して、那箇の魔魅が汝をして出家せしめ、那箇の魔魅が汝をして行脚せしむ、道ひ得るも又叉下に死なしめ。云ひ得ざるも也た叉下に死せしめんと拶着せられたと云ふことである。

二二。打地和尚。　忻州の打地和尚は、法を馬祖大師に嗣いだ人で自ら其の名を晦して嘗つて其の名を出されなかつたと云ふことである。諸方の雲衲が來て問答を始めると、何にも答へずして唯棒を有つて地面を打つて之れに示されたから時の人が打地和尚と云ふ名をつけたと云ふことである。

二三。無業。　汾州の無業禪師と申した方が矢張り馬大師から法を承けた人である。長慶三年に六十二歲を以つて入寂せられた。大達同師と云ふが其の勅號である。

二四。愚と智を揀ばず。　智愚賢不肖凡聖道俗そんなことはどうでも宜いので只此の心印を開示し直接の敎旨を得さへすれば、卽ち佛祖の位中に入つたもので、光明遍照十方世界。實にまばい〻計りの佛となつたのである。千卷萬卷の書物を積ん

だところで何の役にも立たぬ。論語讀みの論語知らずと申して丁度清正の猿が書物を弄したやうなものである。それで吾人も虚の多からんより實の少なからんに如かずと申して、一紙半紙でもかまはぬ。要は只實處を悟ると否とにあるのである。

二五。 卽今直下に休歇し去りて頓に萬緣を息し去らば生死の流れを超へて適かに當格を出づ。　これは何も庚申様のお猿を氣取つて眼を閉ぢ耳をふさぎ口を閉づると云ふのではない。六根此の儘、戸障子たてふさがずに、只分別念慮をやめる迄のことである。卽ち見て見へず聞いて聞こへずと云ふ、無念無想の三昧に入ることである。

二六。 一處透れば千處萬處一時に透る。　此れが教家で申せば信滿成佛と云ふところで十信の萬位に入るや忽ちにして妙覺果滿の佛陀となると云ふ法相で丁度南枝の梅が一輪二輪開き初むれば早や春が來た兆候であるやうなものである。

二七。 古人省要のところ。　省は反省要は肝要であるから肝心カナメの目の注けところと云ふに同じ。

二八。 山河大地通上孤危萬象森羅徹下嶮峻。　上み霄漢に徹し下黄泉に通じ孤危嶮峻にして一指の竪起すべきすきまもなく實に一物として寄り附きうべきものがらもない。然るに俱胝の一指頭が是くの如き森羅萬象を自由にあやつりうるとは實に不思議千萬なことではないか。

第五節　類則提唱

其一　莫妄想

無業和尚一生凡有所問只道莫妄想。下語云。針頭削鐵。

色相上の妄念心、輪廻を切斷して莫妄想と云はれた也。拶して云く、無業の何を問へども莫妄想と云はるゝを。衲僧向上の眼からは、何と見たぞ。辨じ見よ。曰く、向上の眼からは無業を莫妄想と見るぞ。是れ定辨也。又下語して云く、斬釘截鐵。針頭削鐵。蓋覆勦絶して云はれたぞ。蓋覆は殘處もなふ切斷しての義也。妄念、妄話、妄心を悉く云ふよと見切りてなり。針の先きの鐵ほども殘さず削りたて切斷して也。拶して云く、衲僧向上の眼からは、無業の莫妄想と云はれたを、何と用ゆるぞ代りて辨じ來れ。曰く、衲僧分上の上の眼からは、無業に一重さしあがつて切斷するぞ。莫妄想はと云はるゝ無業も莫妄想也。色相を受けて切斷だてをするは莫妄想よと衲僧は用切た也。先師下語に上無攀仰下絶已窮。

其二　如何是一處

一處透千處萬處一時透如何是一處。下語云。只管由之。

一處とは本分を指して云ふ也。只管は一向と云ふ心ぞ。又畢竟と云ふ心ぞ。又タヾと云ふ心ぞ。此の一則因緣を參得して、殊勝なと思ふて脚實地を蹈み、何たる事がありとも、喪身失命を顧みず、其志を成し遂ぐれば、立身をもして先師の後を嗣ぐことも出來る。これこそ千處萬處一時に透つた者よ。志を遂げてこそ秘事秘曲をも傳へ得て、兒孫を續けて佛祖の息をば報せうずれ。是れ先師の辨なり。又先師の沙汰に。無道心な者や。愚鈍な者は、此古則を參しても不信仰ぞ。信せぬ故に受用せず、受用せぬ故に不信ぞ。又先師の沙汰に、此古則參しては、師家への洒掃又進

退が大事也と云々。

如何是一處。下語云。直透萬重關不住青霄裡。

此も一處と云ふは本分也。千處萬處と云ふは境界を指すなり、言は萬境界と云ふも盡く本分の眼から見たてたことちや程に、本分をだに打つてのければ、萬境界は悉く其の内に在ると云ふ義ぞ。下語の心は、本分の眼から萬境界を打つてのけて、其上で又本分をも打つてのくると言ふ心ぞ。萬重關と言ふは、萬境界を云ふ。又萬重關は色相を言ふたぞ。こゝは萬境界を云ふと云ふがよし。青霄裡は本分を云ふぞ。拶して云く、如何なるか是れ一處。一句を一處と言ふぞ。一句透れば千句萬句一返に透るほどに一處とは一句を云ふぞ。先師の時より、此古則に就いて御沙汰あり。此辨に參得する時は、一則半則參得したる師家なりとも、アダニナ思ひぞと也。其故は一句透れば千句萬句一返に透る程に、一則も千七百則も同じ事なり。

其三　俱胝只念三行咒

明招、獨眼龍問國泰、深師叔云。古人云、俱胝只念三行、咒便得名超一切、人作麼生與他拈却三行、咒。下語云。問在答處。

答話を開くべきため也。三行咒は俱胝佛母陀羅尼と云ふて二行ある咒なり。俱胝和尚は平生觀音を信じて、不斷此咒を唱へて其後語ると云云。故に俱胝と名づく。又三行咒は、消災咒なりと云々。

深亦竪起一指頭。下語云。作者千里同趣。突出難辨。

招曰不因今日爭識得這瓜州客。下語云。因苗辨地。

俱胝に知音なり。瓜州は瓜の道地俱胝の居處なり。堺の草部屋の女房辭世に云く、我去りて何くへ行くと人問はゞ、峰の松風谷の川音。養叟に向つて、三十年月日風凉し、鐵船に帆を張りて虛空に去る。折にふれ時にしたごふ言の葉を、そむかぬ道やまことなるらん。

其四　秘魔一扠

秘魔平生只用一扠。下語云。無孔鐵鎚當面擲。

一扠はマタブリ也。是れを本分に用いて平生學者に接するにも、亦作家相見にも本分を爲人するなり。本分の六合に充塞した如く、此一扠の上にもるゝことなし、何をも畢竟して一扠の上を本分に用ふ。見せしめて爲人すると云々。

其五　打地命尙

打地和尚凡有所問一只打レ地一下。下語云。無孔鐵鎚當面擲。

本分の言説に及ばぬ處を擲て見せて爲人したぞ。

後被下人藏却他棒一劫問如何是佛上他只張レ口。下語云。兩賽一彩。

前に本分を擲て見せしめたも、又爰で口を張りて見せたも同意ぞ。本分の上は口で云はれぬ處を爲人して見せたぞ。故に前後を兩賽一彩と下語するなり。

第六節　頌

對揚深愛老倶胝　癩兒率伴。同道方知。不免是一機一境。宇宙空來更有レ誰　一箇。三箇更有一箇。也須打殺　曾向滄溟下浮木　全是這箇。是則是大孤峻生。破草鞋。有什麼用處　夜濤相共接盲龜　撈天摸地。有什麼了期。接得塩作何用。據令而行。趕向無佛世界。接得闍黎一箇瞎漢

【講方】　對揚深く愛す老倶胝。癩兒伴を率く。同道まさに知る。免れず是れ一機一境。宇宙空じ來る更に誰か有る。兩箇三箇更に一箇有り。也た須らく打殺すべし。曾つて滄溟に向つて浮木を下す。全く是れ這箇。是は則ち是なるも大孤峻生。破草鞋。什麼の用處かあらん。夜濤相共に盲龜に接す。天を撈し地を摸す。什麼の了期かあらん。接得して何の用を作すに堪へん。令に據て行す。趕向無佛世界に趕向せん。闍梨一箇の瞎漢を接し得たり。

【字解】　一。癩兒伴を率く。　癩病人の行列、カツタイの友引であるそうな。雪竇同類を引き集められたと見へる。

二。同道まさに知る。　蛇の道は反鼻が知ると云ふことであるから深く愛すは尤もなことである。

三。免れず是れ一機一境。　雪竇何程褒められても。一機一境のカルハズミに過ぎないであるから。本分の十成とは申されまい。

四。兩箇三箇更に一箇あり。　一指頭の禪は古今獨歩で上下唯一人。倶胝老人の一人舞臺ぢやと申さるが、千人萬人中には一人位は有りそうなものである。

五。也た須らく打殺すべし。　一人位いは有るまいものでもないから。連れて來てゴロウジ。一棒下に打殺して、其の堅てた一指頭もネツ折つて見やう程に。ナゼか、似世物か多い程に。

六。全く是れ這箇。　雪竇の仰せ通り、全くそれにちがひない、圜悟も尤もに存ずる。

七。是は則ち是なるも大孤峻生。　好いことは好いが、取り付きやうがない、ウツカリ行くと怪我するであらう。

八。破草鞋。　破れ草鞋で何の役にも立たぬと云ふ。これは指頭上をいくら穿索したとて決して一指頭の妙味はわかるものでないと申したものである。

九。什麼の用處かあらん。　逢磨隻履を攜へて西天に歸られたと云ふことであるが道の狂人め。そんな眞似をして何にならうと云ふ。

一〇。天を撈し地を摸して什麼の了期かあらん。　其處らの蚯蚓や鰌では何程あつても到底雲を起し風を出して昇天することは出來ぬ。生死業海に沈淪して居てはイクラ尋ね廻つても所詮無有出離之緣で、餘計な心配をするだけ野暮な位である。

一一。接得して何の用をか作すに堪へん。　盲龜であるからいくら接得したところで仕方がない。

一二。令に據て行す。　法律通りに所刑するより外はあるまい。

一三。無佛世界に趕向せん。　倶胝和尚それでは餘りに手ぬるいから無佛世界へ逐い出して仕舞つた方が宜しからう。

一四。闍梨一箇の瞎漢を接し得たり。　瞎漢は盲人のことである。犬も歩けば棒にあるくと云ふから倶胝和尚もとうとう一

童子を接得し得られたと云ふ。

【講義】　對揚深く愛す老倶胝。對揚は人に應對して宗旨を擧揚することである。宗乘を擧揚して人を接化する手段は千佛萬祖それ〳〵一家風があつて、各々特有の方法があるけれども、這の倶胝老人の如く、佛とも云はず法とも云はず迷とも云はず悟とも云はず、凡て所問あれば必ず一指頭を竪てゝ示されたと云ふ家風は又珍らしい。如何にも面白い。奇特である。宇宙空じ來りて更に誰かある。佛祖ありてよりこのかた。人を接するに一指頭を以つてして而も一生受用不盡底の衲僧がどこにあらう。宇宙法界三世十方に渉りて佛々祖々を悉く檢し來り檢し去つても、此の倶胝老人の如き人は亦とあるまい、カッタイの道連れと人に笑はれるかも知れんが、拙僧も一つ仲間入りをしましようと雪竇老人飽くまでもほれこんで仕舞つた。曾つて滄溟に向つて浮木を下す。これは法華經や華嚴經に出て居る盲龜浮木の譬を借りて來たのである。大海の中に一疋の龜が居て、其の龜は腹の下に目が一つあるのみであるから、一生涯の間天上を仰いで日を見ることが出來ぬ。ところへ偶々孔の一つあいた木片が流れて來たものであるから、これ幸いとその木に取り附いて其の孔のところへ腹の下の目をあてゝ始めて天日を見ることが出來たと云ふ話である。そこで曾つて滄溟に向つて浮木を下すと云ふたのは三世の諸佛歴代の祖師が、種々に方便をめぐらし手段を設けて法を說き道を弘められたことを申したもので、若し之れを第二義門衆生濟度と云ふ方面から見れば、誠に止むを得ないことであるけれども、若し第一義諦の本分事上より見るときは一切衆生本來成佛であるから迷ふて居る衆生もなけらねば、說くべき法もない。盡大地元來飢人なし。それを兎や角云ふのは實に餘計なことゝ申さねばならぬ。夜濤相共に盲龜を接す。その浮木を下すと云ふのも青天白日風靜かに波穩やかなところへ下したのではない暗黑々で暗夜の而も怒濤天地もくつがへさん計りの眞只中へ、千佛だの萬祖だのと云ふ多くの世話燒き連が、東語西語して四の五の八百を說き、相共に盲龜を接し盲目どもを相手にして得意がつて居るが、それで一體どうしやうと云ふのであらう。然るに倶胝和尙が迷とも悟とも盲龜とも浮木とも佛とも法とも何とも角ともそんな抹香臭いことは一切ぬきにして、凡そ所問あれば只一指頭を立てゝ之れに示す。其の妙味は實に天下一品で恐らく三千大千世界を鐵の草鞋をはいて搜し廻つても決して見つかることはなからうと思はれる、と飽く迄も其の境界を稱揚したものである。

第七節　頌評唱和譯

雪竇四六の文章を會して七通八達なり。凡そ是れ誦訛奇特の公案は、偏へに去つて頌することを愛す。對揚深く愛す老倶胝。宇宙空じ來るに更に誰か有んと。今時の學者古人を抑揚す。或は賓或は主、一問一答、當面に提持して此の如く爲人の處あり。所以に道ふ對揚深く愛す老倶胝と。

且らく道へ雪竇他を愛して什麼にか有さん。天地開闢より以來更に誰人がある。只是れ俱胝老一箇なり。若し是れ別人ならば須らく參雜すべし。唯是れ俱胝老、只一指頭を用ひて直に老死に至る。時の人多く邪解して道ふ。山河大地も也た空し。人も也た空し。法も也た空し。直饒宇宙一時に空じ來るも只是れ俱胝老一箇と。且得沒交渉。曾つて滄溟に向つて浮木を下す。如今之れを生死海と謂ふ。衆生業海の中に在りて頭出頭沒して自己を明めずして出期あることなし。俱胝老、慈を垂れ物を接し生死海の中に於いて一指頭を用ゐて人を接す。浮木を下して盲龜を接するに似て相似たり。諸の衆生をして彼岸に到ることを得せしむ。夜濤相共に盲龜を接す。法華經に云く。一眼の龜浮木の孔に値ふて沒溺の患なきが如しと。大善知識一箇の龍の如く虎に似たる底の漢を接得して、他をして有佛世界に向つて互に賓主となり、無佛世界に要津を坐斷せしむ。箇の盲龜を接得して何の用をか作すに堪へん。

【字義】一。四六文章。　一に駢儷とも稱して徐庾詔と云ふ人が始めたと云ふことである。
二。宇宙。　天地四方を宇と云ひ古往今來を宙と云ふと申して天地間と云ふ程のことである。
三。別人ならば須らく參雜すべし。　參雜は參錯間雜であるから、餘の宗匠ならば或は棒し或は喝し幾多無量の手段方法を弄せられるけれども俱胝老人は只飽く迄も指一本で生涯つきとをされたと云ふことである。
四。一眼の龜。　これは法華經の妙花嚴王品に淨德夫人の子淨藏淨眼の二人が其の兩親へ佛の難値難遇なることを話す下に出てある因緣である。

第二十則　龍牙禪板

第一節　垂示

垂示云。堆山積嶽。撞墻磕壁。佇思停機。一場苦屈。或有箇漢出來。掀翻大海。踢倒須彌。喝散白雲。打破虛空。直下向一機一境。坐斷天下人舌頭。無爾近傍處。且道從上來。是什麼人曾恁麼。試擧看。

【讀方】堆山積嶽。撞墻磕壁。佇思停機せば一場の苦屈、或は箇の漢有つて出で來つて、大海を掀翻し須彌を踢倒し、白雲を喝散し虛空を打破して、直下に一機一境に向つて、天下人の舌頭を坐斷せば、爾が近傍の處無けん、且くは道へ從上來是れ什麼人か曾て恁麼なる。試みに擧す看よ。

【字解】一。山に堆く嶽に積み墻を撞ち壁を磕く。　これ本體本性の常住普遍にして、無限の空間に充滿して居る形容である。
二。大海を掀翻し。　掀は手を以つて高く擧ぐなりで、高く擧出すること、大海をヒツさげてさかさまにすると云ふ意。

【講義】右に左に前に後に、上下四維踏みすべつてころぶ程有り餘りて居るものは之れ什麼ものであらう。上み霄漢に徹し下黃泉を貫ぬき。進んでも退きても右に往きても、左に往きても撞き當

り行き當たる底のものは是れ何物であらう。無限の空間に充滿して行く處到る處にあらざるなきものを佇思停機と彼れか此れかと考へたり工夫したり、偖ては彼處此處尋ね廻りまはるとはこれも自業自得、吾れと我が手に苦勞すると云ふもの誠に氣の毒なこと、一場の苦屈である。然しそれとは反對に如龍如虎の漢と云はれる程の活漢があつて、龍宮にも通ずるてふ大海をヒックリ返へし、或は須彌を蹋倒すと、宇宙の森羅萬象を手さき足さきで蹴とばしはねとばして眼中に一物をも留めず、其の又上に、白雲を喝散し虛空を打破して、萬岳重疊カサナリ〳〵つた白雲黑雲を一喝して消し散らしてしまひ、盡虛空界を一棒の下に打破して仕舞ふと云ふ風に有とか無とか非有とか非無とか所有る思慮分別を脫却し去る底の境界でありたならば、直下に一機一境に向つて天下人の舌頭を坐斷し盡くしてキットモ云はせぬ働きがありて、如何なる場合にも自由自在を得て誰も何とも言ふことが出來ないから、爾が近傍する處なからん、如何なる人も傍へ寄り附くことが出來ないことになる。然らば昔から誰れか其の樣なことを實行した人があつたか、且らく道へ從上來是れ什麼人が恁麼にし來たる、果してあつたかどうか。翠微臨濟の如きその人であるから試みに擧す看よと公案に結歸した。

第二節　本則

擧龍牙問翠微如何是祖師西來意諸方舊公案再問也要勘過。微云。與我過禪板來作什麼。消合放過。喝牙過禪板與翠微也是把不住。解騎。可惜許。駕與青龍不承當。微接得便打着。打得箇死漢濟甚事。也落在第二頭了牙云。打即任打。要且無祖師西來意這漢話在第二頭。賊過後張弓牙又問臨濟。如何是祖師西來意諸方舊公案再問將來。不直半文錢濟云。與我過蒲團來曹溪波浪如相似無限平人被陸沉。一狀領過。一坑埋却牙取蒲團過與臨濟依前把不住。依前不伶俐。依稀越國髣髴楊州濟接得便打着。可惜打這般死漢。一模脫出。牙云。打即任打。要且無祖師西來意。灼然。在鬼窟裏作活計。將謂得便宜。賊過後張弓

【讀方】 擧す。龍牙翠微に問ふ。如何なるか是れ祖師西來意。諸方の舊話也た勘過を要す　微云く、我が與めに禪板を過し來れ。禪板を用いて什麼かせん。洎んど放過すべし。喝　牙禪板を過して翠微に與ふ也た是れ把不住。青龍に髣髴すれども騎ることを解せず。可惜許。當面に承當せず微接得して便ち打つ　著。箇の死漢を打着して甚事をか濟さん。也た是れ第二頭に落在し了れり　牙云く打ことは卽ち打つに任す、要は且つ祖師西來意無し這の漢第二頭に話在す賊過ぎて後弓を張る。牙又臨濟に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意　諸方の舊公案再び將ち來る。半文錢に直らず。濟云く我が與に蒲團を過し來れ。曹溪の波浪如し相似たらば限りなき平人も陸沈せられん。一狀に領過す。一坑に埋却す。牙蒲團を取つて臨濟に過與す　依然として把不住。依然として不伶俐。越國に依稀として楊州に彷彿たり。濟接得して便ち打つ　著。惜む可し這般の死漢を打ちたること。一模に脫出す　牙云く打つことは卽ち打つに任かす。要は且つ祖師再來意無し　灼然。鬼窟裏に在りて活計を作す。將に謂へり便

宜を得たり。賊過ぎて後弓を張る。

【字解】一。龍牙。　湖南の龍牙山妙濟院の居遁禪師ぼ。法を青原下の五世洞山悟本禪師に嗣いだ人で梁の龍德三年九月十三日に示寂せられた、壽八十有九。

二。翠微、　京兆終南山の翠微無學禪師ぞ。法を青原下の三世丹霞天然禪師に嗣いだ人で。龍牙の祖父の雲岩とは法の從兄弟に當る人であるから龍牙より餘程老僧である。

三。諸方の舊話。　祖師西來意など云ふ問題は既に陳腐な話で。アチコチ諸方の茶呑雜談に過ぎない。

四。也た勘過を要す。　陳腐な問題を持ち出して、翠微を勘檢しやうとするのか。定めし面白いことになるであらふぞ。サスガは龍牙である、老僧へのサヤアテ、何樣一角の見處もあらう。

五。禪板。　倚板のこと、倚板は勞を除かん爲めに僧私に皆畜ふることを許すと申して、僧とは大衆のこと、私は各々自身と云ふこと長く坐禪をして疲れた時に、チヨイと倚りかゝる爲めに作つたもので安樂椅子と云ふ程のものである。

六。禪板を用いて什麼かせん。　翠微老人禪板を取りて吳れなどゝは、手ヌルイナセ持合せの拄杖で打たぬか。咄。這の青小僧奴。

七。消んど放過すべし。　打つべきものを打たずにおくのは大方取りにがしたのであらう。

八。喚。　龍牙活氣を働いたらば、老僧却りて打たれようにアブナイ。頼みないことである。

九。也た是れ把不住。　龍牙も手ぬるい。やる場でないに。取り止めも無いことである。

一〇。青龍に駕與すれども騎ることを解せず。　青龍とも言はるべき名馬を、授けられながら、騎ることを知らないとは、龍牙も意氣地がなさすぎる。殘り多いこと。

一一。可惜許。　サテ〳〵惜しいこと。

一二。當面に承當せず。　禪板を過し來れの一言下に豁然大悟眼を開かればならぬことであるに。惜しいかな金的がはづれた。

一三。着。ヒツシヤリと打つた。　好いうちどころ。

一四。箇の死漢を打着して甚事をか濟さん。　イヤ打つても死漢であるから。役には立つまい。彼底を打つた分では、老僧の手腕も知れたもの、香ばしいこともござるまい。

一五。也た是れ第二頭に落在し了れり。　イクラ打つても死漢である。土人形である。一番鎗とは申されまい。氣の毒なこと。

一六。這の漢第二頭に話在す。　己れの身分をも知らずにへらずに口をたゝひて居る。憐れな奴。いくら打れても口はへらぬそうな。

一七。賊過ぎて後弓を張る。　何程云ひやつても、賊過ぎて棒チギリ。役には立たぬ。

一八。臨濟。　吾が臨濟禪の高祖、鎭州の臨濟義玄禪師は。南嶽下の第四世黄檗希運禪師の上足である。唐の咸通七年四月十日入寂。塔を澄靈と云ひ、諡號を慧照禪師と申された。

一九。諸方の舊公案再び將ち來る。　腐り物に銀蠅、サテサテうるさいこと。

二〇。半文錢に直らず。　翠微の處ですら一文にもならぬものをこんな賣り殘りの品に、何の値打があらうぞ。

二一。曹溪の波浪如し相似たらば限りなき平人も陸沈せられん。　翠微も臨濟も同じ曹溪の法源であるから、似て居るなどゝ思ふたら宗旨は見へぬぞ。翠微には翠微の眉毛があり臨濟には臨濟の眼目がある。佛法がそんな人眞似で濟むならば一切衆生悉く墮落して。無間地獄の正客となるより外はない。陸沈は陸地で沈溺すると云ふのだから隱遁する意味であるが、爰では失敗すると云ふ程の意味に用ひたものである。

二二。一狀に領過す。　翠微臨濟の二尊宿共に龍牙の罪科を一狀に領過したと云ふ。

二三。一坑に埋却せん。　三人共に一つ穴にぶちこんで仕舞へ、ナセか。どれもこれも一狀の罪科よ。

二四。俟然として把不住。　いつも留り留めのない。

二五。依然として不伶俐。　いつ迄も愚かな奴である。

二六。越國に依倚して楊州に彷彿たり。　アチラヘ往つてもマゴ〳〵コチラヘ來てもマゴ〳〵と實につまらぬ男である。替つた働きもない雖義な男と云ふ。

二七。著。　ヒツシヤリ打つてそれ當つたか。

二八。惜しむべし這般の死漢を打ちたることを。　龍牙の皮の下に血があつたならば、今度こそは豁然大悟とゆく所であるにハテサテ埒もない。

二九。一模に脱出す。　翠微臨濟、一ツ模型より打ち出した相な。新機軸もない。

三〇。灼然。　龍牙相變らず。アヤもないことゝ思ふて居つたに果してそうである。

三一。鬼窟裡に在りて活計を作す、亡者の生活が何で人間の用に立たう。いつも空腹で居ながらの云い分、胃の腑が見へすいて居るぞと云ふ。

三二。將に謂へり便宜を得たり、　首尾よく臨濟を勘破したツモリであらうがアテが外づれた。金的は爰であるぞ。と指す。

三三。賊過ぎて後弓を張る。　役には立たぬ遲かりし由良之助と云ふ。

第三節　本則提唱

龍牙問翠微如何是祖師西來意下語云。問得可始得。

先師の下語に。打草驚蛇。金以火試。

微云與我過禪板來下語云。作賊人心虛。爾泥裏有棘。舌頭有骨。

眞直に答へたやふなれども、龍牙の働きを見たくて云ふたぞ。一方ムキにはないぞ。權實備りたるなり。先師の下語に、山是山水是水。尺長寸短

牙過禪板與翠微下語云。擔板漢。

眞直に心得て禪板を翠微に與へたぞ。横目をせぬぞ。先師の下語に、蹉過也不知。把頭做尾漢。

微接得便打下語云。正令當行。果然有之作。

牙の下足を見かけて打つたぞ。果然有之の句は微を褒美しての句ぞ。之作は作家の事よ。

先師の下語に斬釘截鐵。利劍斬覿面。

牙云打即任打要且無祖師西來意。下語云。棺木裡瞪眼。

先師は死水裏に話計を作すとつけられたぞ。

又問臨濟如何是祖師西來意下語云。一處不通兩處失功。

先師下語に未得休清風匠地とも惱亂春風卒未休とつけられてソロ。

濟云與我過蒲團來下語云。作者千里同趣。

翠微の働に似たと云ふ義ぞ。先師下語に、天高地厚。日暖風和。

牙過二蒲團一與二臨濟一下語云。一死不二再活一。死來多少時。

先師下語に、切忌隨レ地去。徒勞絃上聲。未レ識二琴中趣一

濟接得便打下語云。不二謾爲二臨濟一。

先師下語に、無孔鐵鎚當面擲

牙云打卽任レ打要且無二祖師西來意一下語云。幡亂春風卒不休。

此下語は句中を休まず問ふ方にも用ふぞ。爰では鈍な事を休まざる方に用ふる落句ぞ。問答の終にも處に依つて用ふるなり。先師下語に停囚非二汝境界一。

第四節　本則評唱和譯

翠巖の芝和尙云く、當時是くの如し。今時の禿子皮下還りて血有りや。溈山の喆云く、翠微臨濟謂つべし本分の宗師と。龍牙一等に是れ撥草瞻風す。妨げず後人のために龜鑑と作ることを。住院の後僧有り問ふ、和尙還りて當時二尊宿を肯ふや。牙云く、肯ふことは卽ち肯ふ。只是れ祖師西來意なしと。龍牙前を瞻後を顧みて病に應じて藥を與ふ。大溈は則ち然らず。伊が和尙當時還りて二尊宿を肯ふやと問はんを待ちて、明不明、劈脊に便ち打せん。惟れ翠微臨濟を扶竪するのみに非ず、亦來問に辜負せず。石門の聰云く、龍牙人の拶着する無くんば猶可なり。箇の禿子に挨着せられて、一隻眼を失却す。雪竇云く、臨濟翠微、只把住することを解して放開することを解せず。我當時もし龍牙ならば、伊が蒲團禪板を索むるを待つて、拈起して劈面に便ち擲たん。五祖の戒云く、和尙恁麼に面長なることを得たり。或は云く、祖師土宿頭に臨むと。黃龍の新云く龍牙耕夫の牛を驅り飢人の食を奪ふ。既に明なることは則ち明なり。什麼に因りてか却りて祖師西來意なき。會すや。棒頭に眼あり明なること日の如し、眞金を識らんと要せば火裏に看よと。大凡そ要妙を激揚し宗乘を提唱せんには、第一機下に向つて明得して以て天下人の舌頭を坐斷すべし。儻し或は躊躇せば第二に落在せん。這の二老漢然も風を打し雨を打し天を驚かし地を動すと雖も、要且つ曾つて箇の明眼の漢を打着せず。古人の參禪多少か辛苦する。大丈夫の志氣を立てゝ山川を經歷し尊宿に參見す。龍牙先づ翠微臨濟に參し後德山に參す。遂に問ふ學人鍫鏘の劒を仗んで師の頭を取んと擬する時如何。德山首を引きて云く。牙云く。師の頭落ちぬ、山微笑して休し去る。次に洞山に到る。洞山問ふ。近離甚の處ぞ。牙云く。德山より來る。洞山云く。德山何の言句かありし。牙遂に前話を擧す。洞山云く、他什麼とか道いし。牙云く、他語無し。洞山云ふ。道ふこと莫れ語無しと。且らく試みに德山落る底の頭を將て老僧に呈似せよ看ん。牙此に於いて省あり。逐に香を焚いて遙かに德山を望んで禮拜懺悔す。德山聞きて云く。洞山老漢好惡を識らず。這の漢死し來ること多少時ぞ。救ひ得とも什麼の用處があらん。從他れ老僧が頭を

擔ひ天下を遶ぐつて走ることを。龍牙根性聰敏。一肚皮の禪を擔つて行脚す。直ちに長安の翠微に向つて便ち問ふ。如何なるか是れ祖師西來意。微云く我がために禪板を過ごし來れ。牙禪板を取りて微に與ふ。微接得して便ち打つ。牙云く。打つことは卽ち打つに任す。要且つ祖師西來の意無し。(又臨濟に向ふ。如何なるか是れ祖師西來意。濟云く。我がために蒲團を過ごし來れ。牙蒲團を取つて臨濟に與ふ。濟接得して便ち打つ。牙云く。打つことは卽ち打つに任す。要且つ祖師西來の意無し)とに括弧の内一本。削除せり　他箇の問端を致す。妨げじ他の曲碌。木床上の老漢を見んと要し亦自己一般の大事を明んと要することを。謂つべし言虛りに設けず、機亂りに發せず、做工夫の處に出在すと。見ずや五洩石頭に參す。先づ自ら約して曰く、若し一言に相契はゞ卽ち住まらん。然らずんば卽ち去らんと、石頭據座し洩拂袖して出づ。石頭是れ法器なることを知りて卽ち開示を垂る。洩其の旨を領せず告辭して出て門に到る。石頭之れを呼んで云く。閣黎と。洩回顧す。石頭云く。生より死に至る迄唯是れ這箇。頭を回へし腦を轉じて更に別に求むること莫れと洩言下に於ひて大悟す。又麻谷錫を持して章敬に到りて禪床を遶ること三匝。錫を振ふこと一下。卓然として立つ。敬云く。是是と。又南泉に到りて依前として床を遶り錫を振ふて立つ。南泉云く、不是不是。此れは是れ風力の所轉。終に敗壞を成すと。谷云く。章敬は是と道ふ。和尙什麼としてか不是と道ふと。南泉云く、章敬は則ち是。是れ汝は不是と。古人也た妨げず提持して此の一件の事を透脫せんと要することを。如今の人纔かに問着すれば。全く些子の工夫を用ふる處無し。今日も也た只是れ恁麼。明日も也た只是れ恁麼。儞若し只恁麼ならば盡未來際にも也た未だ了する日あらず。須らく是れ精神を斗擻して始めて少分の相應有ることを得べし。儞看る龍牙一問を發して道く。如何なるか是れ祖師西來意。翠微云く、我がために禪板を過し來れと。牙微に過し與ふ。微接得して便ち打す。牙當時禪板を取るの時豈に翠微他を打んと要することを知らざらんや。也た便ち他會せずと道ふことを得す。什麼としてか却りて禪板を過ごして他に與ふ。且らく道へ、當機承當得するとき合に作麼生。他活水の處に向つて用いず。自ら死水裏に去りて活計を作して一向に主宰と作て便ち道ふ。打つことは卽ち打つに任す。要且つ祖師西來意無しと。又走りて河北に去りて臨濟に參す。依前として恁麼に問ふ。濟云く。我がために蒲團を過し來れ。牙濟に過し與ふ。濟接得して便ち打つ。牙云く。打つことは則ち打つに任す。要且つ祖師西來意無しと。且らく道へ。二尊宿又法嗣を同じくせず。什麼としてか答處相似て用處一般なる。須らく知るべし古人の一言一句亂りに施爲せざることを。他後來住院す。僧有り問ふて云く。和尙當時二尊宿に見みゆるに是れ他を肯ふか他を肯はざるか。牙云く、肯ふことは則ち肯ふ。要且つ祖師西來意無しと。爛泥裏に棘有り。放過して人に與ふ。已に第二に落つ。這の老漢把得定して只洞下の尊宿と做得たり。若し是れ德山臨濟の門下ならば、須らく知るべし別に生涯あることを。

若し是れ山僧ならば則ち然らず。只他に向つて道はん。肯ふことは卽ち未だ肯はず。要且つ祖師西來意なしと。見ずや僧大梅に問ふ。如何なるか是れ祖師西來意。梅云く。西來無意と。鹽官聞いて云く。一箇の棺材。兩箇の死漢。玄沙聞きて云く。鹽官は是れ作家と。雪竇道く三箇も也た有り。只這の僧祖師西來意を問ふが如くんば、却りて他に向つて道ふ西來無意と。儞若し恁麼に會せば無事界裏に墮在せん。所以に道ふ須らく活句に參すべし死句に參すること莫れ。活句下に薦得せば永劫にも忘せず。死句下に薦得せば自救不了と。龍牙恁麼に道ふ。妨げず善を盡すことを。古人道く。相續也た太に難しと。他の古人一言一句亂りに施爲せず。前後相照して權あり。實あり。照あり有あり。賓主歷然。互換縱橫。若し其の親切を辨せんと要せば、龍牙宗乘を昧さずと雖も第二頭に落在することを爾奈せん。當時二尊宿禪板蒲團を索む。牙他の意を知らずんばあるべからず。是他の胷襟裏事を用んと要す。然も如是なりと雖も。妨げず用ひ得て太だ峻なることを。龍牙恁麼に問ひ二老恁麼に答ふ。什麼としてか祖師西來意なき。這裏に到りて須らく知るべし別に箇の奇特の處あることを。雪竇拈出して人をして看せしむ。

【字解】翠巖芝和尙。　瑞州大愚の守芝禪師は、汾陽善昭禪師の嗣。後に翠巖に住せられた。

二。當時是くの如し。今時の衲子皮下還りて血ありや。　龍牙も中々の働き手であつたが。現時の衲子皮下に血が流れて居るかどうか。まさか土偶木偶でもあるまいに。

三。龍牙一等に撥草瞻風す。　翠微臨濟共に本分の宗師萬代の龜鑑であるが、龍牙も之れに劣らぬ宗匠。とりわけ萬代の龜鑑である。

潙山詰、潭州大潙の墓詰眞如禪師は。翠巖可眞の法を嗣いだ人である。

四。明不明劈脊に便ち打せん。　此僧明かうが明くまいが容赦はせぬぞ。

五。石門聰。　襄州石門の聰禪師は、大陽慧堅禪師の法を嗣いだ方である。

六。一隻眼を失却す。　二尊宿に見えて一隻眼を失ふたと思へば、今亦片眼をも失却したぞ。見えるかの。

七。只把住することを解して放開することを解せず。　此句一本に放を解して收を解せずとある。

八。五祖戒。　五祖山の師戒禪師は。隨州雙泉山師寬明敎大師の法を嗣いだ人である。

九。恁麼に面長なることを得たり。　面長とは謂ゆる恁麼に惺惺ならざることを得たりと云ふので、馬鹿馬鹿と長い顏でござると云ふ。

一〇。土宿。　土宿は乃ち天上五星の內の土曜星であつて。凶惡の辰也で、歲運之れに當るときは災害最も甚だしと云ふことである。爰では祖師大災に値ふことを悔ゆるなりと申して、南無三寶。龍牙爰でも身命絲すじの如くなられたそうな。風前の燈火である。氣の毒千萬なことと云ふ。

一一。黃龍新。　隆興府黃龍死心悟新禪師は、晦堂祖心禪師の法嗣、南嶽下の十三世。黃龍下第二世であつて、政和十年二月十四日に示寂せられた、世壽七十有二。

一二。棒頭に眼あり日の如し眞金を識らんと要せば火裏に看よ。　棒頭は翠頭臨濟二尊宿をさしたので、龍牙の眞金を識らんと思へば二尊宿の火裏にありて見ればならぬ。是れ眞金か之れ鉛塊か、諸人看取せよ。

一三。儻し或は躊躇せば第二に落在せん。　カツカリすると龍牙の二の舞をやられればならぬか、圓悟は、俠然として把不住取り留めがないぞと云ふ。

一四。囫。　音は和。船を牽くの聲であつて、日本人ならばホイホイと云ふ處。

一五。牙此に於いて省あり。大悲の普說に龍牙二尊宿に參ぜざる已前、此の事あるを知るとあるから此の評唱には間違ひがあるであらう。

一六。做工夫の處に出在す。　龍牙に諸方の宗師家を見拔かんとする工夫があつたぞ。コヲイコト。お手本御要心と云ふ。

一七。五洩石頭に參す。　五洩は婺州五洩山の靈默禪師で、馬祖の法を嗣いだ人で。傳には初め篠章の馬大師に謁す。馬之れに接す。因つて披剃受具。後に石頭に參すと云ふてある。

一八。生より死に至る迄只是れ這箇、頭を回し腦を轉じて更に別に求むること莫れ。　這箇は盡大地蹈み滑べるほどあるに、どこへ求め廻るぞ。此のウロタヘ者奴と云ふ處。

一九。麻谷。　蒲州麻谷山の寶徹禪師。馬祖の嗣。

二〇。章敬。　京風府章敬寺の懷惲禪師は馬祖の嗣。唐の元和十三年十二月二十二日示寂、大覺禪師と諡せられた。

二一。南泉。　池州南泉の普願禪師は。馬祖道一禪師の法嗣。大和八年十二月二十五日示寂。壽八十七。

二二。章敬は是と道ふ和尚恁麼としてか不是と道ふと。　人の言句に拈着して、自己の巴鼻を人に預けて居る此の間抜け奴と云ふ。

二三。此の一件の事。　一件は一段一章と云ふが如し。

二四。抖擻。　又斗藪に作る梵語の杜多或は頭陀の譯語であつて、煩惱の塵垢を拂ひ去りて菩提の道を求むるものゝことである。須らく是れ精神を抖擻して始めて少分の相應あるべしとは、人人各々蟠かまりがあつてはいかぬ。障りがあつてはいかぬから、一切の妄想妄念を拂ひのけてサッパリとなつて見よ。清風明月少分の所得があらうと云ふのである。

二五。且らく道へ當機承當時。　禪板を持つて來いと云ふ機に承當して。持つて行つた心はどうであらう。

二六。主宰。　自己本分の主宰をさす。

二七。二尊宿法嗣を同じくせず。　臨濟は黃檗の嗣であり、翠巖は丹霞の嗣である。

二八。大梅。法常禪師は馬祖の法を嗣いだ人。鹽官は杭州鹽官の齊安禪師で。同じく馬祖の法嗣。

二九。西來無意。　祖師の西來したも別に格段な心は無いと云ふ。是れは西來意中に死却したものであらう。

三〇。一箇の棺材兩箇の死漢。　祖師西來意の一箇の棺に死漢が二人もある。此のシミタレ奴と云ふ。

三一。三箇も也たあり。　玄沙も亦仲間入りしたから都合同行三人である。

三二。須らく活句に參すべし死句に參すること莫れ。　白黑の碁石に勝負は無い。活句死句は人によること。何をか死句と云ひ何をか活句と云はむ。お手本御要心。脚本に眼を着ければならぬ。

三三。別に箇の奇特處あり。　禪板が蒲團か、雪竇何か珍らしい物でもありますかと云ふ。

第五節　頌

龍牙山裏龍無眼瞎。漫別人卽得。泥裏洗土塊。天下人總知　死水何曾振古風。忽然活時無奈何。累天下人出頭不得　禪板蒲團不能用教阿誰說。爾要禪板蒲團作什麼。莫是分付闍梨麼　只應分付與盧公。也則分付不着。漆桶莫作這般見解

【讀方】　龍牙山裏龍に眼無し。瞎。別人を漫すること卽ち得たり。泥裏に土塊を洗ふ。天下の人總て知る　死水何んぞ曾つて古風を振はん　忽然として活する時奈何ともすること無らん。累天下人に及び出頭不得ならん。禪板蒲團を用ふること能はず　阿誰をして說かしめん。爾蒲團禪板を要して什麼をか作さん。是れ闍梨に分付すること莫しや。只應に分付して盧公に與ふべし　也た則ち分付不着ならん。漆桶這般の見解を作すこと莫れ。

【字解】一。瞎。　仰ぜの如く盲目で御座る。

二。別人を漫することは卽ち得たり。　龍牙を侮慢するは御勝手であるが。吾れ圜悟などはそう慢してくれまいぞと云ふ。

三。泥裏に土塊を洗ふ。　眼無しと云はれるが。似たり合つたり。サツパリと垢の拔けぬ云ひ方である。

四。天下の人總べて知る。　雪竇珍らしそうに云はれるが。龍牙に目のないことは知れたことで。天下誰れ知らぬものはないことぞ。

五。忽然として活する時奈何ともすること無らん。　雪竇餘り馬鹿にせられるな。死水裡の盲龍と思ふて居ても、若し遽に活し來たらば、奈何とも仕樣があるまい。

六。累天下に及び出頭不得ならん。　若しも是れが活龍となりて翔ることになつたらどうであらう。其の累盡天下に及んで誰一人として頭を擧ることは出來まい。

七。阿誰をして說かしめん。　禪板蒲團用ふる能はざる底の意旨を、誰れに辯護してもらうたら好からう。先づ阿誰かの。

八。儞蒲團禪板を要して什麼をか作さん。　雪竇頌りにもらひたがつて居られるが、其樣な不用な品を龍牙から受取りて何にせられるぞ。

九。是れ闍梨に分付すること莫しや。　龍牙はお前にお渡しするつもりであらう。

一〇。也た則ち分布不着ならん。　這固に本來やり取りがあらうか。橫合から手を出されては。龍牙は一寸まごつくであらふ。

一一。漆桶這般の見解を作すこと莫れ。　漆桶はカルシの桶だから眞暗で目も鼻も分らぬ貌である。諸人ウツカリして雪竇に欺さるゝな。蒲團禪板を分付せよなどゝは何のことだか分らぬでないかと云ふ。

【講義】　此の則には、雪竇の頌が前後に二首ありて、此れが卽ち前頌である。一體此の公案は龍牙が未だ充分悟りが開けない時であるから、此の公案で龍牙の生涯を見やうとするは誤りである。龍牙山裡龍に眼なし、死水何ぞ曾つて古風を振はん、龍牙和尙が大憤發を起して、翠微臨濟の二大家を勘檢にと出かけた機鋒は、雨を起すか風を起すか、見掛けた處實に立派な龍であるが。惜いことには眼がない盲龍である。向上の死水に穩坐して佛法禪道一機一境の古風を振ひ得ぬ自分免許の大龍である。其れ故に祖師西來無意なんと云ふ自讃の悟りを振りまはして御座る。天狗には相違ないが之れは木葉天狗である。それでどうして二大老の活手段を領得することが出來やう。禪板と云ひ蒲團と云ふて口に含めん計りの大活慈敎をも、少しも活用することが出來ぬ。それでどうして少林曹溪の古風を挑起することが出來やう。猫に小判の寶の持ち腐り。此の沒曉漢奴この結構な道具を使ふことが出來ぬのなら、吾れ雪竇に分付せよ。必ず翠微臨濟のやうな別人に渡されるなよ。何故ならば一機一境の働きしか出來ないから勿論のこと打つてもたゝいても祖師西來意があらう道理はない。それで我れ雪竇に與へよ。其方龍牙の本意を能く見得したからと云ふのが次の、蒲團禪板用ること能はずんば只應に分付して盧公に與ふべしと云ふ句意である。盧公は雪竇の別號で老人が正しく自分のことを云ふたものである。

第六節　評唱頌

【語方】　雪竇款に據りて案に結す。他恁麼に頌すと雖も且らく道へ。意什麼の處にかある。甚

れの處か是れ眼無き。甚れの處か是れ死水裏。這裏に到りて須らく變通ありて始めて得べし。所以に道ふ澄潭には許さず蒼龍の蟠ることを。死水何ぞ曾つて攀龍あらんと。道ふことを見ずや死水龍を藏せずと。若し是れ活底の龍ならば、須らく洪波浩渺白浪滔天の處に向つて去るべし。此れ龍牙走りて死水中に入り去りて人に打たるゝことを言ふ。他却つて道ふ。打つことは卽ち打つに任す。要且つ祖師西來意無しと。雪竇の死水何ぞ曾つて古風を振はんと道ふことを招き得たり。然も此の如くなりと雖も、且らく道へ雪竇是れ伊を扶持するか。是れ他の威光を減ずるか。人多く錯りて會して道ふ。什麼としてか只應に分付して盧公に與ふべき。殊に知らず却りて是れ龍牙分付して人に與ることを。大凡そ參請は須らく是れ機上に向つて辨別して方に他の古人相見の處を見るべし。禪板蒲團用ゆること能はずとは、翠微云く、我が爲めに禪板を過し來たれ。牙他に過與す。豈に是れ死水裏に活計を作すにあらずや、分明に是れ青龍を駕與すれども、只是れ他騎することを解せず。是れ用ゆること能はざるなり。只應に分付して盧公に與ふべし。往々喚んで六祖となすは非なり。曾つて分付して人に與へず。若し分付して人に與へて人を打たんことを要すと道はゞ。却つて箇の什麼とか成り去らん。昔し雪竇自ら呼んで盧公と爲す。他迹を晦して自ら貽すと云ふに題して。圖畫當年洞庭を愛す。彼心七十二峰青し。而して今高臥して前事を思へば、添へ得たり盧公が石屏に倚りしことを。雪竇龍牙の頭上に去りて行んことを恐れ。又人の錯まり會せんことを恐る。所以に別に頌して人の疑解を崩んことを要す。雪竇復拈して云く。

【字解】一。款に據りて案に結す。　龍牙と二尊宿の對機を。雪竇が款によりて公案に書き記された。款は因人の自白狀で卽ち豫審調書のことである。

二。且らく道へ意什麼の處にか在る。　龍に眼なしと雪竇は申されるが、これは抑へたのであらうか。揚げたのであらうか。

三。道ふことを見ずや。死水龍を藏さずと。　之れは首山省念禪師の申されたことである。僧あり首山に問ふ萬機喪盡する時如何。山曰く。死水不レ藏レ龍。

四。曾つて分付して人に與へず。　若し他人に分付して人を打たうと云ふのならば翠微や臨濟のやうな人には渡されるなら。なぜか。若し分付して打ちたり扣いたりするのならば龍牙の意には叶はぬから。

五。迹を晦して自ら貽す云々。　貽ば遺也貽也贈言也で。作りて以て自己に贈ると云ふ。吾れ死んだ後迹遺すとの意である。

六。圖畫當年愛洞庭。　盧公は雪竇老人の別號である。此詩は只盧公の事跡に引いたもので。雪竇が翠峯に住する時の作のやうであるけれども實は其れ以前の作であると云ふことである。一說に雪竇當時洞庭の翠峯に住し後雪竇に住されたが。翠峰の佳境を愛するの餘り此の作有りと云ふことである。詩の意は。當年は深く洞庭の景を愛し。周圍の連山より湖面に至り其の全景を圖に迄寫して愛したことであつたが、其の圖の中に今來て居る處を書き添へたと云ふのである。

七。龍牙頭上に去りて行んことを要す。　龍牙和尙は、打つことは卽ち打つに任すと云はれるが、何か奧歯に物のはさまつた樣で、サツパリとせぬ云いやうで。何やら西來意と云ふものがある樣に聞へると云ふ。

第七節　重頌

這老漢。也未レ得ニ勦絕一。復成ニ一頌一。灼然。能有幾人知。自知一半。賴有末後句。盧公付了亦何憑。地討

恁麼人也難得。敎誰領話。坐倚休將繼祖燈草裏漢。打入黑山下坐。落在鬼窟裏去也。堪對暮雲歸未合一箇半箇。擊着卽錯。果然出不得。遠山無限碧層層塞却儞眼塞却儞耳。沒溺深坑。更參三十年。

【講方】 這の老漢。也た未だ勦絶することを得ず。復一頌を成ず　灼然。能く幾人の知るありや。自ら知る一半に較れり。頼ひに末後の句あり。盧公に付し了るも亦何ぞ憑らん。盡大地恁麼の人を討ぬるに得がたし。誰なして領話せしめん。坐倚將て祖燈を繼ぐを休めよ。草裏の漢。黑山下に打入して坐す。鬼窟裏に落在し去るや。對するに堪へたり暮雲の歸り未だ合せざるに。一箇半箇。擊着せば卽ち錯らん。果然として出不得。遠山限り無し碧層々。儞が眼を塞却し儞が耳を塞却す。深坑に沒溺す。更に參せよ三十年。

【字解】 一。灼然。　雪竇申さるゝに及ばぬことよ。テツキリそうであらふぞ。サツパリ垢の抜けたこと。明歷分明なことである。

二。能く幾人の知ることありや。　老人ならでは龍牙の極意は知り得まい。

三。自ら知る一半に較れり。　前の頌丈けでは禪板蒲團の始末が附かぬ處を、能く自ら知られたのが慢打である。

四。頼ひに末後の句あり。　さすがは雪竇ぞ。

五。盡大地恁麼の人を討ぬるに得がたし。　世界中どの樣に搜し廻つても、雪竇の樣な大見識の人は得られまい。

六。誰なして領話せしめん。然し此の雪竇の大見識を能く領解して其の話し相手になる者は誰であらふぞ。

七。草裏の漢。　草裏に混じての大慈悲心。諸人何と自己の本分を忘れ召さるな。

八。黑山下に打入して坐す。

九。鬼窟裡に落在し去るや。　此の着語を一とつ見て。坐倚將つて祖燈を繼ぐことを休めよとあるからとて。何も佛法だの祖燈だのと云ふ抹香臭いことは止めとは云はぬのであると云ふ。

一〇。一箇半箇。　天下に此絶景に對するに堪へたるものは幾人あるであらう。惡くは一箇半箇多くはあるまい。

一一。擊着すれば卽ち錯まる。　諸人詩作文章の會をなして此の景色を弄びにでもするやうでは早や錯りであるから。好いとか惡いとか口に出しては勿論のこと千里萬里遠くして遠いのである。

一二。果然として出不得。　果して思ふた通り、雪竇老人目前の境に落ちこんでハヤ脚が抜かれぬ始末。イヤ御老人脚下が危ふ御坐る。

一三。儞が眼を塞却し儞が耳を塞却す。　雪竇老人目前の境に塞却されたは。アブないこと。下は千仞の絶壁ぞ。坐下の諸人雪竇の口先きに乘せら〻るな。盲目になるぞ。聾啞になるぞ。

一四。深坑に沒溺す。　ソレ見たことか。深坑に落ちこんで身抜きはなるまい。

一五。更に參せよ三十年。　惡いことは云はぬ。今ひとイき出しやれ。夫れでは埒は明くまい。中々の難關ぢやにと。雪竇に托して坐下に拶着する。

【講義】 這の老漢未だ勦絶することを得ず、這の老漢と雪竇自ら喚びかけて、今此の龍牙の問答に就いての批評が何うも未だサツパリとせぬ。それで復一頌を成ずで、もう一つ頌して見ようと第二の頌に小引を置いて。盧公に付し了るも亦た何ぞ憑らん。龍牙に禪板蒲團を用ひず吾れに分付せよと前に蒲團禪板の使ひ樣を知らぬなら盧公に渡せといふたが。偖それをモラツて何に仕樣う。別にそれを以て佛とか法とか云ふ有りがたい御用に立てやうと云ふのではない。坐倚將て祖燈を繼ぐを休めよ、其の蒲團を敷いて坐禪をしたり、其の禪板に倚りかゝつて知識らしい顏をし

たりして。其れで佛祖の正傳を繼いだ大和尚で候ふのとは澄さぬが好い。此方はそんな抹香臭いことはサッパリ嫌ひである。只蒲團には座し、禪板には倚りかゝりて休息する迄のこと。水の流れを見て暮す迄のことである。對るに堪へたり。暮雲の歸り未だ合せざるに。遠山限り無し碧層々。半は山に歸る底の暮れ方の雲。數々重なり疊で青々たる遠山の眺め。夕べの烟り朝の霞、然ても面白い。えも云はれぬ風景である。諸人何と好い景色ではないか。宇宙萬象。花とさき紅葉とちり月と照り風と吹く。雀は忠々。烏は孝行。サテ面白いこと。爰に禪道佛法はあり爰に天然の釋迦はあり、爰に自然の彌勒がある。樂しいこと面白いこと。東土に來たらず西天に歸らず。ソラ自家の老爺も時々目をむく。何と雪舟の達磨ソックリぢやないか。

第八節　重頌評唱和譯

【譬方】 盧公に付し了るも亦何ぞ憑らん。直ちに須らく這裏に向つて恁麼に會し去るべし。更に株を守りて兎を待つこと莫れ。闊髏前一時に打破して。一點の事の胸中に在ることなし。放ちて灑々落々地ならしめば。又何ぞ必しも憑ることを要せん。或は坐し或は倚りて。佛法の道理を作すことを消せず。所以に道ふ。坐倚將て祖燈を繼ぐことを休めよと。雪竇一時に拈し了れり。他箇の轉身の處ありて、末後自ら箇の消息を露す。些子の好處あり。道く。暮雲の歸りて未だ合せざるに對するに堪へたりと。且らく道へ雪竇の意什麼の處にか在る。暮雲の歸りて合んと欲して未だ合せざるの時。爾道へ作麼生。遠山限り無し碧層々。舊に依つた鬼窟裏に打入し去る。這裏に到りて得失是非一時に坐斷。灑々落々として始めて些子に較れり。遠山限りなし碧層々。且らく道へ是れ文殊の境界耶。是れ普賢の境界か。是れ觀音の境界か。此に到りて且らく道へ是れ什麼人の分上の事ぞ。

【字解】一。或は坐し或は倚り。　蒲團に坐しては坐禪かし、禪版によりは能く獅子孔する底のこと。何と抹香臭ひぢやないか。佛法臭いぢやないか。止せ止せ。如かず禪版によりて行雲流水を見て暮さんには。

二。是れ文殊の境界か普賢の境界か。　何も象や獅子に騎つた人々の境界ではあるまいぞよ。

三。是れ什麼人の分上の事ぞ。　卽今作麼生。人人箇々鼻孔を摸索して見よ。全く別人では御坐るまい。次郎曰く。アレ見やしやんせ太郎さん。家の狸が坐禪して。木魚たゝいて經讀んで。末には佛になるわいな。

第二十一則　知門蓮華

第一節　垂示

垂示云。建法幢立宗旨錦上鋪花。脱籠頭卸角駄。太平時節。或若辨得格外句舉一明三。其或未然。依舊伏聽處分。

【讀方】　垂示に云く。法幢を建て宗旨を立す。錦上に華を鋪き籠頭を脱し角駄を卸す。太平の時節。或は若し格外の句を辨得せば、舉一明三。其れ或は然らずんば舊に依りて伏して處分を聽け。

【字解】　一。法幢。　人の師と爲りて法を説くものが、其の徽章として幡幢を門外に立て、以て論議説法の道場たることを標示するのが印度の風習ぢや。そこで健法幢と云へば論議説法をして、佛祖正傳の宗旨を宣説することぢや。

二。格外の句。　釋迦一代の説教。　大小半滿權實顯密五千餘卷の教文と云ふが如きは、教相教理などと申して、皆夫れ〳〵規格ある言教である。吾が教外別傳の祖師門下に在りては、一代諸經は是れ不淨をぬぐふの故紙。釋迦世尊の唾液に過ぎぬ。樁とか實とかの規格には依らぬ。自由自在に或は喝し或は打し。單刀直入直ちに佛心印を指示する。そこが即ち格外と云ふところである。

【講義】　此の垂示は。初めに師資の相契を示し二には公案に結歸すと分科する。法幢を建て宗旨を立す。宗旨は佛祖正傳の主義本領である。吾が佛祖正傳の法と云ふものは。何も法幢を建て宗旨を立つるにも及ばぬこと。天上天下山青水綠。宇宙の萬象其儘が。活潑自在な正法の顯はれで

ある。何も兎や角く議論を立て、四の五の分別詮索するに及ばぬことぢや。然しながら愚迷の凡夫を誘引する方便としては萬止むを得ずして法幢を建て宗旨を立てねばならぬ。然しそれは錦上に花を鋪くの類で。美くしいは美くしいが畢竟餘計なことである。宗師分上の作略などゝは畢竟衲僧家の似而看板に過ぎないのであるから、決してまよはされてはなりませぬぞ。籠頭を脱し角馱を卸ろす。馬を束縛して荷物を負はせてあつたのを都べて取り除いて自由自在にしてやる如く、八萬四千の煩惱も八萬四千の法門も、迷悟染淨一切共に掃ひ盡して見よ。縱横自在无碍自由。世の中明かに治まりて、吹く風も浪を立てず、君樂しみ民悦ぶ。いとも太平の時節である。サテ以上は目的やら方法やらであるが。其の方法を以て目的を達する手段に至りては、其の人の根機次第勉強次第で。若し夫れ格外の句を辨得し得る底の上根上機であつたならば、擧一明三、一を聞いて十を知り、烟の上るを見て火あることを知るから。鞭影を見て走る良馬の如く、いらぬお世話を要せぬことちやが、夫れ或は然らずんば舊に依りて伏して處分を聽けで。そうでないものは茲に一則の公案を拈提して見せるから、智門出不出の公案を看よ。

第二節　本則

擧僧問二智門一蓮花未レ出レ水時如何（鈎在不疑之地。泥裏洗土塊。那裏得這消息來）智門云。蓮花一二三四五六七。（疑殺天下人）僧云。出レ水後如何（莫向鬼窟裏作活計。又恁麼去也）門云。荷葉（幽州猶自可。最苦是江南。兩頭三面。笑殺天下人）

【讀方】擧す僧智門に問ふ。蓮華未だ水を出でざる時如何不疑の地に鈎在す。泥裏に土塊を洗ふ。那裏より箇の消息を得來る。智門云く。蓮花一二三四五六七。天下の人を疑殺す。僧云く。水を出でゝ後如何鬼窟裏に向つて活計を作すこと莫れ。又恁麼し去るや。門云く。荷葉。幽州は猶ほ自から可なり最も苦なるは是れ江南。兩頭三面。天下人を笑殺す。

【字解】一。不疑の地に鈎在す。　これは彼れの此れのと議論するに及ばぬ場所へ。餘計な釣針を下したものぢやと云ふ。又。定めて魚あるの地を知りて鈎を擲つ也と申して、此處何かありそうな。おろして見やうと云ふ。又。此の青坊主。自分免許に鈎つて居るの。そんな領解が何になるぞと抑へる。

二。泥裏に土塊を洗ふ。　幾ら四の五の商量したとて、サツパリと洗ひ立ての出來るものでない。イカサマ垢の拔けぬ間慮である。

三。那裏よりか這の消息が得來る。　此のオトツレどこから得來りたの。天から降つたか。地から湧いたか。有る物か無いものか。ハテサテ。卽今如何と云ふ。

四。一二三四五六七。　二二が四。二五の十。誰れでも知つたことであるに。何が珍らしいこともあらうか。雀は忠々烏は孝行。貧ふた兒も知つたこと。懷いた兒も知つたことであるに、その知つたことが出來ぬからおかしい。諸惡莫作衆善奉行。三歳の兒童能く知ると雖も八十の老翁も行ふこと能はずと云ふことがある。

五。天下の人を疑殺す。　知つたことが知れぬとは是れどうしたものであらう。殺す莫れ。盜む莫れと云ふ知れたことが行はれぬとはどうしたものであらう。それであるから警察もいり。監獄もいるのである。

六。鬼窟裏に向つて活計を作すこと莫れ。　餓鬼殿の献立表であるから、食ふことは出來まい。腹綿がすいて見えるぞと云

ふ。

七。又恁麼にし去るや。　前の問答で埒が明かぬものであるから又しも出の不出のと迭い出しかた。未だそんなことを申して居ると云ふ。

八。幽州は猶自から可なり。最も苦なるは是れは江南。　此着語は俚諺より借り來りしものである。宋朝の末葉に欽宗皇帝は幽州卽ち今の北京の方に都せられたが。金人の入寇の爲め大困難を極められた。そこで江南に遷り臨安府に都せられた。之れは金の難を避けるつもりであつたのだけれども、其れが早や却りて宋を亡ぼすの基となつて欽宗は遂に金に降り、九帝百六十七年にして、宋は亡びてしまつた。それで幽州は猶ほ可なり江南は更に苦しと云ふたものである。前の蓮華と答へられた時はまだ解し易いが。今度の荷葉に至りては容易に解し得られない。なぜか。問て看れば知れること。

九。兩頭三面。　智門和尙面目を換へて答話せられるが。色々のことを言はれるから却つて合點が往かぬのである。

一〇。天下の人を笑殺す。　智門は色々のことを言はれるから天下の人の笑い物に成るのである。然しこの笑殺は摩訶迦葉の破顏微笑であるかも知れないと云ふ。

第三節　本則提唱

僧問二智門一。蓮華未レ出レ水時如何。下語云。句裡呈レ機。

言中有レ響と付けるも可也。

門云。蓮華。下語云。耳朶兩片皮。五四三二一。

迷に問ふた程に、逆に答へたなり。又云く。千草萬木は何も現成に用ふれども、此蓮華の古則は、色相に用ふるぞ。本分の上には、蓮華と云ふことも有つてこそ。色相の上には、逆境界のある處を用いて、未出水時は荷葉でこそ有うずれ。蓮華と逆に云ふたは色相なり。五四三二一。一二三四五の逆なり。先師下語に。劈不レ開。松直棘曲。

僧云。出レ水後如何。下語云。再捋二虎鬚一。

門云。荷葉。下語云。牙齒一具骨。一二三四五。

牙と齒とは元これ一具の骨ぞ。又。雨後青山青。山青轉青。又。七尺主丈三尺竹篦。七尺主丈三尺竹篦は現成の句也。されとも七尺と三尺とを數を取つて色相に用ひたことぞ。現成の色相でもあるぞ。先師云く。未出水と云ふと。出水と云ふを色相に用ひたる道理を辨し來れ。辨じて云く。未出は靜なり。出は動なり。然る間色相に用ひて候。又辨に。未出水は荷葉なり。其れを蓮華と答へたは逆也。又出水と問ふたに、荷葉と云ふたは逆なり。爰を以て色相に用いて候。

第四節　本則評唱和譯

智門若し是れ機に應じて物を接せば、猶ほ些子に較らん。若し是れ衆流を截斷せば、千里萬里。且らく道へ、這の蓮花、出水と未出水と是れ一か是れ二か。若し恁麼に見得せば、儞に許す箇の入處あることを。然も是くの如くなりと雖も、若し是れ一と道はゝ、佛性を顚頂し眞如を儱侗

す。若し是れ二と道はゞ、心境未だ忘せず、解路上に落在して走らば、什麼の歇期かあらん。且らく道へ。古人の意作麼生。其の實は許多のこと無し。所以に投子道く、儞但だ名言數句に着する莫れ。若し諸事を了せば自然に着せず。卽ち許多の位次不同無けん。儞一切の法を攝するも、一切の法儞を攝することを得ず。本と得失夢幻如許多の名目無し。强ひて他のために名字を安立すべからず。儞諸人を誑謔し得んや。儞諸人問ふが故に所以に言あり。儞若し問はざれば、我をして儞に向つて什麼と道はしめて卽ち得ん。一切の事は皆是れ儞將ち得來る。都べて我が事に干からず。古人道はく、佛性の義を識んと欲せば、當に時節因緣を觀すべし。見ずや雲門擧す僧靈雲に問ふて云く、佛未だ出世せざるの時如何。雲拂子を竪起す。僧云く、出世して後如何。雲亦拂子を竪起す。雲門云く、前頭は打着。後頭は打不着。又云く、出と不出とを說かずんば、何れの處にか伊が問ふ時節有らんと。古人の一問一答。時に應じ節に應じて許多の事なし。儞若し言を尋ね句を逐はゞ、了に交涉なからん。儞若し能く言中に言を透得し意中に意を透得し、機中に機を透得して、放つて閑閑地ならしめば、方に智門答話の處を見ん。「問ふ佛未だ出世せざるの時如何。牛頭未だ四祖を見ざるの時如何。斑石の內混沌の時如何。父母未生の時如何」一本「中なし」雲門道はく。古より今に至るまで只是れ一段の事是なく非なく、得なく失なく、生と未生ともなし。古人這裏に到りて一綫道を放つて出あり入あり。若し是れ未了底の人ならば、扶羅模壁、依草附木、或は他をして放下せしめ、又、莽莽蕩蕩荒荒然たる處に打入し去らしめん。若し是れ得底の人ならば、二六時中一物に依倚せず。一物に依倚せずと雖も、若し一機一境を露さば、作麼生か他を模索せん。這の僧問ふて道はく。蓮華未だ水を出でざる時如何。智門云く。蓮花。便ち只欄問の一答。妨げず奇特なることを。諸方皆之れを顚倒の話と謂ふ。那裏か此の如くなる。見ずや嵒頭道はく、常に貴むらくは、未だ口を開かざる己前猶些子に較ることをと。古人機を露はす處已に是れ漏逗し了る。如今の學者古人の意を省みず、只管に去りて出水未出水とを理論す。什麼の交涉かあらん。見ずや僧智門に問ふ。如何が是れ般若の用。門云く兎子懷胎と。看よ他此の如く對答す。天下の人他の語脈を討ぬるに如何が是れ般若の用。門云く、蛤明月を含む。僧云く。得ざることを。或は人有りて夾山に問ふて蓮花未だ水を出でざる時如何と道はゞ、只他に對して道はん。露柱燈籠。且らく道へ。蓮花と是れ同か是れ別か。水を出でゝ後如何。他に對して道はん。杖頭日月を排く。脚下はなはだ泥深しと。儞且らく道へ是か不是か。且らく錯ちて定盤星を認むること莫れ。雪竇忒慈悲。人の情解を打破す。所以に頌出す。

【字解】一。智門。　隨州智門の光祚禪師は、香林澄遠禪師の嗣、雲門の第三世。宋朝眞宗皇帝の時の人。

二。機に應じて物を接せば猶些子に較らん。　智門の答話は若し是れ應病與藥。機に應じて物を接するものと見ば、成る程些しは宜しいが、若し載流の手段と見ば、千里萬里、遠くして遠いことぞ。

三。蓮花出水。　法華玄贊に、「蓮華に二時ありて名を得。蓮華の未だ水を出でざる時の如き、性能く外を出るが故に亦た蓮

華と名く乃至今は此の經正しく彼を化して大乘の位に入れて二乘を超出すること、蓮華の水を出て已るが如し亦蓮華と名づく」と云ふてある。

四。 是れ一か是れ二か。　人人自己に證據して見よ。出不出。共に有るまいぞ。

五。 佛性を顧頊し眞如を儱侗す。　楞伽に顧頊儱侗は卽ち是れ無分曉無分別の義なりとある。顧頊は大面也でヌラリと大面のこと。儱侗は愚也無知也。また直也長大也で愚痴の貌である。雲門錄にも。師或るとき拄杖を拈して云く。且つ道理に向つて會せば、也た利益ありや也た利益なしや。總に不會ならば佛性を顧頊し眞如を儱侗すとある。佛性眞如の四字は輕るく見るがよし。

六。 且らく道へ古人の意作麼生其の實は許多の事なし。　古人の意のある所夫れ如何。人人自ら看取せよと云ふ。

七。 投子道く。　投子は舒州投子山の大同禪師で翠微無學禪師の法嗣ぞ。これは投子錄に出づる上堂示衆語中の一節である。但だ名言數句に著すること莫れ。若し諸事を了せば自然に著せずして卽ち位次不同無しで。佛と云ふも名言。祖師と云ふも名言。迷も悟も染も淨も。ニヤンもワンも一切事皆是れ名言。生れ落つるよりこのかた聞き覺へたものであるから斯く分別したならば十界位次の次第もなく。迷の悟のとの面倒はないと云ふのである。

八。 强ひて他のために名字を安立すべからず儞諸人を誑謔し得んや。　名字言句は本來なきものであるから兎や角餘計な名言をつける必要はないのである。問なく答へなく。文なく句なく、一句半言を示すの要もなくして始めて。天下は太平である。誑は欺也惑也でマドワシタブラカスこと。謔は誹と同字。大叫也で四の五のと言句に出すことである。

九。 古人道く云云。　古人は百丈大智禪師、である　此語はもと涅槃經に出てある。當に時節因緣を觀ずべし。大根を蒔くには其のまくべき時節と云ふものがある。諸人、今日卽今何の日ぞとオシ向いて見よ。

一〇。 見ずや雲門舉す云云。　雲門室中の語要ぞ。靈雲は福州靈雲の志勤禪師で潙山靈祐の法を嗣、いだ人で潙山に在りて桃花に因りて悟つたと云ふ人である。三江老師の靈雲和尙偈贊あり。餘に相阿彌の畫く處。贊に曰く、桃下回頭這作家。聰

勉掛着破袈裟。何通千七百公案。悟了霜雲一樹枝。

一一。 前頭は打着。後頭は打不着。　爰が弄處である。

一二。 出と不出と說かずんば。　何の處にか伊が問ふ時節有らん。元來出不出のあるべきなく。說不說のあるべき筈なきも、應機接物の爲めには、風なきに浪を起し、無說に說を起すこともある。是れが宗師家分上の作略よ。

一三。 問ふ佛未出世の時如何乃至父母未生の時如何。　一本にこの間の全文を削つてある。その方が宜しい。僧あり德山緣察禪師に問ふ。佛未出世の時如何。山曰く。河裏盡く是れ木頭船。又曰く。胡孫窩柱に繫ぐ。問ふ。出世して後如何。山云く。這の頭那頭軒にか蹈著す。又云く。胡孫布袋に入る。諸人會すや。

一四。 牛頭未だ四祖に見みえざる時如何。　牛頭は金陵牛頭山第一世法融禪師で四祖道信大師の法を嗣いだ人である。顯慶二丁巳年正月廿三日入滅。壽六十四歲。四祖は吾宗震旦の第四祖道信禪師で唐の高宗永徽二辛亥年九月四日示寂。壽七十有二。大醫禪師と謚せられたことぞ。僧あり雲門に問ふ。牛頭四祖に未だ見みえざる時如何。門云く。家々觀世音。見へて後如何。門云く。火裏の蝍蝎吞ニ大蟲ニ。

一五。 斑石內混沌の時如何。　斑石は青赤斑爛にして大さ雞子の如しとある。昆吾山の紫仙人が是れを指して、混沌此の中に在りと云ふたと云ふことである。僧あり。大光山覃州の居誨禪師に問ふ。混沌未分の時如何。師曰く。時に阿難をして叙せしめんと云ふ則がある。諸人見得し來れ。

一六。 父母未生の時如何。　僞山香嚴に問ふ。我聞く汝百丈先師の處に在りて一を問へば十を答へ。十を問へば百を答ふと。此れは是れ汝が聰明伶悧意解識想生死の根本也。父母未生の時一句を道へ看ん。師一問せられて直に得たり茫然たることを。

一七。 莽々蕩々。　證道歌に割逢の空は因果を撥ふ。莽々蕩々として殃禍を招くと云ふぞ。莽々は草深き貌又無知の貌。蕩々は法度の廢壞する貌であるから。草莽々荒廢無人の境に打入し去れと云ふのであらう。

一八。欄問の一答。　此の僧の出不出に跨り來る魔を遮欄して點破するので。二答共に一般、本來出不出はなきものと云ふ。

一九。曷道はく。　鄂州巖頭全豁禪師は德山宣鑒禪師の法嗣で、光啓三年四月八日示寂。諡して清巖大師と云ふ。

二〇。僧智門に問ふ。　碧巖百則の中第九十則智門般若體の則を見よ。

二一。人有り夾山に問ふて云云。　夾山は圖結が夾山に住せしときの自稱である。

二二。杖頭日月を挑く。脚下太だ泥深し。　日月を挑ても泥深きこと一丈で是と云ふもタハコト。不是と云ふもヒガコト。一切皆ひがことである。

第五節　類則提唱

其一　佛未出世

僧問二靈雲一佛未二出世一時如何。雲竪二起拂子一。下語云。耳朶兩片皮。

本分には、出世不出世と云ふてとがあつてこそ。未出世時と逆に問ふた程に色相に用ふるぞ。佛と云ふも出世と云ふも色相上の沙汰よとて拂子を竪起せられたぞ。拂子と云ふも色相なり。かく見れば截斷も備る也。

僧云出世後如何。雲亦竪二起拂子一。下語云。牙齒一具骨。

出不出を色相の動靜の二つに用いたぞ。

雲門云前頭打着後頭打不着。下語も辨もなし。

其二　夾山蓮花

僧問二夾山一道蓮華未出水時如何。只對他道露柱燈籠。下語云。耳朶兩片皮。頭上一堆塵。

未出と云ふは靜ぞ。又露柱は不動者ぞ。燈籠は動ずる者ぞ。こゝを色相に用いて圖悟の云はれたぞ。本分上には蓮華と云ふことも露柱と云ふことも有ことぞ。更に辨ずるに。蓮花と云ふものは出入が有る程に色相に用ひたぞ。又露柱燈籠と云ふたも、ハヤ體が出來た程に色相に用いたぞ。

且道與二蓮華一是同是別。出水後如何。對他道杖頭挑二日月一脚下太泥深。下語云。牙齒一具骨。脚下三尺土。

何れも色相の境界なり。杖頭に日月をかゝぐと云ふも、志ある僧が杖を携へて諸方を偏參し修行して、年月を送る心なり。又脚下太泥深と云ふも、草鞋を着けて泥土をも嫌はずしてあるく心也。畢竟修行偏參するも色相の上のこと也。又云く。杖頭日月をかゝぐは色相の動の方ぞ。脚下太泥深は色相の穢らはしい處を看たぞ。出水後と云ふも、色相の動する方を云ふたぞ。

第六節　頌

蓮花荷葉報君知　老婆心切。見成公案。文彩已彰

出水何如未出時　泥裏洗土塊。分開也好。不可龍倜去也

江北江南問王老　主人公在什麽處。問王老師作什麽。爾自踏破草鞋

一狐疑了一狐疑　一坑埋却。自是爾疑。不免疑情未息。打云會麽

【讀方】蓮花荷葉君に報じて知らしむ。老婆心切。現成公案。文彩已に彰はる。出水は未出の時に何。泥裏に土塊を洗ふ。分開も也た好し。龍倜し去るべからず。江北江南王老に問へ。主人公什麽の處にかある。王老師に問ふて什麽をかなさん。爾自ら草鞋を踏破す。一狐疑し了りて一狐疑す。一坑に埋却せん。自ら是れ爾疑ふ。免れず疑情未だ息まざることを。打して云く會す麽。

【字解】一。老婆心切。　蓮華だの荷葉だのと色々の玩弄物を持ち出したがりイカサマ孫殿も悦ぶことであらう。

二。見成公案。　山は山の儘。水は水の儘、當體全是れ公案である。ナニ山高水長となる。能く讀めたが。諸人讀めたか。

三。文彩已に彰はる。　猫は猫。杓子は杓子。是れ般若の當體である。何も口に出すには及ばぬこと、筆をかるに及ばぬこと、それを已に蓮とか荷とか一寸でも口の端に上して見よ。文彩已に彰はる。ハヤ幾分の御飾りが見へるぞ。雪竇圓悟何と叮嚀なこと。息も讀めた孫も讀めた。なに一二三四。まだよめぬとな。是れ何としたことぞと云ふ。

四。泥裏に土塊を洗ふ。　何と垢の抜けぬことである。出の未出のと商量すべきでないと云ふたとて、ハヤその云ふことが泥水に土塊を洗ふ樣なもの、綺麗サッパリともせまいと云ふ。

五。分開するも也た好し。　然し日は永し天氣も好いから。出の未出のと分開して工夫するも。也た一段と好いことであらう。何んと諸人これも徒然の手すさみであるから一つ。試み召されと云ふ。

六。龍倜し去るべからず。　龍倜は器の未だ成らざる貌で。不滿足のことである。こゝは大事に掛くべき處であるから。容易に看過してはならぬ。必ず丸呑みにして腹いためらるゝなよ。

七。主人公什麽の處にか在る。　江北の江南のと迂路つきまはつて居る奴は、丸で喪家の犬同樣であるから、ウッカリすると庭取られるぞ。

八。王老師に問ふて什麽が作さん。　池州の南泉普願禪師は、鄭州新鄭の人。姓は王氏。姓王なるが故に自ら王老師と稱すで。王老師と稱せられたとのことだが。爰はそうではないので。支那では。張。王。李。趙の四姓が大層多いので、吾國でならば。權兵衛でも太郎兵衛でも梅でも松でもと云ふ樣な處へ、張三李四と云ふやうなことを言ふそうぢやが。爰の王老とか王老師と云ふも其の仲間で。マア田舍の珍然和尚とでも云ひそうな處である。そこで幾ら尋れあるいても駄目なことである。元來人に問ふべき筈のものでない。人人箇々自省すべきものぞ。欺さるゝなと云ふ。

九。爾自ら草鞋を踏破す。　疲勞損の旅費つひやしで。草鞋を踏み破るのみで、了期はあるまい程に。マア熟と考へなほせと云ふ具合。

一〇。一坑に埋却せん。　角角面倒であるから。其のやうに餘處を尋れあるく連中は、一棒下に打殺して一穴へほり込んで仕舞へと云ふ。

一一。自ら是れ爾疑ふ。　誰も外から疑はせるではないから人の皆めとは思ふなよ。

一二。免れず疑情未だ息まざることを。　是れ程云ふても疑ひはれぬか、是の鈍物奴。と云ふさま。

一三。打て云く會すや。　ヒシリッと打つて。どうぢや合點がゆかぬか。是れでも性根はなほらぬかと云ふ。これが圜悟老僧の老婆心切であらう。

【講義】智門和尚は蓮花と言ふたり荷葉と云ふたりして宇宙の本體妙用を一僧に答へられたとであるが、然て智門の答處は善盡し美盡して如何にも立派な名答であるから。君等諸人に報知致しま

すゆへ。能く聽き玉へと云ふので。第一句に蓮花荷葉君に報じて知らしむと出す。出水は未出の時に何如れ。此の出と未出とは何れが面白くて、どちらが好いであらう。之れは皆さんにも知らせることは出來ぬから、冷暖自知。人人箇々味ふてみるが宜しいと云ふ。何如の二字は熟如と云ふ字と同じ心でいづれと讀むが宜しい。何ぞ如かんと讀めば何となく出水の方よりも未出の方が勝れて居る樣に見へて。一方を揚げて一方を抑ゆる氣味があつて面白くない。そこで如何れと讀むべきぞ。江北江南王老に問へ。しかるに此れで會得が出來ないで。彼方此方と迂路つき廻りあれか此れかと思慮分別して見よ、畢竟疲勞損の旅費つひへであらう。一狐疑了りて一狐疑せん。枝葉に枝葉が分れて遂には根も幹も分らぬとになりてしまひ。三生六十劫いつ迄たちても疑情の晴れる氣遣ひはないから自分の事は自分に實究するが好い。何も人に尋ね廻るべきでないぞ。腹がすいたか滿腹したかは自分で自分を知る迄のと。そんなことは他人に尋ね廻るべきではないぞ。と格外に意味あることを知らしむる。雪竇重々の大慈悲心である。一狐疑了りて一狐疑すは、狐の性たる疑ひ多くして止住する處なきを云ふたもの。漢書文帝紀の註に。狐の獸たる其性疑ひ多し。永河を渡る毎に且つ聽いて且つ渡る。故に疑者を曰ふて狐疑と稱すとあるによりて解するが宜しい。

第七節　頌評唱和譯

【讀方】　智門は本是れ浙人なり。得々として川に入りて香林に參す。既に徹して却回して隋州の智門に住す。雪竇は是れ他の的子なり。見得して好く玄を窮め妙を極め　直ちに道ふ。蓮花荷葉君に報じて知らしむ。出水は未出の時と何如れ。這裏人の直下に便ち會せんことを要す。山僧は道ふ。未だ水を出でざる時如何。露柱燈籠。水を出で丶後如何。杖頭に日月を挑ぐ。脚下太だ泥深しと。爾且つ錯つて定盤星を認むること莫れ。如今の人、人の言句を皷むもの甚麽の限りか有らん。爾且らく道へ。出水の時是れ什麽の時節ぞ。未出水の時是れ什麽の時節ぞ。若し這裏に向つて見得せば、爾に許す親しく智門を見ることを。雪竇道く。爾若し見ずんば、江北江南王老に問へ。雪竇の意に道く。爾只管に江北江南に去りて尊宿に出水と未出水とを問ふて、江南に兩句を添得し、江北に兩句を添得し、一重に一重を添へば展轉して疑を生ぜんと。且らく道へ。何の時か疑はざることを得去らん。野狐の疑ひ多くして氷凌上に行て以て水聲を聽き若し鳴らざれば方に河を過ぐべきが如し。參學の人若し一狐疑し了りて一狐疑せば、幾時が平穩を得去らん。

【字解】　一。得々として川に入りて。　川は蜀の四川ぞ。智門は香林澄遠の法を嗣いだ人で、雲門大師の孫弟子である。本集の頌の作者雪竇の重顯禪師はこの智門大師の法嗣である。系圖如左。

青原行思―石頭希遷―天皇道悟―龍潭崇信―德山宣鑒―雪峰義存―雲門文偃―香林澄遠―智門光祚―雪竇重顯

二。幾時か平穩を得去らん。　諸人若し一狐疑し了りて又一狐疑し。枝葉に枝葉を生じて更に解決する處なくば、彌勒の下生にも不疑の地に至ることはなるまいぞ。卽今作麽生か是れ平穩の地。云く。蓮荷葉にとゞまりて等覺を成ず。

第二十二則　雪峯鼈鼻蛇

第一節　垂示

垂示云。大方無外細若二隣虛一。擒縱非レ他二卷舒在レ我一。必欲二解レ粘去レ縛。直須二削レ迹呑レ聲。人人坐二斷要津一。箇箇壁立千仞。且道是什麼人境界。試舉看。

【讀方】　垂示に云く。大方無外、細なること隣虛の如し。擒縱他に非ず卷舒我にあり。必ず粘を解き縛を去らんと欲せば、直に須らく迹を削り聲を呑むべし。人々要津を坐斷し箇々壁立千仞ならん。且らく道へ是れ什麼人の境界ぞ。試みに擧す看よ。

【字解】　一。大方無外。　大方に外なし皆充塞すと申して。宇宙の本體。萬物の實性は無限の空間に充塞して餘すところがないから內とか外とか此れとか彼れとか云ふ隔てがない。卽ち無外である。無外と云ふは無量と云ひ無邊と云ふも同じことで卽ち皆無限の義である。

二。細は隣虛の若し。　隣虛は楞嚴經に「汝地性を觀ずるに粗を大地と爲し細を微塵となし隣虛塵に至る乃至隣虛を析せば卽ち實に空性なり」とありて、古疏に極細の物之れを視れども見へず猶ほ極細の塵の無物に等しきが如しと釋してある、そこで都べて物質を破て摧いて微塵にして、それをモウ一つ碎いて此れ以上碎くことが出來ないと云ふ處に行くと、殆んど虛空と同樣になる、同樣にはなるが。然しながら其れを直ちに虛空とは言れぬによりて虛空の近隣卽ち無の隣りであると云ふ處から隣虛と名けたものである。

三。擒縱他に非ず。　擒はイケドリにして取り抑へること、縱は放縱自在にして放ち棄てること。他に非ずはその抑へるも

放つも自由自在であると云ふことである。

四　粘を解き縛を去る。　粘は粘着て喰つ附くこと。縛は纏縛でグル〳〵からげて手足の自由のきかん樣にすること。それなトリホどいて自由自在の境遇になるのが卽ち悟の境界である。

五。要津。　要は肝要、津は孟津に大會すなど云ふ津と同じで(孟は地の名)渡し場のことである。海や河を渡るに就て最も肝要なるものは渡し場または湊であるが。佛法修行の上も同じことで、生死の岸を離れて涅槃の岸に渡るには是非とも渡し場が必要である。

【講義】　大方外なく細なること隣虛の若し。儒敎の說にも之れを放てば六合に彌り之れを卷けば退いて密に藏ると申してあるが、いかにも其の通りで、宇宙の本體萬物の本性なるものは遍一切處と無限の空間に充塞して居るものであるから。ソコとかコヽとか內とか外とか云ふ際限がない隔てがない。究竟せること虛空の如く廣大にして邊際なしとは卽ちこのことである。そこで大方無外と云ふ。無外は無邊とか無限とか云ふも同じこと。限りなく天地に彌漫して天地と其の量を同じくして居ることである。そこを敎家では眞如とも法性とも涅槃妙心とも申して居る。然るに此の廣大無邊際の本體も若し其れを縮めて見れば細なること隣虛の如しで。肉眼も以て見ることは能はず、天眼も以て見ること能はざる底の極々微細のものになつてしまう。それを今日では原子とか電子とか名けてある。隣虛は塵の細なるを微と云ひ、細の又細なるを極微と云ふ。微の又微なるを隣虛と云ふ。極微を折て七分となせば則ち殆んど虛にちかし故に隣虛と名くと申して虛無の近隣、無の隣りであると云ふところから隣虛と申したものである。皆さん、遍虛空界の大方を細にしては隣虛の如しとは之れ何んとしたものでありましよう。若しも吾々が其の法を手に入れることが出來たならば、擒縱他に非ず卷舒我に在り。擒と取り抑へることも、縱と放ち棄てることも、自由自在であつて、卷と卷て使ふことも、舒とのべて用ふることも皆我が方寸に有つて少しも他のお指圖を受ける必要はない。必ず粘を解き縛を去らんと欲せば直に須らく迹を削り聲を呑むべし。ところで吾等凡夫は種々雜多の煩惱妄念に自繩自縛して。人天鬼畜に生れ來り生れ去りて苦界に沈淪し自由を得ぬことであるから、佛々祖々が慈悲の餘りに種々に難作能作し方便をめぐらして濟家の法を講ぜられたことである。これ畢竟粘を解き縛を去る爲めである。然るに其の粘と云ひ縛と云ふところの妄想執着はツマリ迹に滯ほり聲に從ふから起つたものであるから、イヤ誰れがどうしたの、彼れが斯ふ云ふたの。此の經論には何とあるの、彼の經論には何とあつたの、研究の結果だとか主義だとか理想だとか。人の尻馬に乘つたり、提灯持ちをしたりする樣なことは、悉く除き去らぬばならぬ。そこが卽ち迹を削り聲を呑むの處である。それ故宗師家の作略としては、必ず斯かる學人の粘縛を解き去りて手に物もたせぬ處。それが卽ち迹を削り聲を呑むの有樣である。サテひとたび這般の境界に到つたならば、卽ち佛祖の要津を坐斷し去りて、箇々壁立千仞底。何とも面白いことである。愉快なことである。要津は河を渡り海を躍るの湊渡

し場であるが、大悟徹底し畢りて既に生死の斯岸を渉りて涅槃の樂園に到りついて見よ。湊もいらぬ。渡し場もいらぬ。少しもそんなものゝお世話にはならぬ。そこが卽ち坐斷すと云ふ意味合ひである。サア斯ふなつた上は人々箇々壁立千仞といかなる人も寄り附くことは出來ぬ。千佛萬祖も如何ともし難い。全く自尊佛獨尊佛であるが然らばこれは抑も什麼人の境界であるかと云ふので、什麼人の境界ぞ。試みに擧す看よと公案に結歸した。

第二節　本則

擧雪峯示衆云。南山有一條鼈鼻蛇見怪不怪其怪自壞。大小大怪事。不妨令人疑着汝等諸人。切須好看一囚一場漏逗長慶云今日堂中大有人喪身失命普州人以己方人送賊。僧擧似玄沙。同坑無異土。奴見婢愍懃。同病相憐玄沙云。須是稜兄始得。雖然如此。我卽不恁麼不免作野狐精見解。是什麼消息。毒氣傷人僧云。和尚作麼生也好拶着。這老漢玄沙云。用南山作什麼。一只釣魚船上謝三郎。只道野狐精。猶較些子。喪身失命也不知雲門以拄杖擲向雪峯面前。作怕勢。怕他作什麼。一子親得。一等是弄精魂。諸人試辨看

【讀方】擧す。雪峯衆に示して云く。南山に一條の鼈鼻蛇あり。怪を見て怪とせざれば其怪自ら壞る。大小大の怪事。妨げず人をして疑着せしむ。汝等諸人切に須らく看るべし囚。一場の漏逗長慶云く。今日堂中大に人有つて喪身失命す。普州の人賊を送る。己を以て人に方らぶ。僧玄沙に擧似す同坑に異土なし。奴は婢を見て愍懃。同病相憐む。玄沙云く。須らく是れ稜兄にして始めて得べし、然も是くの如くなりと雖も我は卽ち不恁麼免れず野狐精の見解を作すことを。是れ什麼の消息ぞ。毒氣人を傷く僧云く。和尚作麼生也た好し這の老漢を拶着するに玄沙云く。南山を用いて什麼か作ん。釣魚船上の謝三郎。只道の野狐精。猶些子に較れり。喪身失命するも也た知らず雲門拄杖を以て雪峯の面前に擲向して怕るゝ勢を作す。他を怕れて什麼をか作さん。一子親しく得たり。一等に是れ精魂を弄す。諸人試みに辨じて看よ。

【字解】一。怪を見て怪となさずんば其怪自ら壞る。 拙僧など其んな毒蛇など何とも思はぬ。

二。大小大の怪事。 下の大の字は衍字と見て、大でもあれ小でもあれ、兎角餘程の怪事である。

三。妨げず人をして疑着せしむ。 これは中々の難問であるぞ。

四。囚。 何か物でも搜して不圖見出した時に思はずヤア此處にあつたと驚さの聲を發するものであるが。それを囚と寫したものであるから、爰は雪峯が好く見ると云はれる言下に圜悟がヤア鼈鼻蛇が爰に居たぞと見つけだした樣子である。

五。一場の漏逗。 漏はモル、逗はトゞコオルで器物の不完全な貌であるから。此れが見へない者もなからふに好く看よなどとは雪峯餘りに老婆心切過ぎると云ふのである。

六。普州の人賊を送る。 普州は古來盜が多かつた爲めか。普州の人と云へば盜賊と云ふ程の代名詞となつてゐる。そこで送るものも送られるものも等しく盜賊であると云ふので長慶も雲竇もドロボ仲間であると云ふたのである。

七。己を以て人に方らぶ。 己れがそうであるから人もそうであると思ふて居るのか。と雪峯長慶父子同道の樣子を褒めたもの。

八。同坑に異土なし。 玄沙も長慶と共に雪峯の法嗣で兄弟仲間であるから。一つ穴に替つた土もあるまい。何れ一つ穴の狐であらう。

九。狐は蜂を見て懇懃。　鈍兵衛はお鍋を深切にする。長慶と玄沙は同じ飯器の兄弟であるから。玄沙に告げまいものでもあるまい。

一〇。同病相憐む。　ウミ柿の熟し合ひで何れも同じ病人である。

一一。兎れず野狐精の見解を作すことを。　玄沙何と云ひやつても。どうせバケ狐の見解に過ぎないであらう。

一二。是れ什麼の消息ぞ。　何か替つたことでもあるかの。諸人能く聽け。

一三。毒氣人を傷く。　何れは同種類のマムシであらうから。能く注意してさゝれないようにせよと云ふ。

一四。也た好し這の老漢を拶着するに。　好い取り組みところであるとけしかける。

一五。釣魚船上の謝三郎。　古人の句に釣魚船上謝三郎。不愛南山愛鼈鼻とあるのを持つて來て、玄沙は元より海邊の生れであるから。釣することは知つて居るが。山中の樂しみは知られまいと申して例の抑へた言葉を以て玄沙には自かゞ玄沙の別機軸のあることを稱揚したものである。

一六。只這の野狐精。　親子一穴の野狐の中でも、玄沙は實に甘くバケられた。イカサマ山寺の和尚に見へまするとは云ふのであらう。

一七。猶ほ些子に蹉れり。　少しは許せる。話しが出來ると重れ〳〵稱揚する。

一八。喪身失命するも也た知らず。　此の鼈鼻蛇中々大いから。玄沙は丸呑みにせられても知らずに居る。

一九。他を怕れて什麼をか作さん。　拄杖は納僧の擔子であるから。怕いことはない。雲門は取り違へたそうなと云ふ。

二〇。一子親しく得たり。　サスガは雪峯の一子。他人の及ばぬ處があつて實に好い働きであると讃嘆する。

二一。一等に是れ精魂を弄す。　三人の老大家等しく大蛇退治に御熱心であるが。さぞお骨が折れることで御座ろう。

二二。諸人試みに辨じて看よ。　雪峯長慶玄沙雲門の親子兄弟四大老の玄機果して如何の異同がある。憑るく寄つて毒蛇にさゝるゝなよ。これも擧寛無作の妙用●諸人能く參じて見よ。

第三節　本則提唱

雪峯示衆云。南山有一條鼈鼻蛇。汝等諸人切須好看。下語云。牙如劍樹。

鼈鼻蛇によりて付けた下語ぞ。本分を指して鼈鼻蛇と云ふたなり。拶して云く。鼈鼻蛇を諸人好く看るべしと云ふたは、何んと云ふ心ぞ。辨せよ。答へて云く。本分を鼈鼻蛇と云ふたは、形のあるものにこそよりつかるれ。本分と云ふものは、目にも見へず、手にも捉はれざる處を、鼈鼻蛇と云ふをそろしいものにたとへて云ふたぞ。本分の上には寄り付かれぬと云ふ定辨で簡要のせむと云ふも。什麼の本分のことぞ。先師の下語に。呑却乾坤。

長慶云。今日堂中大有人喪身失命。下語云。口似血盆。

知音して、喪身失命すと云へり。本分の方なり。先師下語に、同坑無異土。一狀飲過。

僧擧似玄沙。下語云。驀風自南來殿閣生微涼。

何の道理もなく玄沙に語つたまで也。先師下語に、金以火試。日出乾坤耀。

玄沙云。須是稜兄始得。雖然如是我卽不恁麼。下語云。花知一樣春。天際

日上月下。雨下地上濕。

我れは卽ち不麽恁と云ふたは、是も下心は初問に知音して先づそうぞやと云ふ義ぞ。されども こは現成の方ぞ。先師下語に。見レ前領レ後。君向二瀟湘一我向レ秦。

僧云。和尙作麽生。下語云。檻前山深水冷。

玄沙の後語を聞んとて作麽生と拶した也。先師下語に、句裡呈レ機。看二脚下一。

玄沙云。用二南山一作二什麽一。下語云。充二塞六合一。

南山とは本分を指して云ふたぞ。されども盡乾坤の間、ありとあらゆること悉く本分に歸すべきもの。何が本分にはづれたる事があるかと云ふ義を以て、南山を用いて什麽か作さんと云ふたは、南山に限らず、悉くが本分ぢやと也。南山計りは本分はあるまいと云ふて、用二南山一作二什麽一と云ふ程に。充二塞六合一と下語したぞ。先師の下語に。鐵丸無二縫罅一。萬里一條鐵。

雲門以二拄杖一擲二向雪峯一面前一作レ怕勢。下語云。成レ龍昇レ天作レ蛇入レ草。

雪峯玄沙の働きに知音して拄杖を本分と振り舞ふて、怕るゝ勢を作した處を成レ龍昇レ天成レ蛇入レ草と云ふたぞ。天に昇り草に入りて見へざる處を本分に用ゆるぞ。働きは本分に知音してせられたれども、句は本分の方ばかりなり。先師の下語に。識レ法者懼。因二一事一長二一智一とあるぞ。

第四節　本則評唱和譯

【讀方】　儞若し平展せば平展するに一任す。儞若し打破せば打破するに一任す。雪峯は巖頭欽山と同行なり。凡そ三たび投子に到り九たび洞山に上る。後德山に參して方に漆桶を打破す。一日巖頭を率いて欽山を訪はんとす。鵞山店主に至りて雪に阻らる。巖頭は毎日只是れ打睡す。雪峯は一向に座禪す。巖頭喝して云く。噇眠し去れ。毎日床上に恰かも七村裏の土地に似て相似たり。佗時後日、人家の男女を魔魅し去ることあらんと。峯自ら點胸して云く。某甲が這裏未穩在。敢へて自ら瞞せずと。頭云く。我れ將に謂へり、儞已後孤峰頂上に向つて草庵を盤結して大敎を播揚せんと。猶ほ這箇の語話を作す。峯云く。某甲實に未穩在。頭云く、儞若し實に此の如くならば儞が見處に據りて一一に通じ來れ。是處をば我儞がために證明し、不是處をば儞が爲めに剗却せんと。峯遂に擧す。鹽官の上堂に色空の義を擧するを見て箇の入處を得たりと。頭云く。此去りて三十年切に忌む擧着することを。峯又擧す。洞山過水の頌を見て箇の入處を得たりと。頭云く、若し與麽ならば自救不了、後に德山に到りて問ふ。從上宗乘中の事學人還りて分ありや也た無しや。山打つこと一棒して什麽と道ふぞと。我れ當時桶底の脫するが如くに相似たり。頭遂に喝して曰く。儞道ふことを聞かずや門より入るものは是れ家珍にあらずと。峯云く。他後

如何が卽ち是れならん。頭云く。他日若し大敎を播揚せんと欲せば、一日自己の胸襟より流出し將ち來りて、我がために蓋天蓋地し去れと。峯言下に於いて大悟し便ち禮拜し、起き來りて連聲に叫んで云く、今日始めて是れ鰲山成道すと。後閾中に回へりて象骨山に住す。自ら貽るに頌を作りて云く。人生倏忽たり暫らく須臾。浮世那ぞ能く久居を待ん。嶺を出るに纔に三十二に登らんとす。閩に入れば早く是れ四旬餘。他の非は頻々に擧することを用ゐず。己が過は應に須らく旋々に除くべし。滿朝の朱紫の貴に報じ奉る。閻王は怕れず金魚を佩ることを。凡そ上堂衆に示して云く、一一蓋天蓋地せよ。更に立と說き妙と說かず、亦心と說き性と說かず、突然として獨露す。大火聚の如し之れに近く時は則ち面門を燎却す。太阿の劒に似たり之れに擬する時は則ち喪身失命す。若し也た停思佇機せば則ち沒交涉。只百丈黃檗に問ふが如くんば甚の處よりか去來する。檗云く、大雄山下に菌を採つて去來すと。丈云く。還りて大蟲を見るや。檗便ち虎聲を作す。丈便ち斧を拈して斫る勢を作す。檗遂に百丈を打すること一摑。丈吟々として笑ふ。便ち歸りて陞座。衆に謂つて云く、大雄山に一の大蟲あり汝等諸人切に須らく好く看るべし。老僧今日親しく一口に遭ふと。趙州凡そ僧を見ては便ち問ふ。曾つて此の間に至るや。云く曾つて到る。或は云く曾つて到らずと。州總に云く、喫茶し去れと。院主云く、和尙尋常僧に問ふ。曾つて到ると曾つて到らざると總に道ふ喫茶し去れと。意旨如何。州云く。院主。主應諾す。州云く、喫茶し去れと。紫胡門下一牌を立つ。牌上に書して云く。紫胡に一狗あり上人の頭を取り中人の腰を取り下人の脚を取る。擬議すれば則ち喪身失命すと。或は新到纔に相看すれば、師便ち喝して云く、狗を看よと。僧纔に首を回へせば、師方丈に歸る。正に雪峰の南山に一條の鼈鼻蛇あり。汝等諸人切に須らく好く看るべしと道ふが如き、正當恁麼の時儞作麼生か祇對せん。前蹤を試まず試みに請ふ道へ看ん。這裏に到りて也た須らく是れ格外の句を會して始めて得べしと。一切の公案語言。擧し得て將ち來るも便ち落處を知らん。看よ他の恁麼に衆に示すことを。且らく儞がために行と說き解と說かず。還りて情識を將て測度し得てんや。是れ他家の兒孫自然に道ひ得て恰好なり。所以に古人道はく。言を承けては須らく宗を會すべし、自ら規矩を立すること勿れ。言は須らく格外あるべし、句は須らく透關を要すべし。若し是れ語窠窟を離れずんば毒海中に墮在せんと也。雪峰恁麼に衆に示す。謂ふべし無味の談人口を塞斷すと。長慶玄沙皆是れ他家屋裡の人にして方に他の恁麼の說話を會す。只雪峯南山に一條の鼈鼻蛇ありと道ふが如くんば、諸人還りて落處を知るや。這裏に到りて須らく是れ通方の眼を見して始めて得べし。見ずや眞淨に頌あり云く。鼓を打ち琵琶を弄す。相會ふ兩會家、雲門能く唱和す、長慶邪に隨ふことを解す。古典音韻無し。南山の鼈鼻蛇。何人か此の意を知る。端的是れ玄沙。只長慶恁麼に祇對するが如くんば、且らく道へ意作麼生。這裏に到りて擊石火の如く閃電光に似

て方に構得すべし。若し纎毫も去け盡さゞること有らば、便ち他底に構り得ず。可惜許。人多く長慶の言下に向つて情解を生じて道ふ。堂中總に聞く處有らば便ち是れ喪身失命せんと。有る者は道ふ元一星事なし。平白地上に這般の話を說いて人を疑はしむと。人他の南山に一條の鼈鼻蛇有りと道ふことを聞きて彌便ち礙著すと。若し恁麼に會せば且得沒交涉。只他の言語の上に去りて活計を作す。既に恁麼に會せずんば又作麼か會せん。後來僧有りて玄沙に擧示す。玄沙云く、須らく是れ稜兄にして始めて得べし。然かも此の如くなりと雖も。我は卽ち不恁麼と、僧云く。和尙又作麼生。沙云く南山を用ひて什麼か作さんと。但看よ玄沙の語中便ち出身の處あることを、若し是れ玄沙にあらずんば也た大に酬對し難からん。只他恁麼に南山に一條の鼈鼻蛇有りと道ふが如くんば、且らく道へ什麼の處にか在る。這裏に到りて須らく是れ向上の人にして方に恁麼の說話を會すべし。古人道く。釣魚船上の謝三郎、南山の鼈鼻蛇を愛せずと（一本に不愛南山。却り愛鼈鼻に作る）雲門に到りて柱杖を以て雪峯の面前に擲向して怕るゝ勢を作す。雲門蛇を弄する手脚ありて鋒鋩を犯さず。明頭も也た打着、他尋常に人の爲めにすること太阿の劒を舞ふが如くに相似たり。有る時は飛んで人の眉毛眼睫の上に向ひ、有る時は飛んで三千里外に向つて人の頭を取る。雲門拄杖を拋つて怕るゝ勢を作す。且つ是れ精魂を弄するにあらずや。他也た是れ喪身失命すること莫しや。作家の宗師終に一言一句の上に去りて活計を作さず。雪竇只雲門の雪峯の意に契證得することを愛するが爲めに所以に頌出す。

【字解】一。倘若し平展せば平展するに一任す。若し學人が實當に來たらば、師家も亦其機に應じ、若し亦一切を打破して向上に仕來らば、又其の機に應じて接得すとのこと。

二。雪峯巖頭欽山と同行なり。雪峯は福州雪峯山の義存禪師で德山宣鑒禪師の法嗣である。十七歲にて落髮。梁の開平二年戊五月二日入滅。壽八十七。臘五十九。在世中師の法席常に千五百の大衆を減じなかつたと云ふことである。巖頭は、鄂州巖頭の全豁禪師で又德山大師の法を嗣いだ人である。欽山は澧州金山文邃禪師で洞山了价の法嗣なれど雪峯巖頭と共に德山にも參じた人である。何れも靑原下五世の法孫でありて同門で然も親友であつた。そこが同行なりと云ふ處である。

三。鵞山店上に至りて。澧州の鵞山鎭と云ふところは、欽山に至るの道にあたると云ふことである。

四。一向に坐禪す。一向は一心一向。ヒタスラと云ふ程のことである。

五。嚗眠し去れ。目は睡眠を貪すと申して增一阿含に、世尊阿那律に告げて言はく、汝寢寐すべし。然る所以は、一切諸法は食に由りて存す。食に非らざれば存せず。眼は眠を以て食と爲すと說かれてある。

六。恰かも七村裏の土地に似て相似たり。七家村裏の泥を以て塑成したところの土地神の坐して倒れざるに相似たりと云ふことである。

七。敢て自ら瞞せず。知らぬことを知りたふりして鼻をそらすが自欺である。拙僧の胸中がどうもまだ穩かで御坐りませぬ程に、斯樣に工夫致しまするとと。知らぬことを知らずとするから。之れ自ら欺かざる處である。

八。播揚大敎。象骨山雪峯の法堂に播揚大敎の四大文字が額に揭げてあつたと云ふことであるからそれをかりて來たものである。

九。鹽官の上堂云云。鹽官は抗州鹽官の鎭國海昌院の齊安禪師と申して馬祖道一の法を嗣いだ人である。上

堂の文に。「夫れ諸佛の本源は、衆生の本有。迷ふ時空を呼んで色となし。了るとき色を呼んで空となす。色空明暗、終に差別なし。看破せば還りて同じ」とある。これが卽ち色空の義である。

一〇。此去つて三十年。　雪峯何を迂路たへて御座る。顏を洗つて物を言へ。そんな馬鹿なことを言ふではないぞ。教者の鋏箱持の云ふことよ。色の空のと論じ廻つて、それで埒が明くと思ふか。夢にも夢着するではないぞ。過水の頌。　筠州洞山の價禪師は雲巖曇晟の法を嗣いだ人で、青原下の四世の法孫である。

一一。洞山過水の頌と云ふは、一日師雲巖に問ふ。和尙百年の後忽ち人ありて遑りて師の眞をとり得るや否やと。問はゞ如何が祇對せん。雲巖曰く、但伊に向つて只這箇是れと道へ。師良久しうす。雲巖曰く。這箇の事を承當せんには、大に須らく審細にすべし。師猶ほ疑に滲る。後水を過ぎて影を覩るに因りて大に前旨を悟る。因て一偈あり曰く。

切忌從レ他覓。迢々與レ我疎。我今獨自往。處々得レ逢レ渠。渠今正是我。我今不二是渠一。應須レ恁麼會　方得レ契二如々一。

一二。自救不了。　他人を濟度することは偖置いて、先づお手元御用心と云ふ。

一三。一棒して什麼と道ふと。　ドウ道はるゝものか。

一四。是れ家珍にあらず。　眼耳鼻舌身意の六根門頭によつて得る所のものは、決して自己家中の珍寶とは申されぬと云ふのである。

一五。象骨山。　福州侯官縣の西百餘里の島にありと云ふが、その百餘里と云ふも例の六町一里のことであるから、邪程六十丁。先づ弱い二里の處である。唐の懿宗の咸通年中に、眞覺大師が吳越の方に遊び武陵に至りて法を德山に得。後岡中に歸りて芙蓉山の石室に入り大に禪風を鼓吹せられたが、其の後象骨峰を得てよりそこへ茅庵を建て、大象に接得せられたと云ふことである。雪峰の別山で其の形に依つて名をつけたものである。因みに雪峯の名は、師一日顚に上られた時偶ま降雪に遇はれてそこで一泊せられた。後岡王審知が、師に向つて。師象骨峰に往て何の異があると問ふたに對して、山頂には暴月ですら積雪が御座りますと答へられたので岡王が雪峯と名くべしと申したのでこれより雪峯と名づけたと云ふ話である。

一六。人生倏忽たり暫く須臾云云。　倏忽は、タチマチと云ふ程のことで疾流の義である。須臾は梵語の摩睺羅の譯語で、一日一夜は共に三十須臾よりなると云ふことである。此頌の大意は。人生は無常なもので光陰は恰も矢の如く忽ちにして過ぎ去つてしまふ。浮世那ぞ能く久居を得ん。こんな假りの世には決して永居は出來ないことである。我れ雪峯此の事の爲めに巔を出でゝ行脚に出るときはマダ三十二の年であつたに。烏兎匆々いつの間にか早や十年計りの春秋をむかへて、幸ひに此事を了り岡に歸つて見ればハヤ四十餘歲にもなつたことである。さればやがて時來れば此世を後にしなければならぬから。人の非を彼此云ふことは必ず止めて。自己の咎過を一つづゝでも除き去ることを勉めねばならぬ。吾れ雪峯。權貴富貴の人に報ずることちやが。閻王は何程貴くとも金魚の印しは怕れはせぬぞ。錦朱紫金銀珠玉を佩びたとて、夫れに怕れて許しはせぬから、一時も早く名聞利欲を離却して必ず此の大事を明めねばならぬ。金魚は、唐書に高宗皇帝が召命の詐を防ぐために、三品以上は金。五品以上は銀で魚の形の袋を作りそれを佩びて參內して。間違のない證據にさせられたと云ふことから出たこと、申されて居る。

一七。太阿の劒。　楚王が風潮子を召して吳越に往き歐冶子干將に見みへて鐵劍三枚を製せしめた。一は龍泉。高山に登り深淵に臨むが如き狀。二は太阿。巍々翼として流水の波の如き狀。三に上市。これは文間より起りて春に止まり。止まれば珠の如くにして枉らず、流れて絕へざる底の狀であると云ふが。今は寶劒と云ふ名詞に用いたものである。

一八。大雄山。　百丈山の本名で其高さが百丈もあると云ふので百丈山と名けられた。第廿六則に百丈大雄峰と云ふ一則がある。百丈は百丈山の懷海禪師で馬大師の法を嗣いだ人である。黃檗は洪州黃檗山の希運禪師で百丈大師の法嗣である。

一九。吟吟として笑ふ。　吟々は少しくエミを含んで笑ふ貌であるから。黃檗に猛虎の作畧のあるのを悅ばれたさまである。

二〇。趙州。　おなじみの趙州從諗禪師は南泉普願禪師の法を嗣いだ人である。

二一。紫胡。　衢州子胡の利嚴禪師は同じく南泉の嗣である。

二二。鼈鼻蛇。　蛇の名で。其鼻鼈の如しと云ふことである。此の蛇最も毒多く、人若し之れに嚙まるゝ時は藥の醫すべきなしと申されて居る。

二三。一切の公案。　人若し格外の句を會得して見よ。一則卽ち一切則で破竹の勢ひを以つて一切の公案を透脫することが出來よう。

二四。長慶玄沙。　長慶慧稜。玄沙師備。共に雪峯大師の法を嗣いだ人である。

二五。眞淨。　隆興府の寶峰克文雲庵眞淨禪師は黃龍慧南の法を嗣いだ人で臨濟大師八世の法孫である。

二六。鼓を打ち琵琶を弄す。　長慶玄沙、打チつ。ハヤシつドンチヤン〳〵と相槌ちをあはせられた。雲門能く提唱す。中にも雲門のが最も面白い。古曲音韻なし。元々より古曲のことであるから五音六律のネジメには乘らぬ一曲である。偖鼈鼻蛇の曲調妙訣は何人がその眞意を知るかと云ふに、それは恐くは雪峯の嫡子玄沙大師であらう。

二七。平白地上に這般の話を說いて人を疑はしむ。　平生明白の地上もなきにと云ふ按梅。

第五節　類則提唱

其一　虎話

百丈問二黃檗一甚處去來。下語云。似レ要レ知二來處一。

平生此の事に心があるものか。亦只遊山ばかりを本にするものか、又何たる心が有りて來たるかを知るべき爲めに來處を問ふたぞ。

檗云、大雄山下採レ菌去來。下語云。有レ問有レ答。會二問頭一。

句中を勘破して問はれたれば、菌子を採りて候と答へたは、鐘を强く撞けば大に鳴り。ソッと撞けばソッとなる如くに、問に應じて答へたぞ。

丈云、還見二大蟲一麼。下語云、逼二塞乾坤一。充二塞六合一。

大蟲とは本分を指して云へり。汝山へ行きて大蟲を見たかと問ふぞ。大蟲と云ふは虎の名なり虎を本分に用ひて本分を見たかと問ふ心也。

檗便作二虎聲一。下語云。誰敢近傍。牙如二鋸樹一。口似二血盆一。

是れも本分ぞ。虎になり切つて虎聲を作したぞ。是れを黃檗虎の話と云ふ也。先師云く。虎になりきつたとは、何と用いたぞ。答へて云く全體作用したものなり。

丈便拈レ斧作二斫勢一。下語云。鑕レ之彌堅。

本分の方なり。又拋二向面前一。本分を面前に拋向して見せたぞ。又字面は黃檗本分になりきつて虎の聲をなした程に其の虎を切る心也。

檗遂打二百丈一一摑。手舞足蹈。

一摑したも本分の上からした程に此句を用ふるぞ。一摑は手を握つてソデ打にする也。本分を提露して一摑したほどに手舞足蹈と云へり。又云く。本分を自由三昧に打つて見せたぞ。又云

く。本分は手中にも足下にも充ち滿ちてあるものぢや程に、打て露はして見せたぞ。これをみよと云ふ處ぞ。先師の語話に。古則に定辨と云ふことあり。千年田八百主と云ふ處ぞ。大應（南浦紹明禪師）の前で大燈（大德寺開山宗峰妙超禪師）の辨に、主が替れば歌かはると。是等が定辨なり。平展とは辨なり。一摑は手のワキにて打つなり。

丈吟々而笑。下語云。驗二人端的處一。下口便知音。

知音して笑つた也。又。二六時中造次顛沛。此事を心にかくるものかと思ふて拶したに。少しも滯らず答へた程に、オー好ふ心得たぞ。左樣だに心得たらば、別の事はないぞと云ふ心で。コロ〳〵と笑つたぞ、吟々として笑ふと云ふは。喉でコロ〳〵と笑ふことなり。

丈便歸陞座謂衆云。大雄山下有二一大蟲一。汝等諸人切須二好看一。下語云。猛虎當路坐。

先師云く。千眼看て見ざるの意旨如何。語に曰く。難二近傍一。牙如二劒樹一。口似二血盆一。辨じて曰く。前は葉と問答し、又爰は大衆に示して上堂するなり。何れも本分の方ぞ。

老僧親遭二一口一。下語云。萬里一條鐵。

上堂を色相に用ひ、大蟲と云ふを本分に用ひて萬里一條鐵と見る也。又云く萬里は一條の鐵と見た處が遭二一口一也。先師云く。此の古則どこが肝要ぞ。萬里一條鐵の處を簡要に用ひて候。最初より虎の聲を作し、斫る勢をなし、打ちなんとしたるは、皆萬里一條鐵の境界をあらはして見せしめた程にぞ。師學共に萬里一條の鐵の處を露した也。

其二　喫茶去

趙州凡見二僧一便問。曾到二此間一麽。云曾到。或云不二曾到一。州總云喫茶去。下語云。月白風清。清風明月。

何の心も無く、茶飲でいかしねと云ふたを現成に用ひたことぞ。又鳥飛毛落。此れは禍僧の云ふには、自然に句中が備るなり。

院主云。和尚尋常問二僧一曾到與不二曾到一。總道喫茶去。意旨如何。州云院主。主應諾。州云喫茶去。下語云。魚行水濁。

此れも辨前と同じ。

其三　紫胡牌

紫胡門下立二一牌一。々上書云。紫胡有二一狗一。上取二人頭一。中取二人腰一。下取二人脚一。擬議則喪身失命。下語云。牙如二劒樹一。口似二血盆一。

本分の近傍しがたい處を人喰ひ犬に用ひて云ふたぞ。

又別に下語あり。一箭兩梁。此れは喪身失命すと云ふて、おどしかけたる句中なり。句中と本分と兩面同じきぞ。牙如劍樹とは本の下語たり。一箭兩梁は先師の別して召された下語ぞ。相似底とはちがふたぞ我ならばかう云ふと云ふて別して下語することが多きぞ。其心ぞ。

或新到纔相看師便喝云看狗。下語云。一槌兩當。

ヤイ鈍な奴ぢやと云ふて喝したは爲人なり。看狗と云ふたは本分爲人なり。爲人は本分の用ぢや程に落居は一つぞ看よと云はれたは一言爲人して云ふた方もあり、句中の方もありて權實備る也。そこで一箭兩當ぞ。

僧纔回首師便歸方丈。下語云。曲終人不見。江上數峯青。

回首と云ふ處には下語なし。曲て云ふは句中ぞ。色々に爲人すれども得心得へぬ鈍な奴ぢやと思ふて、音させずに引き込んだは恐ろしい句中ぞ。收めて歸りた落居は江上數峯青までよ。

【請益】或有僧問。如何是紫胡一隻狗。師云。嘷々。下語云。道老賊。

紫胡が犬になりきつて我こそ犬よと云ふ心に嘷々と云ふたは賊ぞ。直な心では無いぞ。嘷々は熊虎の吠ゆる聲ぞ。此れは前の類則に因んで問ふたものぞ。

上取人頭手を以て頭を取る勢をなすことぞ。下語せず又辨もなさず。

中取人腰。腰をとる勢をなすことぞ。

下取人脚。下語云。萬里一條鐵。脚を取る勢をなすことぞ。

頭ぢや腰ぢや脚ぢやと云ふは、色相ぢやほどに萬里ぞ。取と云ふは、取了落居は、沒縱跡なところ本分ぞ。故に一條鐵ぞ。請益はこれ迄ぞ。是れは鼈鼻蛇の類則ぢや程に始終本分で見たつべきぞ。此請益は學者を本分に導き入れて自由自在に本分を用いさせて見も爲めに請益さするぞ。古則ごとに此心持ちがあるぞ。古則によりては何の爲めに參するぞと拶することもあるぞ。批判の內にあれども類則でなき古則もあるが、何の爲めにそれを引きたと拶することもあるぞ。此れ皆先師の吾れへの仰せことぞ。

其四　如何是宗

承言須會宗勿自立規矩如何是宗。下語云。月白風清。

宗と申して別の事がありてこぞ。我が宗門の上の用と云ふことは別にないぞ。現成を平生何の道理もなく用ふるところこそ宗門の肝要ぞ。宗は現成なり。規矩は則り法度也。

第六節　頌

象骨巖高人不レ到千箇萬箇機索不着。非公境界到者須二是弄レ蛇手一隊作什麼。也須是同火始得稜師備師不二奈何一放過一着。喪身失命有二多少一罪不重科。帶累平人韶陽知猶較些子。這老漢只具一隻眼。杖頭看。高着眼。便打拋二對雪峯一大張レ口自作自受。呑却千箇萬箇濟大張レ口今同二閃電一公案。果然。在什麼處。便打南北東西無レ處レ討有麼有麼。闇黎眼瞎。忽然突出拄果然。頼有剔起眉毛還不レ見人也難得。如今在什麼處。麼如今藏在二乳峯前一處去也。後句大小雪竇也作這去就。來者一一看二方便一瞎。莫向脚跟下看。看取上座脚跟下。着一箭了也。師高聲喝云。山僧今日也遭一口

看二脚下一賊過後張弓。第二頭第三頭。重言不當吃

【讀方】頌に曰く。象骨巖高うして人到らず。千箇萬箇機索不着。公の境界に非ず。到る者は須らく是れ蛇を弄するの手なるべし。是れ精は精を知る。是れ賊は賊を知る。群を成し隊を作して什麼をか作さん。須らく是れ同火にして初めて得てん。稜師備師奈何ともせず。一狀に領過す。一着を放過す。喪身失命多少か有る。罪は重れて科せず。平人を帶累す、韶陽知つて。猶些子に較れり。這老漢只一隻眼を具す。老漢免れず伎倆を作す。重ねて草を撥ふ。落草の漢。什麼の用處がある。果然。什麼の處にか在る。便ち打つ。南北東西討ぬるに處無し。有りや有りや。闇黎眼瞎す。忽然として突出す拄杖頭。看よ。高く眼を着けよ。便ち打す。雪峯に拋對して大に口を張る。自作自受。千箇萬箇を呑却するも什麼の事をか濟さん。天下の人機索不着。大に口を張る閃電に同じ。兩重公案。果然。頼ひに末後の句あり。眉毛を剔起すれば還つて見えず。蹉過了也。五湖四海恁麼の人を寛むるに也た得がたし。如今什麼の處にか在る。如今藏れて乳峯の前にあり。什麼の處に向つて去るや。大小の雪竇也た這の去就を作す。山僧今日也た一口に遭ふ。來者は一々方便を看よ。瞎。脚跟下に向つて看る莫れ。上座が脚跟下を看取せよ。一箭を着け了れり。師高聲に喝して云く脚下を看よ。賊過ぎて後弓を張る。第二頭第三頭。重言は吃に當らず。

【字解】一。千箇萬箇機索不着。雪竇の申される通り。中々探り當てられるものではない。二。公の境界に非ず。そうは言はれるけれども、雪竇貴公の境界で御坐るまい。ハテ何人の境界であらう。三。是れ精は精を識り賊は賊を識る。餅は餅屋であるから。三大老の如き蛇使ひでなくば、蛇の道は明るまい。四。群を成し隊を作して什麼をか作さん。眞の知音は多くを要しないけれども。烏合の大衆では何事をも作し得まいことよ。五。須らく是れ同火にして初めて得てん。「親しく江南の軍法を見るに、五人を伍と云ふ。伍に一鍋を帶び同じく飯を煮て喫す是れを同火と謂ふ」と申して同火は同じ釜の飯と云ふ程のことであるから同じ釜の飯を食ふた者でなくては、本當の味は分るまいと申したものである。六。一狀に領過す。長慶玄沙の罪を、雪竇一樣に宣告せられたが。然しその雪竇も亦同罪であるから決して許すことは出來ぬと云ふ。七。一着を放過す。ナント諸人伺ひが附くかな。好い手を打つて見やれ。八。罪は重れて科せず。雪竇二度の穿鑿はいらぬことであらうと云ふ。九。平人を帶累す。一切衆生本來成佛。何も幾人かあるなど、他人に迷惑を掛けなくとも好いぞ。一〇。猶些子に較れり。少しは許せる好い働き振である。

一一。這の老漢只一隻眼を具す。　雲門片眼を具へられたと誹るのか褒めるのか爰は參究して見なければならぬ。

一二。老漢免れず伎倆を作す。　吾々に鼈鼻蛇を見させやふとて。雲門色々に心配して御座るやうである。

一三。落草の漢。雲門何程撥かれても蚯蚓は出ても蛇は出まいぞと云ふ。これが兒を憐んで家醜を忘れたる貌である。

一三。什麽の用處か在る。　蛇は出ましたかなと云ふ。

一四。果然。　ナニ蚯蚓が出たと。テツキリそんなことぢやらうと思ふたと云ふ。

一五。什麽の處にか在る。　雲門草を撥かれるが。蛇はドコに居るかな。

一六。便ち打つ。ナニ居たとな。柱杖頭上にニヨキリ首をもたげ出しました。出たは、這の叢蛇めとなぐり出す。

一七。有りや有りや。　蛇は居たかナ。諸人探しやれと云ふ。

一八。闍黎眼瞎す。　ソレ其處に居るのが見えないか。貴公は盲目になつたのと野次る。

一九。看よ。　ソレ見よ。之れが鼈鼻蛇であるぞと云ふ。

二〇。高く眼を着けよ。ナニ脚跟下ではない。ソラ此處ぢや、雲門の柱杖頭に見よと云ふ。

二一。便ち打す。　見そこなつたら許さぬぞとビシヤリ。

二二。自作自受。　雪峯手飼の蛇であるから。一呑みにせられても人のヲザではないから。更々人を怨みなさるなと云ふ。

二三。千箇萬箇を呑却するも什麽のことなか濟さん。　何さ程のこともあるまい。諸人騷がれるなと。是れ圜悟好看の眼。

二四。天下の人模索不着。　盡大地の人。何人と雖も探り當てることは出來まい。

二五。兩重の公案。　大ひに口を張るなどゝ。又しても同じことを。好く氣を附けられよ。

二六。果然。　テツキリさうであつた。思ふた通りと云ふ。

二七。賴ひに末後の句あり。此の閃電光で毒蛇が活きて來た。左もないと口を開いたまゝ見世物に出されるところであつたと云ふ。

二八。蹉過了也。　見樣と思つたのに早や行方が知れなくなつた。

二九。五湖四海恁麽の人を覓むるに也た得がたし。　頻りに見たがる者計りありて、盡天下見んと要せざる底の者は殆んど得がたいことである。

三〇。如今什麽の處にか在る。　卽今彼の鼈鼻蛇はどこへ藏れて居るであらうと云ふ。

三一。什麽の處に向つて去るや。一寸見へないやうであるが。何處へ往つてしまうたであらうとソラ目使ふた處である。

三二。大小の雪竇也た這の去就をなす。雪竇も好い加減なことをする男で。鼈鼻蛇が自分の手裡にあるなんて手品師のまゝごと見たやうである。

三三。山僧今日也た一口に遭ふ。圜悟も今日鼈鼻蛇に呑まれたことぢやが。何んと諸人はと申して情も雪竇はあぶないことであると云ふ。

三四。瞎。　明き盲目ども何んと見えるかどうか。見そこなふなよ。

三五。脚跟下に向つて看る莫れ。何にも脚跟下計りにのさばつては居らぬぞ。水にもいれば空にも昇る盡天地居らぬ處はないと云ふ。

三六。上座か脚跟下を看取せよ。　雪竇イカイお世話ぢや。他人の世話計りやかずに、先づ御手前の脚跟下に氣を附けなされ。サツかりすると逃げまするぞと注意する。

三七。一箭を附け了れり。　確かにてごたへがあつた。ソレ其處に居樣がなと目くばせする。

三八。賊過ぎて後弓を張る。　雪竇今になつて大聲で云ひやるか。遲い〳〵。何故早く云はれなんだか、鼈鼻蛇は逃げて仕舞つたと云ふ。

三九。第二頭第三頭。　何程申されたところで、徒勞なことである。役に立たぬ。

四〇。重言は吃に當たらず。　吃はどもりと訓する字で。過ぎたるは尙及ばざるが如し。と云ふから餘り云ひすぎると。云

はぬに劣るから、モウ止めて給はれと云ふ。

【講義】　象骨巖高ふして人到らず、象骨と云ふは、雪峯山の別名で。山の形に依つて名づけられたものである。そこで義存大師の機鋒峻嶮にして、道德の氣高きことを嘆美せんために、其の居住の山にことよせて、人到らずと容易に寄り附けぬ樣子を謠ふた。到るものは須らく是れ蛇を弄する手なるべし。雪峯山には怖ろしい毒蛇が棲んで居ると云ふことであるから、ウッカリ寄り附いて見よ、必ず呑み込まれて仕舞ふに相違ない。されば爰に到るには餘程の蛇使ひの名人でなくば中々到りおふせることは出來ない。稜師備師は奈何ともせず。稜は長慶の慧稜和尙、備は玄沙の師備和尙で、兩和尙とも今日堂中云云と云ひ。或は南山を用ひて什麼かせんなど言ふて居るが。之れを雪峯和尙に較らべて見ると。イカサマ一機軸には違ひないが蛇の使ひ樣が餘程替つて居る。サスがは雪峯蛇使ひには餘程馴れて御坐ると見へて蛇を弄すること實に妙々である。喪身失命多少かある。長稜は今日堂中に人有りて喪身失命すと云はれたが。果して喪身失命したものが幾人あるであらう。ナニ盡大地スッパリ死人に成つたと。怖ろし〳〵諸人ウッカりしてさゝれるなよ。韶陽知りて重ねて草を撥ふ。韶陽は雲門のことで。文偃禪師は韶州雲門山に居られたから韶陽と云ふ卽ち雲門は更に一機輔を出して、其の鼈鼻蛇は何處に居るぞ。南山か堂中か天上か天下か、將た地獄か極樂かと。拄杖を提げ來りて、草木の生茂居る處を頻りに探し初めたが。南北東西討ぬるに處無く。爰にも居らぬ。彼處にも居らぬ。東西南北スッパリ沒縱跡。ハテ這の鼈鼻蛇マサか人の噂さばかりではあるまいに。これは何としたことぞと思へば。げにも知れぬこそ道理。忽然突出す拄杖頭。ソリや見たことかニョッキリ面を出した。其れ是れが鼈鼻蛇であるぞとドサりと擲げ出して。雪峯に拋對して大ひに口を張る。大口あいて雪峯老漢を一呑みにしやうとする勢ひ。何も雪峯に限りたことでない。三世の諸佛も歷代の祖師も皆一呑みにしやうとする勢い蛇。然るにアレヨと見る中に是れはいかに。大ひに口を張る閃電に同じ。擊石火の如く閃電光の如く今にも飛び掛りて一呑にと云ふ鼈鼻蛇がどこへ往つたか早や行方が知れなくなつてしまうてスッカリ沒縱跡である。眉毛を剔起すれば還て見へず。眉毛を剔起すると云ふは物を見んとして目を見はる貌を形容したものである。雲門然てはと眉毛をつりあげ眼を光らして見廻はしても。サッパリ行方が知れぬ。何處にも見へぬ。何んと皆さん。世の中の人がやれ哲學やれ科學と色々に心配して宇宙萬象の眞相を搜らうとしても。それはタハゴトヒガゴトで埒もないことでありますぞ一狐疑し了りて亦一狐疑すと申して疑ひに疑ひが重なりて愈々搜れば愈々遠く所詮解決がつくものではござりませぬぞ。何にもせよ其の蛇の行方はと申すに。如今藏れて乳峯の前にあり。乳峯と云ふは雪峯山のことで。卽ち彼の鼈鼻蛇は現在我が手の中に居る。見たい人があれば見せてあげやうと云ふので。來る者は一一方便を見よ。我が乳峯に來るものは此の藏れて居る毒蛇の見方がある。

何うすれば見へるか、其の手段方法に能く氣をつけよと申して置いて、師高聲に喝して云く。此れは筆記者の言葉であるから、これで見ると、此時雪竇老師は、威を振ふて大喝一聲カアーッと號んで直ぐに、脚下を見よ。ソラ諸人脚下を見よ。名高い雪峯山の毒蛇がそこに居るがソレ見へたかどうかと示された。是れが雪竇がお互に鼈鼻蛇を見せて下さる方便である。

第七節　頌評唱和譯

象骨巖高ふして人到らず。到る者は須らく是れ蛇を弄するの手なるべし。雪峯山下に象骨巖あり。雪峯の機鋒高峻にして人の他處に到ること有る罕なり。雪竇は是れ他の屋裡の人。毛羽相似て同聲相應じ同氣相求む。也た須らく是れ通方の作者にして共に相證明すべし。只這鼈鼻蛇。也た妨げず弄し難きを。須らく是れ弄することを解して始めて得べし。若し弄することを解せずんば反りて蛇に傷げられん。五祖先師道く。此の鼈鼻蛇須らく是れ手脚を傷犯せざる底の機ありて。他の七寸の上に於いて、一揑に揑住し便ち老僧と手を把りて共に行くべし。長慶玄沙に這般の手脚あり。雪竇道はく。稜師備師は奈何ともせずと。人多く道ふ。長慶玄沙奈何ともせず。所以に雪竇獨り雲門を美むと。且得沒交渉。殊に知らず三人の中。機に得失なく唯是れ親疎あることを。且らく諸人に問ふ。什麽の處か是れ稜師備師奈何ともせざる處ぞ。喪身失命多少かある。此れは長慶今日堂中に大ひに人ありて喪身失命すと道ふを頌す。這裡に到りて須らく是れ蛇を弄する手ありて子細にして始めて得べし。雪竇は他の雲門より出づ。所以に一時に撥却して獨り雲門の一箇を存して道ふ。詔陽知つて重ねて草を撥ふと。蓋し雲門他の雪峯の南山に一條の鼈鼻蛇ありと道ふ落處を知るがために所以に重ねて草を撥ふと云ふ。雪竇頌して這裏に到りて更に妙處あり。云く。南北東西討ぬるに處無し。儞道へ什麽の處にか在る。忽然として突出す柱杖頭と。元來唯這裡に在つて儞便ち柱杖頭上に向つて活計を作し去るべからず。雲門柱杖を以て雪峯の面前に擲向して怕るゝ勢を作す。雲門便ち柱杖を以て鼈鼻蛇と作して用ふ。有る時は却りて云ふ。柱杖子化して龍と爲つて乾坤を呑却し了れり。山河大地甚の處よりか得來ると。唯此れ一條の柱杖子。有る時は龍と作り有る時は蛇と作る。什麽としてか此くの如くなる。這裏に到りて方に知る。古人の心は萬境に隨つて轉ず。轉處實に能く幽なりと道ふことを。頌して道く。雪峯に抛對して大ひに口を張る。大ひに口を張る閃電に同じと。雪竇餘才あり。雲門の毒蛇を拈出して云く。唯這の大ひに口を張る閃電同じく相似たり。儞若し擬議せば則ち喪身失命せん。眉毛を剔起すれば還りて見えず。什麽の處に向つてか去るや。雪竇頌し了りて須らく活處に去りて人の爲めにすべし。雪峯の蛇を將て自ら拈し自ら弄す。妨げず殺活時に臨むことを。見んと要すや。云く。如今藏れて乳峯の前にありと。乳峯は乃ち雪竇山の名なり。雪竇頌あり云く、石臆四に顧みれば蒼溟

窄し。寥寥として許さず白雲の白きことを。長慶玄沙雲門弄し得と雖も了に見えず。却りて云ふ。如今藏れて乳峯の前に在り、來者は一一方便を看よと。雪竇猶ほ廉纖に涉ることあり。便ち用いよと言はずして却りて高聲に喝して云ふ脚下を看よと。從上來多少の人有りてか拈弄する。且らく道へ還りて曾つて人を傷着するか曾つて人を傷着せざるか。師便ち打す。

【字解】一。同聲相應じ同氣相求む。是れ易の語であつて水は濕に流れ火は燥に就き雲は龍に從ひ風は虎に從ふと申して。辛黨は辛黨、甘黨は甘黨であるから、通方の作者と申して東西南北四維上下一時に通達する底の見識なくんば、雪峯の禪機は會得せらるゝものでないと云ふことを申したのである。

二。五祖先師。五祖法演禪師は白雲守端の法を嗣いだ人で。圜悟大師の嚴師である。此語は演祖の廣錄には見へて居らぬから恐らくは圜悟の親聞であらう。

三。他の七寸上に於いて。蛇は頭より頸に至る七寸の處が其の至命の處である。そこで今の意は最も緊要の處と云ふ程のことに用いたもの。

四。南北東西討ぬるに處なし。法堂に居るか草裡に居るか。將又人人各自の鼻孔に居るか、爰は是非とも調べて置かればならぬ。

五。元來只這裡に在り。脚跟下に居るか。柱杖頭に居るか、這裡とは是れ什麼の處ぞ。必ずしも柱杖頭と限りたわけでも、あるまい。盡大地之れ柱杖頭。人人自己に歸省して見なければならぬ。

六。古人道く。西天四七の第二十三祖摩拏羅尊者の鶴勒那比丘に法を傳へさせた時の偈である。

七。石聰四に顧みれば云云。石聰は四明のことであるが。然し此頌は後人の妄添であるからなくもがなである。

八。廉纖に涉ることあり。雪竇あまりサヽイな說話であると注意する。

第二十三則　長慶遊山

第一節　垂示

垂示云。玉將レ火試。金將レ石試。劒將レ毛試。水將レ杖試。至二於衲僧門下一。一言一句。一機一境。一出一入。一挨一拶。要レ見二深淺一。要レ見二向背一。且道將二什麼一試。請舉看。

【讀方】垂示に云く。玉は火を將て試み、金は石を將て試み、劒は毛を將て試み。水は杖を將て試む。衲僧門下に至りては。一言一句、一機一境、一出一入、一挨一拶。深淺を見んことを要し、向背を見んことを要す。且らく道へ。什麼を將てか試みん。請ふ擧す看よ。

【字解】一。玉は火を以て試み。淮南子に出て居ることで、文に「鍾山の玉灼くに爐炭を以てして三日三夜すれども色澤變ぜず。此れ玉は火を將て試むる所以なり。」と見へて居る。

二。金は石を將て試む。金は第一が紫黃色。第二が正黃色。第三が青黃色であると云ふことである。試金石は抄に其の狀圓渾して純黑色。金を將て上に置きて試みに之れを磨せば。其の色の眞僞高低を視て金の善惡を知る」と申してある。

三。劒は毛を將て試む。臨濟の頌に。吹き了りて急に須らく磨すべしとありて。利劒を試むるには毛を刃の上に吹きかくれば斬れる斬れぬが分ると云ふことである。

四。水は杖を將て試む。水の淺深は杖を以て度りて見ればよく分ることである。

【講義】玉は火を將て試み金は石を將て試む。これは先づ世間通例のことを擧げて。今わが衲僧門下に至りては、何を將て其の悟りを試驗して見たものであらうぞと云ふに。或は一言一句の問答の間に。或は一機一境の應對の內に。或は一出一入と進退往來行儀作法の內に。或ひは一挨一拶と申して。挨と拶は輕く觸るゝを挨と云ひ强く觸るゝを拶と曰ふと申してあるが、兎に角互ひに意見知識を交換する都べての姿の上で。參禪辨道の衲子の知見が如何ほど深いか淺いか。行業が如何に道に向いて居るか背いて居るかを檢査することが出來る。且く道へ什麽をもつてか試みん。然らば今我が圜悟門下に於いては、何を以て諸人を試驗した者であらう。試みに擧す看よ。それには今日保福の作用を見よと本則を拈出する。

第二節　本則

【擧】保福長慶遊山次遺兩箇落草漢福以レ手指云。只這裏便是妙峯頂平地上起骨堆。切忌道着。掘地深埋。慶云。是則ハ是。可惜許若不是鐵眼銅睛幾被惑了。雪竇着語云。今日共二這漢一遊山。圖二箇一什麽不妨減人斤兩。稽一較些子。傍人按劒。復云。百千年後不レ道レ無。只是少。少賣弄。也是後擧似鏡清。有好有惡。清云。若不二是孫公一。便見二髑髏遍レ野。同道者方知。大地茫茫愁殺人。奴見婢愁懃。設使臨濟德山出來也須喫棒。

【讀方】擧す。保福長慶遊山する次で。遺の兩箇落草漢。福手を以て指して云く。只這裏便ち是れ妙峯頂平地上に骨堆を起す。切に忌む道着することを。地を掘りて深く埋む。慶云く。是なることは則ち是なれども可惜許。若し鐵眼銅睛にあらずんば幾んど惑了せられん。同病相憐れむ。兩箇を一坑に埋却せん。雪竇着語して云く。今日這の漢と共に遊山して箇の什麽をか圖る。妨げず人の斤兩を減ずることを。猶些子に較れり。傍人は劒を按ず。復云く。百千年後無しとは道はず。只是少し。小賣弄。也た是れ雲居の羅漢。後に鏡清に擧似す。好あり惡あり。清云く。若し是れ孫公にあらずんば便ち髑髏野に遍きことを見ん。同道の者方に知る。大地茫茫として人を愁殺す。奴は婢を見て懃懃。設使臨濟德山出で來るも須らく棒を喫すべし。

【字解】一。保福。保福は第八則にあつた通り漳州保福院の從展禪師で長慶は福州長慶慧稜禪師である。共に雪峯の法を嗣いだ人。

二。這の兩箇落草の漢。保福長慶共に正路を行かずに横道へ入つたぞ。

三。平地上に骨堆を起す。保福餘計なことを云ふて。平坦なる處に凸凹を出來したと云ふ。此の語は大慧武庫に。慈照聰禪師が襄州石門に住ぜられたとき。土地の太守が一日私意を以て笞うつて師を辱かしめた。師院に歸るに及び大衆が道に迎へて問訊して、太守無辜和尚を屈辱することかくの如きと云ひかけたれば、師手を以て地を指して、平地上に骨堆を起すと申された。すると其處に一堆の土が湧き出した。そこで太守がこれを聞いて人を遣つて削去せしめたけれども。依然として元の如く湧き出したと云ふ話がある。それから取つたものかと思はれる。

四。切に忌む道着することを。只這箇と云ふ丈けでもはや葉山蟻塚となるから必ず其の樣なことを口に出されるなと云ふ。

五。地を掘りて埋めよ。　妙峰頂と聞けば何となく高い氣がして妄想が起るから。地を掘て埋めて仕舞へと云ふ。

六。若し是れ鐵眼銅睛にあらずんば幾んど惑了せられん。　長慶は金眼銀睛の非凡な人だから一言可惜許と云ふて蹴飛してしまつたけれど、尋常の人ならば保福に惑はされるであらうと云ふ。

七。同病相憐れむ。　是なることは則ち是なりと云ふから。恐らく二人とも同じ病氣にかゝつて居る人であらう。

八。兩箇を一坑に埋却せん。　イツソ二人とも埋んで仕舞へばよい。病人には用事はないから。

九。妨げず人の斤兩を減ずることを。　斤兩を減ずると云ふは價値が下るとか目方が減るとか云ふことであるから。雪竇人の秤目を押取せられるな保福長慶兩大家の威嚴にかゝはるからと云ふ意味である。

一〇。猶些子に較れり。　少しは許せると闡悟も贊成する。

一一。傍人鉤を按ず。　保福長慶タワイもない問答をして居られるが、追剝が居るから用心が必要であると注意する。

一二。少賣弄。　雪竇安賣りして一儲けしやうとても。品が惡いから押し賣りしても買手があるまい。

一三。也たこれ雲居の羅漢。　雪竇怖ろしい高慢ちやな。鼻が高すぎはせぬかとからこうた。

一四。好あり惡あり。　鏡清に判斷させたら保福長慶との好惡が分るであらう。

一五。同道の者方に知る。　鏡清卽ち順德大師道忿で同じく雪峯の法嗣であるから同じ穴の狐で能く知つて居る筈であると云ふ。

一六。大地茫々として人を慾殺す。　潭州龍牙の宗密禪師の上堂に三界茫々として人を慾殺すとあると同じことで。大地茫々たる處に覿體の遍き有樣を見ては慾殺せぬものはなからうと申して、然し闡悟が見れば靈大地皆死漢であつて、此の事を知得底のものゝないのは誠に悲しきことであると云ふ。

一七。奴は婢を見て慰懃。　兄弟三人互ひに親密なやうであるか。奴婢の親切合ひは傍から見ると見にくいものである。

一八。設使臨濟德山出で來るも須らく棒を喫すべし。　サスがは鏡清である。此の調子では臨濟でも德山でも立派に粉碎せられるであらうと鏡清の見識と言句の氣高い所を賞めたものである。

第三節　本則提唱

保福長慶遊山次。以手指云。只這裡便是妙峯頂。下語云。無孔鐵槌當面擲。

妙峰頂と云は、本分を指したものぞ。以手指と云ふたは爲人ぞ。敎には妙峰頂と讀むぞ。先師下語に。風吹不入水洒不着。

慶云。是則是。可惜許。下語云。知音知後更誰知。驗人端的處。下口便知音。

是則是と云ふたは本分に能く知音して先づさうぢやと云ふ也。長慶保福本分を御示しありて殊勝にあれども。大事の本分を率爾に仰せられたは、アツタラ物を云ふたぞ。可惜許と云ふは、されどもそうは云ふまいものを。惜しみ許すべしと云ふことぞ。先師下語に。道遠知馬力。年久知人心。若是不同參爭得辨端的。

雪竇着語云。今日共這漢遊山圖箇什麼。下語云。兩箇石人相耳語。

復云。百千年後不道無唯是少。下語云。花知一樣春。

保福の爲人して云はれたを知音して。保福のやうなる僧は。百年の後は稀れにあらふずと云ふ

處を、唯是れ少しと褒美して云ふたことぞ。先師下話に。半開半合。一手擡一手搦。千兵易得一將難求。

後舉似鏡清清云若不是孫公便見髑髏遍野。下語云。知音更在青山外。同坑無異土。

孫公とは長慶のことなり。長慶は杭州鹽官の人、姓は孫氏と聞くぞ。長慶の可惜許と云ふたを。鏡清の褒美して。長慶のやうなる慈悲の心がなくんば、野にも山にも輪廻して色相を受くる者があらふぞと云ふ處ぞ。又云く。清長慶を褒美して如斯御答へなくば天下の人は皆死人にならふぞと也。先師下語に成人者少敗人者多。

第四節　本則評唱和譯

保福長慶鏡清、總べて雪峯に承け嗣ぐ。他の三人同得同證。同見同聞。同拈同用。一出一入。遞ひに相挨拶す。蓋し他は是れ同條に生ずる底の人なるが爲めに、舉着すれば便ち落處を知る。雪峯の會裡に在りて居常問答するに、唯是れ他の三人なり。古人行住座臥に此の道を以て念となす。所以に舉着すれば便ち落處を知る。一日遊山する次で、保福手を以て指して云く。唯這裏便ち是れ妙峰頂と。如今の禪和子。恁麼に問着すれば便ち唯匾擔に似たり。賴ひに長慶に問着するに値ふ。儞道へ保福恁麼に道ふて箇の什麼をか圖る。古人此くの如く他の有眼無眼を驗べんと要す。是れ他の家裡の人。自然に他の落處を知りて便ち他に對して道ふ。是なることは則ち是なり。可惜許と。且らく道へ長慶恁麼に道ふ意旨如何。一向に恁麼にし去るべからず。似たることは則ち似たり等閑に一星事無きこと有るは罕なり。賴ひに是れ長慶他を識破す。雪竇着語して云く。今日這の漢と共に遊山して箇の什麼をか圖ると。且らく道へ什麼の處にか落在する。復云く。百千年後無しとは道はず只是少しと。雪竇點胸を解す。正に黃檗の禪なしとは道はず只是れ師無しと道ふに似たり。雪竇恁麼に道ふ。也た妨げず險峻なることを。若し是れ同聲相應するにあらずんば、爭か此の如く狐危奇怪なることを得ん。此れ之れを着語と謂ふ。兩邊に落在す。兩邊に落在すと雖も却つて兩邊に住せず。後に鏡清に擧示す。清云く、若し是れ孫公にあらずんば便ち髑髏野に遍きことを見んと。孫公は乃ち長慶の俗姓なり。見ずや僧趙州に問ふ。如何なるか是れ妙峯孤頂。州云く。老僧儞に這の話を答へず。僧云く。什麼としてか這の話を答へざる。州云く。我若し儞に答へば恐くは平地上に落在せん。敎中に說かく。妙峯孤頂の德雲比丘。從來山を下らず善財去つて參す。七日までに逢はず。七日却りて別峯に在つて相見す。見え了るに及んで却つて他のために一念三世、一切諸佛、智慧光明普見の法門を說く。德雲既に山を下らず什麼に因てか却りて別峯にありて相見する。若し他山を下ると道はゞ、敎中に道ふ。德雲比丘、從來曾つて山

を下らず常に妙峯孤頂にありと、這裏に到りて德雲と善財と的々那裏にか在る。自後李長者葛藤を打す。打し得て好し。道く。妙峯孤頂は是れ一味平等の法門。一一皆眞なり。一一皆全し。無得無失無是無非の處に向つて獨露すと。所以に善財見えず。稱性の處に到りては、眼自ら見ず、耳自ら聞かず、指自ら觸れざるが如く。刀自ら割かず、火自ら燒かず、水自ら洗はざるが如し。這裏に到りて敎中大いに老婆相爲めにする處あり。所以に一線道を放つて第二義門に於いて賓を立し主を立し機境を立し問答を立す、所以に道ふ、諸佛出世せず亦涅槃あることなし。方便して衆生を度す。故に斯くの如きの事を現すと。且らく道へ畢竟作麼生か鏡淸雪竇の恁麼に道ふことを免れ去らん。當時拍拍相應すること能はずんば、盡大地の人髑髏野に遍き所以ならん。鏡淸恁麼に證しても將ち來り、那の兩箇恁麼に用ひ將ち來る。雪竇後面に頌出して更に顯煥たり。頌に云く。

【字解】一。古人行住坐臥此の道を以て念となす。古人の如何にも修道に熱心なる所である。三界不安喩如火宅と云ふから、暫時の間も等閑に附することは出來ぬ。お互ひに古人のこと、思はず人事と思はず、各自に是非とも參究しなければならぬ。

二。如今の禪和子。ところで現時の禪坊主はどうであらう。參禪者流は何うであらう。何も飯を食ふて糞をヒルのが藝ではない。一言半句の禪語をシャブッたつて夫れが何にならう。それで成佛がなんとして出來やう。

三。保福恁麼に道ふ箇の什麼をか圖る。何も他人のことゝは思ふまいぞ。畢竟人人自己のこと。馬の耳に風で餘處事と聞いてはなりませぬぞ。

四。雪竇點胸を解す。能く穿がたれた。金的を射られたと云ふ。

五。也た妨げず險峻なることを。雪竇の機峰は如何にも嶮峻ではあるけれども。黃檗を眞似られたものか。少しも進歩の跡が見へぬと云ふ圜悟の讃辭である。

六。兩邊に落在す。兩邊は抑揚の兩邊である。

七。僧超州に問ふ。雲門錄室中語要に見へて居る古則であつて。古尊宿の錄趙州章には見えて居らぬやうである。

八。敎中に說かく。華嚴經卷四十七入法界品の取意の文である。妙峰孤頂は唐譯には和合山となつて居る。山は寂然不動の義高出周覽の義であつて。しつかり動かぬ處が寂然不動。高く平地に聳へて人一度頂に登れば眼界豁然として地上の萬象川となく森となく一切悉く見ゆる處が高出周覽の義である。妙と云ふは境界閑寂にして賢聖の居住し玉ふ所。三昧に住し易くして般若の智自然に生じ、智慧明了にして能く煩惱障碍を碎破する處に名けたものである。德雲比丘は十住門中十大知識の第一であつて卽ち此の十住位のの菩薩が方便を以て三昧に入り寂然不動にして無思無心なる處は能く法性平等の理に契當して法身と合體してそこに忽然として妙悳が現前するからそこを表して妙峰山と申したものである。

九。德雲比丘。梵語の迷伽室利と云ふのを譯したので、唐譯には功德雲と翻じてある。比丘は比呼、苾芻とも書いて、怖魔破惡。或は乞士と翻譯をする。爰で比丘と云ふたのは、十信の滿位から十住の中の初住に入りて、初めて內凡の仲間入りをしたから、比丘の字を以て之れを表したものである。德雲は此の比丘には德を具すること雲の如くであるから德雲と名けたのである。雲には、慧遍。澤潤。蔭覆。法雨の四義を具へて居る。此の比丘も亦定福智悲の四德を備へて居るから雲になぞらへて德雲と名げたのである。

一〇。善財。善財童子のことであつて、華嚴經に所謂三童子の一人である。彼れは福城長者の子であつたが發心して南方に文殊以下の五十五の善知識を訪ひ、最後に普賢の十大願を聞きて成佛の志願を滿したと云ふ因緣がある。

一一。 別峰に在りて相見す。　別峰とは是れ何處であらう。別峰が有るかないか。畢竟自己に返照して人人各自の鼻孔を探つて見なければならぬ。

一二。 一念三世一切諸佛。　一念發起の自己心卽ち是れ佛心とさへ見得したならば。三世十方の一切諸佛の智慧光明を都べて見透得して餘す處もないやうになる。

一三。 的々那裏にかある。　德雲と善財サアどこに在るぞ。ソレ云つて見よ。儞が鼻孔裏かの。

一四。 李長者。　字は通玄。自ら棗柏大士と號した。深く華嚴經を崇拜して唐の開元年中に華嚴合論四十卷を著はして華嚴經を弘通し自らは日に棗十顆柏葉餅一枚を食して終日看經ぜられたと云ふことである。開元二十八年三月に壽九十五歲で逝去ぜられた。

一五。 稱性の處に至りて。稱は契稱。性は本鉢本性である。宇宙の本鉢本性卽ち第一義門の處に到つて見れば。得の失の迷の悟のと云ふやうな面倒なことは是れ徒らに閑葛藤。島の足跡鼠の糞にも等しいので畢竟無差別只是れ一念無味の心である。此のとき。立ちつ居つ、臥しつ起きつの上に脫體現成と一一皆眞理一一皆完全であつて實なく主なく機なく境なく只之れ如々の妙不可思議であつて。言語思慮の及ぶ處ではない。サアこうなれば此の自己はこれ佛か人か迷か悟か。山高水長柳綠花紅である。故に外に向つて尋ねたらば、七日逢はざるも是れ道理。三生六十劫さらさら逢へる期會はないのである。

一六。 一線道を放つて。　德雲善財自然本然の處に至りて初めて互に逢ふことであるが。今は假りに一手ゆづつて別峰に相見ずと一着をぬいで見せたものである。

一七。 諸佛出世せず。華嚴經の兜率天宮菩薩雲集讃佛品に金剛憧菩薩か說かれた頌文である。其の文に如來出世せず亦涅槃有ること無し。本大願力を以て自在の法を顯現すと申してある。迷と云ふも方便。悟と云ふも方便。一切皆之れ方便で。止むを得ずして如是の事を現ずるに過ぎないのである。

一八。 更に顯換たり看よ。　明々白々あきらかなことであるから能く看よと雪竇の爲人大悲な處である。

第五節　類則提唱

其一　趙州妙峰頂

僧問趙州如何是妙峯孤頂。下語云。問得可始得。

妙峯孤頂は本分なり。

州云。老僧不答儞這話。下語云。無孔鐵槌當面擲。

本分は言語には述べられぬほどに。不答此話と云ふたは、太だ本分を爲人して云ふたものぞ。

僧云爲什麼不答這話。下語云。實頭人難得。一死更不再活。

鈍なる僧なり。

州云。我若答汝落在平地上。下語云。何不行令。放過一着。

妙峰を答へたらば、平地上に落在せんほどに答へぬと云ふたが。未だ本分を云ふて聞かせたぞ落在平地上と云はんよりも。何故に棒喝を行せぬぞ。本分をも重々に爲人しても打處をば放過したぞ。

其二　別峰相見

德雲比丘。從來不下山。善財去參七日不逢。一日却在別峰相見。及乎見了。却與他說一念三世一切諸佛智慧光明普見法門。德雲既不下山。因什麽却在別峰相見。下語云。得人荊棘從無根長。

本分を能く用ひて人をさゝへて問はれたぞ。先師云く。本分上に句を着けよ。下語して云く。隨處作主。處々全身。是れは善財童子が華嚴の法を聞いて一味平等なる處を本分一枚に用いて、其處を在別峰相見とは云ふたぞ。

若道他下山教中道乃至到這裏教中大有老婆相爲處。

下語なく又辨もなし。

第六節　頌

妙峯孤頂草離離。和身沒却。脚下已深數丈也。拈得分明付與誰。用作什麽。大地沒人知。乾屎橛。堪作何用。拈得鼻孔失却口。

不是孫公辨端的。錯。看箭。着賊。闊髏着地幾人知。更不再活。如麻似粟。闊髏。拈得鼻孔失却口。

【讀方】頌に曰く。妙峰孤頂草離々。身に和して沒却す。脚下已に深きこと數丈なり。拈得分明誰にか付與せん。用いて什麽をか作さん。大地人の知るなし。乾屎橛。何の用を作すに堪へん。鼻孔を拈却して口を失却す。是れ孫公端的を辨ずるに不ずんば錯。箭を看よ。賊を着け了るも也た知らず。闊髏地に着く幾人か知る。更に再活せず。麻の如く粟に似たり。闊髏鼻孔を拈得して口を失却す。

【字解】一。身に和して沒却す。何も妙峰孤頂のみが谷のどん底へ落ちこんだのではない。そう云はれる雪竇其の人も首つたけ草の中へ落ちこまれたのであらう。お面が見えませぬと云ふ。

二。脚下已に深きこと數丈也。皆さん餘處事と見てはなりませぬぞ。お互に泥田の中へ落ちこんで居るのであるから、是非とも早く此の境遇を脱せねばならぬと云ふ。

三。用いて什麽をか作さん。此の圜悟などは、其樣なものをもつたとて、使ひ道が御座りませぬと云ふ。

四。大地人の知るなし。世界中尋ね廻つたとて、其樣な物の使い道を知つたものは御坐るまいよ。

五。乾屎橛。僧雲門に問ふ如何か是れ佛。門云乾屎橛と云ふ因緣がある。乾屎橛は支那人が人糞を日光で乾かして肥料にする時に。それをかきまはす棒のことである。爰では妙峰頂など振廻されては。臭く穢なくて圜悟など鼻持がなりませぬと云ふところである。

六。何の用をか作すに堪えん。折角もらつたけれども仕方がない。

七。鼻孔を拈得して口を失却す。一方を捉へたと思へばはや一方を失ふた有り樣であるから、モト是れ本來やりとりのなきもの。カツかりもらうなよ。手が無くなるであらうと云ふ。

八。錯。其の端的を辨ずると云ふのがハヤ間違ひである。

九。箭を看よ。孫公が辨じたと雪竇云はるゝか。諸人箭先を見屆けて置け。落處作麽生。

一〇。賊を着け了るも也た知らず。孫公が立派に端的を辨じられても。鏡清だの雪竇だの圜悟だのの盜賊が見て居るからカツかりするとしてやられますぞと云ふ。

一一。更に再活せず。　盡大地死にきつたそうな。髑髏計りである。耆婆の妙藥でも効能はあるまい。
一二。麻の如く粟の如し。　雲實の申される通り、如何にも死人ばかりであるから救ひやうがありますまい。
一三。闍梨鼻孔を拈得して口を失却す。　妾や好いけど主には濟まぬ。茶碗一つの新世帶と云ふところと見へる。

【講義】　此一頌は初めの二句は保福が頌したもので。次の二句は保福長慶の二大老を合頌したものである。妙峯孤頂草離々。保福が折角一味平等の體性。大智慧光明の本分を示さうとて、這裡便ち是れ妙峯頂と拈提せられたけれどもアッタラことにはハヤ平地荒草裡に落在して谷のどん底へ落ちこんでしもうた。大智慧光明の本分なるものは元來言葉や筆先きにあらはし得べきものでないからして其れを何になり言葉にあらはし、筆先に上しならば、それが最後で已に〳〵第二義第三義に落ちてしまふ。其處が卽ち草離々と云ふところである。離々と云ふは草の繁り亂れた貌である。拈得分明なれども誰にか付與せん。保福が這裏妙峰頂と拈出されたは元より長慶の立脚地を勘檢するが爲めであるが幸ひに長慶であつたから宜しいけれども、若し長慶でなかつたならどうであらう。眼のあいて無い輩でありて、それを無價の珍寶でも拾ふた樣に恭悅する奴であつたらどうであらう。正宗の銘刀も子供が持てば怪我をする。結構な火藥でも素人が用ゆれば爆發して實に危險なことである。ウッカリすると盡大地の人皆髑髏となつて仕舞はねばならぬが。保福は何んと此の始末を付けるつもりであらう。是れ孫公端的を辨ずるにあらずば髑髏地に着き何人か知らん。若しも長慶が可惜許と抑へて呉れなかつたならば、鏡淸の申される通り、世界中此の妙峰頂で死んでしまふ人ばかり多くなつて、能く其の眞意義を會得しうる底のものは幾らもなかつたであらうにと謠い收めたものである。

第七節　頌評唱和譯

妙峰孤頂草離々。草裏に幅せば什麽の了期かあらん。拈得分明なれども誰にか付與せん。什麽の處か是れ分明のところぞ。これ保福の只這の裏便ち是れ妙峰頂と道ふことを頌するなり。是れ孫公の端的を辨ずるにあらずんば、孫公什麽の道理を見てか便ち云ふ是なることは則ち是なり。可惜許と、只髑髏地に着く幾人か知ると云ふが如くんば、汝等諸人還りて知るや。瞎。

【字解】一。瞎。　皆さん、よそごとゝ聞いてはなりませぬぞ。何も長慶一人に限つたことはない。辨得の分がない以上は眼はあつても盲目も同然。髑髏の眼と少しのかはりもありませんぞと、こゝが圜悟老師の大慈大悲なところである。

第二十四則　鐵磨到溈山

第一節　垂示

垂示云。高高峰頂立魔外莫能知。深深海底行佛眼覷不見。直饒眼似流星機如掣電。未免靈龜曳尾。到這裏合作麽生。試舉看。

【讀方】　垂示に云く。高々たる峰頂に立てば。魔外も能く知ることなし。深々たる海底に行けば佛眼に覷れども見へず。直饒、眼は流星に似、機は掣電の如くなるも、未だ免れず靈龜尾を曳くことを、這裏に到りて合に作麽生。試みに擧す看よ。

【字解】　一。高々たる峯頂。藥山和尚の語に。須らく高々たる峯頂に向つて立ち深々たる海底に行くべしと云ふ言葉があるから。此れはその語を用ゐたものであらう。

二。魔外。　魔は天魔波旬。外は外道であるから、第六天の大魔王。九十六種の外道などをさしたものである。

三。靈龜尾を曳く。　莊子に出づる喩。龜が卵を砂中に生み落して其れを他の動物に取られないために跡を昧まして遠く遊んで居るけれども、其の遠く離れて往く時に、尻尾を曳きずりて往くために。何程遠くへ往つても卵の在り家がよく分ると云ふので、跡をかくしても尚あとかたの殘るのにたとへたものである。

【講義】　高々たる峰頂に立つ（中略）深々たる海底に行く。これは萬有の玄旨、宇宙の本性本體は實に言亡慮絶。不可說不可思議の境界であり て、只に天魔外道の徒が能く知ることが出ないの

みならず。佛陀の五眼を以てしても見ることは出來ぬ。それ故爰に至りては直饒、其眼は流星の如くに鋭どく、其の機轉は掣電の如く迅速でありても、畢竟靈龜尾を曳くの喩にもれず頭かくして尻藏さぬ底のことである。よし高々たる峰頂に譬へ、深々たる海底に喩へたとしても、たとひ不可說不可思議の言を以てしても。既に一念でも心に分別し一言でも口に說話し又一指でも身動作した以上はハヤ第二第三で。既に既に其の痕迹あらはれて居る。藏くせば藏くす程現はれると云ふがこのことである。這裏に到りて合に作麼生。サア斯かる場合に臨んでは結局どうしたものであらう。若し知らずば此の兩老の境界を見よと云ふので試みに擧す看よ。

第二節　本則

擧劉鐵磨到溈山。老婆不守本分。山云。老牸牛汝來也。點。探竿影草。尚什麼處見聲訛。磨云。來日臺山大會齋。和尚還去麼。箭不虛發。大唐打鼓新羅舞。放去太速收來太遲。溈山放身臥。中也。爾向什麼處見溈山。誰知遠煙別有好思量。磨便出去。過也。見機而作。

【讀方】　擧す劉鐵磨溈山に到る。　妨げず湊泊し難し。這の老婆本分を守らず。　山云く。　老牸牛汝來也。　點。探竿影草。　什麼の處に向てか整訛を見ん。　磨云く。　來日臺山に大會齋あり和尚還りて去るや。　箭は虛く發せず。　大唐に鼓を打てば新羅に舞ふ。　放去は太だ速かに收來は太だ遲し。　溈山身を放つて臥す。　中れり。　爾什麼の處に向つてか溈山を見ん。　誰か知らん遠き煙浪に別に好思量あることを。　磨便ち出で去る。　過也。機を見て作す。

【字解】　一。妨げず湊泊し難し。溈山の海岸は孤危峻嶮斷岸絕壁であつて無數の岩石が聳立して暗礁が此處彼處にあるから。容易に寄り附けぬ場所である。

二。這の老婆本分を守らず。　老婆は老婆らしくして居れば好いに。分限知らずの輕るハズミ者である。身の程を忘れたそうな。又。己れの庵の地を棄てゝ他の溈山へ行くなどゝは脚下が落ちつかぬぞ。諸人他行するなよと云ふたものと見る。

三。老牸牛汝來るや。　牸牛は牝牛也と申して子を育てゝ居る牛卽ち女牛のことである。溈山和尚は劉鐵磨の顏を見るやイナや「ヤー老ばれ女牛どのお前來やつたか」と言ふたものである。因みに溈山は平常自分のことを水牯牛と云はれて、還化の後は極樂へも行かず。地獄へも行かず。又人間天上にも還らず。門前の水車屋の牛になると申して居られたと云ふことである。

四。點。　圜悟は迅に合點ぢやが。ナント諸人は合點かのと見まはす。

五。探竿影草。　之れは溈山の賊手段で劉鐵磨の脚下を點檢せられたものである。

六。什麼の處に向つてか整訛を見ん。　中々これは容易に辨別し難い處であるが何んと辨じたものであらう。

七。來日臺山に大會齋あり和尚還つて去るや。　臺山は五臺山であるから潭州の溈山からは支那里程で數千里もある遠方であるから汽車や電車の開けた今日でも明日の間にあはぬ。大會齋は無遮會とも申して、上は佛菩薩より下は人天鬼畜に至る迄も皆平等に供養する法會であるから、佛も菩薩も人間も牛馬も皆一同に出かけて行くべき所である。そこで鐵磨が溈山に向つて「臺山に會齋があるかどうぢや水牯牛どの往かれるかのふ」と老牸牛の老牸牛たる本色をあらはした。溈山は來也と云ひ鐵磨は去麼と云ふ、こゝが水牯牛と老牸牛との應對の面白いところである。

八。箭は虛しく發せず。　之れは鐵磨がムダ箭を射ぬ働き。ハシツと溈山の胸板を射通したところである。

九。大唐に鼓を打てば新羅に舞ふ。　コツチで來たかと囃せばアツチで去るやと踊る。巴里と東京とで合奏すると云ふ按梅

で如何にも面白い曲調である。

一〇。放去は太だ遠かに收來は甚だ遲し。　溈山と鐵磨。水牯牛と老牸牛。兩方とも出際は中々鋭利であつたが。引込際は少々のろくなつたやうである。餘り大風呂敷を擴げては後の始末が附けにくからうと云ふ。

一一。溈山身を放つて臥す。　果然水牯牛の本性を現はしてコロリと寢てしまうた。皆さん是ころり寢た姿は是れ佛の姿であらうか牛の形であらうか。或は又溈山に居るのであらうか。臺山に往つたのであらうか。畢竟實參實究して冷暖自知するより仕方のないところである。

一二。中れり。　さすがは鐵磨である。見事に射あてゝ牯牛を倒したと稱揚する。更に溈山の方にして辯すると。ヤツ溈山も放つたな見事々々。鐵磨の胸板へグツと中りましたと稱揚する。

一三。爾什麼の處に向つてか溈山を見ん。　溈山のコロリと臥したところは是れ何の境界ぞ。諸人高く眼を着けて見よと云ふ。

一四。誰か知らん遠き煙浪に好思量あることを。　何の意味もなしにコロリと寢たと云ふわけでもなからうからコロリと仰向に臥て遠方の煙浪を眺める中に何か好い詩作でも出來るであらう。然し分別思量に沸れば既に是れ凡夫である。今溈山の此の境界。此の中に面白い好思量があるが。誰れ人も知り得まいと云ふ。但し圜悟もあゝ推量では御座いませんかと野次つて見るも宜しからう。

一五。遲なり。　モウ往つて仕舞ふたが行方はどこぞと云ふ。雲煙過雁。落處作麼生。

一六。機を見て爲す。　溈山と云ひ老婆と云ひ。共に千軍萬馬の老將であるから其の間に一點の隙間もないと云ふて易に曰く。幾を知るは其れ神乎と古語を擧揚する。

第三節　本則提唱

劉鐵磨到溈山。下語云。魚行水濁。

自然に句中が備るなり。

山云。老牸牛汝來也。下語云。挽鉤搭索。

老牸牛は母牛なり。トショリ女牛が來りたよと罵りて云ふ也。句中ぞ。先師下語に、探竿影草。

磨云。來日臺山大會齋。和尚還去麼。下語云。拳來踢報。得一人一手。還一人一馬。

會齋は齋に限らず、人の望を叶ゆることを會齋と云ふ也。溈山の劉鐵磨を母牛の樣なるものが來たよと、ヲシコナして云ふたを。磨はコワ者で（恐るべき者での意）來日臺山に大會齋ありと云ふ。溈山と臺山とは隔つること五百里ぞ。其の五百里の處に來日和尚は乞食をしに御出であるかと云ふたは拳來踢報ぞ。人の一牛を得て人の一馬を還へしたものぞ。先師下語に萬里一條鐵。

溈山放身臥。下語云。大湖浸月長橋偃波。

會齋に取り合はず身を放つて臥した處。句中が備はるなり。先師下語に酒逢知己飲。

磨便出去。下語云。千峯向岳百川歸海。曲終人不見。江上數峯青。

收めて出去りた也。先師の下語に、詩向會人吟。步々生清風。

第四節　本則評唱和譯

劉鐵磨は尼也擊石火の如く閃電光に似たり。擬議すれば則ち喪身失命す。禪道若し緊要の處に到らば那裏にか許多の事あらん。他の作家の相見は墻を隔てゝ角を見て便ち是れ牛なることを知り。山を隔てゝ煙を見て便ち是れ火なることを知るが如し。拶着すれば便ち轉ず。溈山道はく。老僧百年の後山下の檀越家に向つて一頭の水牯牛と作りて左脇下に五字を書して云ん。溈山僧某甲と。且らく正當恁麼の時。喚んで溈山僧と作さんか卽ち是か。水牯牛と作さんか卽ち是か。如今の人問着すれば分疎不下を管取せん。劉鐵磨は久參にして機鋒峭峻なり。人號して劉鐵磨となす。溈山を去ること十里にして庵を卓つ。一日去つて溈山を訪ふ。山來るを見て便ち云く。老牸牛汝來るや。磨云く。來日臺山に大會齋あり。和尙還りて去る麼。溈山身を放つて便ち臥す。磨便ち出で去る。儞看よ他ひとへに說話の如くに相似たり。且つ是れ禪にあらず。是れ道にあらず、喚んで無事の會となし得んや。溈山は臺山を去ること數千里を隔つ。鐵磨什麼に因つてか却つて溈山をして去りて齋せしめんとす。且らく道へ意旨如何。這の老婆他の溈山の說話を會す。絲來線去。一放一收。互ひに相酬唱す。兩鏡の相照して影像の觀つべきもの無きが如し。機機相副ひ句々相投ず。如今の人三搭すれども頭を廻へさず。這の老婆一點も也た

他を瞞することを得ず。這裏却つて是れ世諦の情見にあらず。明鏡の臺に當り明珠の掌に在るが如し。胡來れば胡現し、漢來れば漢現ず。是れ他向上の事あることを知る所以に此くの如し。如今只管に無事の會を做す。五祖の演和尙道く。有事を將て無事となすこと莫れ。往々に事は無事より生ずと。儞若し參得透し去らば他の恁麼に尋常の人の說話の如く一般なることを見ん。多く言語に隔碍せらる所以に會せず。唯是れ知音にして方に他底を會せん。只乾峯の衆に示して云ふが如くんば、一を擧して二を擧することを得ず、一着を放過すれば第二に落在す。雲門衆より出で、云く。昨日一僧あり天台より來りて却つて南岳に往き去る。乾峯云く。典座今日普請することを得ざれと。看よ他の兩人、放つときは則ち雙んで放ち。收むるときは則ち雙んで收む。溈仰下に之れを境致と謂ふ。風塵草動するにも悉く端倪を究む。亦之れを隔身の句と謂ふ。意通じて語隔たる。這裏に到りて須らく是れ左撥右轉の方に是れ作家なるべし。

【字解】一。劉鐵磨。　俗姓劉氏の婦人で出家して比丘尼となり、潭州溈山の附近に小庵を結んで居つた。常に溈山の靈祐禪師に參して、大悟徹底したのみならず。餘程峻嶮な機鋒を具へた老婆であつた。名前も何とか云ふたであらふけれども、誰も其名を呼ぶものがなく綽名を附けそれで通用して居つた。鐵磨は乃ち磨齒快利なるを云ふと申して如何なるものでも粉微塵に碎いてしまふと云ふ頗る銳利な鐵の磨のことである。

して何人も當るべからざる處に名けたのである。

二。擊石火の如く閃電光に似たり。　老尼の俊澄怜悧にして少しも隙間のないことを申したもの。磨は石磑で石臼を申したもの。此の老尼の口牙俊利快便に

三。 拶着すれば便ち動じ捺着すれば乃ち轉ず。拶着は一寸一言相手になると云ふこと。捺着は一寸ツイて見ると云ふ程のことで。チョツと押せばピンとはねると云ふ按梅である。

四。 潙山。　潭州潙山の靈祐禪師は逢麻九世の法孫で百丈大智禪師の嫡子である。唐の大中七年正月九日入寂。壽八十四。大圓禪師と謚せられた。

五。 無事の會となし得んや。　何事でもないとするのか。ソウではない。

六。 潙山臺山を去ること自から數千里を隔つ。　潙山の大潙寺は湖南路潭州寧鄉の西百五十里（支那里數）の處にありて、唐の元和年に司馬頭陀が開いたものである。五臺山は山西省代州五臺縣の東北にありて、東西南北中の五峰が梅花の如く並び峙つて居るから五臺山と名けたのである。古來文殊出現の靈地として最も尊敬せられて大顯通寺、大寶塔院寺。大圓照寺等幾多の大伽藍がある。

七。 絲來線去。圈から絲を繰り出すやうに自由無碍なる貌である。

八。 如今の人三搭すれども頭をかへさず。　搭は擊なりでウツこと。機變のない不怜悧な鈍漢のことで。古語に人有り手を以て其の背上を撫すること三下に至ると雖も尙ほ首をかへして之れを視ずと云ふことがあるが。正にそれ底の人である。

九。 五祖演和尙。　五祖法演禪師と申して白雲守端の法を嗣いだ人である。

一〇。 乾峯云く。　越州乾峯和尙の上堂の文である。

一一。 典座今日普請することを得ざれ。　典座は叢林に於いて大衆の齋粥を掌どる職名であるけれども往古は雜務を兼ねたものである。そこで今は、這のやうな立派な漢を得たから普請をすることは止めにして休んだがよからうと云ふのである。之れは往古は普請の節に大悟徹底の僧があれば普請を止めて休むと云ふ例があつたからのことである。

一二。 潙仰下に之れを境致と云ふ。潙仰下は五家七宗と云ふ七宗の中の潙仰宗で、開祖は潙山靈祐禪師である。門下に仰山の懸寂と云ふ人があつた。そこで潙仰宗と云ふ。古語に潙山尋常想生相生等の三種の生を以て境致となし人を勘破すると云ことがある。今はそれを申したものである。

一三。 風塵草動するにも悉く端倪を極む。　大活現前底のものは風が塵埃を飛ばし草木を動搖する底のこと迄も只では見逃さぬ必ず端倪と申して其のハシホトリをきはめ。奥のどんそこ迄も見拔いてしまはねば承知をしないのである。

第五節　類則提唱

其一　水牯牛

潙山云。老僧百年後。向山下檀越家作一頭牯牛左脇下書五字云。潙山僧某甲。且正當恁麼時喚作潙山僧則是。喚作水牯牛即是。下語云。披毛從此得。作佛也由他。

披毛從此得は色相。由他と云ふは本分也。草海人畜ありとあらゆるものは、皆本分より出生したものよ。さる程に水牯牛となるも本分。又釋迦達磨知識長老となるも本分より出生したぞ。潙山とならふか。水牯牛とならふかと一つに落しつけずして云ふた處が本分よ。色相から本分を見明きらめる處を作佛也た他に由ると云ふたぞ。先師の下語に萬里一條鐵。拶して云く。這の垂示をば甚の爲めに下したるぞ辨せよ。答ふ。百年の後も今日の上も同一致と用ゆれども、人の斷見を破せんがために、如是の垂示を下されたぞ。死してより後は只無の見に落つる故に其れを破

せんとて多少死して後も有るやうに、潙山僧とならふか水牯牛とならふかと示されたものぞ。

【請益】　句に云く只管由レ之と。此二字本分なり。萬里一條鐵。鑊湯無冷處と本分を能く受用し得たらば、生死は自由三昧なり。披毛戴角を受けやうとも、或は善知識とならふとも又貴人高家に生れやうとも、全く自由三昧なり、又本分の上へは、何時なりとも入死すること貴賤を擇ばざるなり。本分を用ひ得ざる故に、生死自由の處に至たらず。空見斷見に落在して出生入死の自由を得ざるなり。故に生死自由の理を知らしめ、空見斷見のものを救ふべきためなり。萬里一條鐵。鑊湯無二冷處一と用ひ切りたれば、以前も本分今日も本分なり。出生入死は何たるものに再來して衆生を濟渡し信施覆そうとも只管之れによる也。此公案深意の遠。自悟自得せずんば生死再來自由の處を得べからず。佛祖も再來自由は此の古則の受用なり云云之れ先師慇懃の仰せことなり。

其二　趙州水牯牛

【錄外】　趙州問二南泉一知有底人向二什麼處一去。下語云。問得可二始得一。

泉云。山下檀越家作二一頭水牯牛一去。下語云。大火聚裡弄二毛塵一。

三句備る也。山下檀越家と云ふを色相に用ひ。水牯牛の見ざる處を本分に用ひ、落居何の道理もない處を現成に用ひて三句の體調備る也。

州云。謝二師答話一。下語云。會二問頭一會二話頭一。

問答を勘辨して謝二答話一と云ふ也。

泉云。昨夜三更月到レ窓。下語云。當頭霜夜月任運落二前溪一。

昨夜三更月到レ窓とは、三句の落居甚の道理もない處を云へり。又云く、月白風清。昨夜三更月窓に到るは是れ自然の道理。任運に前溪に落ちた方ぞ。此の公案は潙山水牯牛の話を用ひて辨ずべし。

其三　乾峰擧一

乾峰示レ衆云、擧レ一不レ得レ擧レ二。放二過一着一落二在第二一。下語云。大火聚裡弄二毛塵一。似二截レ釘斬レ鐵。

擧一と云ふは本分の無二無三な處を云ふた方もあり、又不レ得レ擧レ二と云ふ處を爲人にも用ひたり。又放過するとも落在することも無いのを有る樣に云ふたは賊なり。

似二截レ釘斬レ鐵。放二過一着一と云ふを截斷の方に用ふれども、切斷ではないぞ。似と云ふ字專一なり。

雲門出レ家云。昨日有二一僧一從二天台一來却往二南岳一去。下語云。知音知後更誰

知。

之れは雲門の例の手段で、句中をば心得濟まして、然も其の句中には取りあはずに知音して云ふたものぞ。此話は老牯牛の類則にあらず。來日臺山に太會齋ありと云ふと。天臺より來りて南岳に往き去ると云ふと似たる處のあるを引いた迄也。

乾峰云。與座今日不レ得ニ普請。下語云。養子方知ニ父慈。

雲門の好く答へられた處を褒めて、今日は普請を止めて休まれよと云ふたもの。唐にては普請の時悟徹の僧があれば其日の普請を休むぞ。然し普請の場にても參禪を許すぞ。之れ普請をして學者の志を見、又見地を見る爲めぞ。

第六節　頌

曾騎ニ鐵馬ニ入ニ重城ニ慣戰作家。塞外。將軍。七事隨身。勅下傳聞六國ノ清狗銜敕書。寰中天子。爭奈海晏河清。猶握ニ金鞭ニ問ニ歸客ニ人扶。相招同往又同來。夜深誰共御街行君向瀟湘我向秦。且道行作什麼。

【讀方】頌に曰く。曾つて鐵馬に騎つて重城に入る。戰に慣れたる作家。塞外は將軍。七事身に隨ふ。勅下りて傳へ聞く六國の清きことを。狗敕書を銜む。寰中は天子。爭奈せん海晏河清。猶金鞭を握つて歸客に問ふ。之れ什麼の消息ぞ。一條の杖杖兩人扶る。相招き相往き又同く來る。夜深くして誰と共にか御街に往かん。君は瀟湘に向ひ我は秦に向ふ。且らく道へ行て什麼をか作さん。

【字解】一。戰に慣れたる作家。大膽にも濁山の敵將の中へ切り込んだる尼將軍はアッパレ作家の宗將である。

二。塞外は將軍。節刀を賜はりて要塞以外に敵を攻むることは是の如き老將軍の責任である。

三。七事身に隨ふ。弓矢刀鉞甲冑戈の七つ道具を帶んだる具合は。アッパレの武者振である。定めて辨慶も逃げ出すことであらう。又。七事は暴を禁じ、兵を戢め、大を保ち、功を定め、民を安んじ、家を和し、財を豐にするの七事と見て。アッパレの大將軍であるが。責任に申々重いことぞと云ふ意味合にとるも宜し。

四。狗敕書を銜む。　方語に諸侯道を避く。或ひは狗最も賤しけれども書最も貴しと云ふと同じことである。此れには故事があつて、昔大金國から狗を献じたことがある。其の狗は身長六尺ものは言はぬけれども心は人にも勝つて居ると云ふので時の天子から、其の狗に敕書を賜つた。それで其の狗が其敕書を口に銜んで國中を遊んであるくと云ふと立派な諸侯たちも其の敕書に觸れんことを恐れて狗の爲めに道を避けたと云ふ故事が後漢書に見へて居る。そこで今は狗も敕書を銜み來たらば諸侯も道を避けたと云ふことであるが。それと同じく如何に頑强な鐵磨でも濁山の一語に遇ふては鋒先きを避けるより外はあるまいと云ふのである。

五。寰中は天子。　寰内の能く治まるのは全く允文允武皇帝陛下の御威德の然らしむるところである。

六。爭奈せん海晏河清。四海浪をさまりて吹く風も枝をならさぬてふ太平の御代であるからイカナ鐵磨でも手持不沙汰なことであらう。それにつけても天下泰平皇帝陛下聖壽無彊なるを悅ばればならぬと云ふ。

七。是れ什麼の消息ぞ。偖職地の消息は如何と云ふに君の御稜威によりて至極上首尾であるとはイカニも同慶至極なことである。

八。一條の杖杖に兩人扶る。敵も味方も陛下の赤子であり鐵磨も濁山も一樣に佛祖の嫡子であつて。同得同證の智音底であるが然し今は只治に居て亂を忘れぬための大演習である。

九。相招き相往き亦同く來る。どこ迄も同行二人。お前百まで妾や九十九迄と契る。

一〇。君は瀟湘に向ひ我は秦に向ふ。鄭谷が友人に別るゝの詩に、楊子江頭楊柳の春。楊花愁殺す渡頭の人。一聲羌笛離亭の外。君は瀟湘に向ひ我は秦に向ふと云ふがある。獨が身を放つて臥すかと思へば獨は便ち出で去ると云ふ樣に思ひ思ひの遊び草。之れも泰平の餘澤である。

一一。且らく道へ行て什麼をか作さん。　治まる御代の目出度さに何と皆さん月下逍遙とも出掛けましようかと云ふ。

【講義】　曾つて鐵馬に騎つて重城に入る。鐵馬とは金鐵に身堅めして今にも敵前にかけ出さんとする底の軍馬のことで。尼將軍劉鐵磨が何さま一高名せんとて、潙山城廓に騎り込んだ有樣は實にアッパレの武者振り、三軍を率ゆる老將軍の面影がある。重城は金城鐵壁と塹壕やら墻壁やらで幾重にもとりかためた用心堅固なる城廓のすがたで。今は之れを威德嚴冷一點の隙間もない潙山の室内にたくらべたものである。勅下りて傳へ聞く六國の清きことを。せつかく一番鎗の功名をと鐵馬に跨がり佩劍をかざして敵の本營に騎り込んだけれども。君王の詔勅を拜して見れば ハヤ六國は清らかに治まり、風もならさぬ太平の御代になつて。君萬歳の千秋樂を壽き奉るやうになつたと劉鐵磨が大ひに潙山老人を勸破してやらうと思ふて威風堂々と騎り込んだ甲斐もなく、老牸牛汝來るやと安らかに一拶せられた景況を謠ふ。猶ほ金鞭を握つて歸客に問ふ。然れども鐵磨もサルモノ千軍萬馬生死の巷に出入した老將であるからよし全く太平に治まつて居つても何時一戰があるかも知れぬで。切角の軍支度をと云ふので、臺山に大會齋ありと一戰挑んで見たが。夜深くして誰れと共に御街に行かん。時しも夜半のことゝて、城中はヒッソリとして誰一人騒ぎ立てる者とてはなく、紫臣佩伴の往き來もなく鎭まりかへつて居るから卽ち鐵磨は爰に無功の功を奏して意氣揚々と凱旋してしまうた。こゝが佛祖の伴侶を絶ち、萬人の窺知を許さゞるところの鐵磨潙山の老作略であつて其の間に何んとも云へぬ妙味があるのである。此の一頌では第一句の曾。第三句の猶の二字が字眼であるから能く心を止めて味ふて見るが宜しい。

第七節　頌評唱和譯

雪竇の頌、諸方以て極則と爲す。一百頌の中、這の一頌最も理路を具す。中に就いて極妙貼體分明に頌出す。曾つて鐵馬に騎りて重城に入るとは、劉鐵磨が恁麼に來ることを頌す。勅下りて傳へ聞く六國の清とは、潙山恁麼に問ふことを頌す。猶ほ金鞭を握つて歸客に問ふとは、磨の來日臺山に大會齋あり、和尚還つて去るやと云ふを頌す。夜深ふして誰と共にか御街に行んとは、潙山身を放つて便ち臥し磨便ち出て去ると云ふを頌す。雪竇這般の才調ありて急切の處をば急切の處に向つて頌し。緩急の處をば緩急の處に向つて頌す。風穴亦曾つて拈す。雪竇の意に同じ。此の頌諸方皆之れを美む。高々たる峯頂に立つて魔外も能く知ること莫し。深々たる海底に行つて佛眼に覷れども見えず。看よ他の一箇は身を放つて臥し、一箇は便ち出で去る。若更に周遮せ

ば、一時に路を求るとも見ず。雪竇の頌意最も好し。是れ曾つて鐵馬に騎つて重城に入る。若し是れ同得同證にあらずんば焉ぞ能く恁麼ならん。且らく道へ箇の什麼の意をか得たる。見ずや僧風穴に問ふ。溈山道く、老牸牛來るやと意旨如何。穴云く。白雲深き處金龍躍る。僧云く。只劉鐵磨の來日臺山に大會齋あり、和尚還りて去るやと道ふが如くんば意旨如何。穴云く。碧波心裏に玉兎驚く。僧云く。溈山便ち臥す勢を作す意旨如何。穴云く。老倒疎慵無事の日、閑眠高臥して青山に對すと。此意亦雪竇と同じ。

【字解】一。貼體。巧妙に仕立て上げた衣裳のやうに。身にツックリと合ふて美事なることである。

二。這般の才調。才は文才。調は風調であるから雪竇老人に翰林の才のあることを嘆美したものである。

三。急切の處には急切の處に向つて頌し。緩々の處には緩々の處に向つて頌す。雪竇の頌作の巧妙なることを申したもので。雪竇は戰のたけなはなる處には自づと其の筆致を用ひ緩き處は自然に筆を緩めると如何にも筆致の自由自在なことを嘆稱したものである。

四。風穴。汝州風穴延沼禪師は南院慧顒禪師の嫡子であつて、臨濟下三世の法孫である。

五。若し更に周遮せば。迂曲に廻はりノ〳〵つて遠く求め去らば。

六。白雲深き處金龍躍る。之れは金龍の深處を守らずして無心に出入することを申したものである。金龍は卽ち太陽のことで太陽が雲につゝまれ雲を拂ひて無我無心で少しも私のないことを申したものである。

七。碧波心裏に玉兎驚く。青々とした波の中に月がふら〳〵と波のまにまに搖りつ搖られつする貌であつて。これが機位を守らずして轉々自在なるありさまである。

八。老倒疎慵無事の日閑眠高臥して青山に對す。昔は千軍萬馬生死の巷に出入して、スハ高名せずんばと勇み勇んで馳つたこともあるが、今は老ひぼれて何も角も懶いから。只山青水綠野鶴閑雲を友に日を過す許りである。

第八節　類則提唱（其二）

其四　風穴老牸牛

僧問二風穴一。溈山云。老牸牛汝來也意旨如何。穴云。白雲深處金龍躍。

下語云。錦包二特石一。蜜裡裹二砒礪一。

溈山の平々に老牸牛來るやと云はれた處を、風穴和尚が白雲深き處金龍躍ると、平々な中に句中の有る處を金龍と云ふたぞ。金龍は日のことぞ。下語の心は、句中の怖ろしい方ぞ。蜜は甘いものなれども其の中に砒礪を含みたるぞ。

僧云。只如劉鐵磨ノ道ニ來日臺山大會齋。和尚還去麼一意旨如何。穴云。碧波心裏玉兎驚。下語云。雨賽一彩。初心不レ改。

こゝも前と同じ。大會齋あり云云と云ふた語の平々な處を碧波と云ふ。句中を指して玉兎驚と云ふたぞ。又劉鐵磨の機鋒を賞美して云ふたものぞ。

僧云。溈山便爲二臥勢一意旨如何。穴云。老倒疎慵無事ノ日。閑眠高臥對二

青山下語云。千峰向岳百川歸海。

潙山の臥した心も收めた方也。風穴の老倒云云と云ふたも收めた方ぞ、大燈（大德寺開山宗峰妙超禪師）云く。老倒云云の句に休歇の處あり諸人會すや。僧有り云く、休歇の處某甲會す。燈云く。如何なるか是れ休歇處。僧云く。老倒疎慵無事の日、閑眠高臥對青山。燈呵々として大笑す。之れ先師の因んで仰せられたことなり。

第二十五則　蓮華峰拄杖

第一節　垂示

垂示云。機不離位墮在毒海。語不驚群陷於流俗。忽若擊石火裏別緇素。閃電光中辨殺活。可以座斷十方。壁立千仞。還知有恁麼時節麼。試舉看。

【語方】機位を離れざれは毒海に墮在す。語群を驚かさゝれば流俗に陷る。忽ち若し擊石火裏に緇素を別ち、閃電光中に殺活を辨せば、以て十方を座斷して壁立千仞なるべし。還つて恁麼の時節あることを知や。試みに擧す看よ。

【字解】一。機。位。語。機は發動の由る所と註して、緣に觸れて發動する可能性卽ち心の中にチラリと感じたことを未だ口には出さない所で機と名けられる。それが既に嬉しいとか悲しいとかと言葉に出れば之れを語といふのである。位と云ふのは其の立ち場のことを云ふのである。

【講義】機位を離れざれば毒海に墮在す。洞宗に所謂三種の滲漏の第一見滲漏に當るので。機は心の中にチラリと感じたことが未言語に現れない所で、機と名けられるので、例へば佛法の大意とか祖師西來意とか云ふ公案が與へられた時。工夫修練の功顯はれ來りて一朝豁然として省悟する所があつて、獨りでニッコリと笑む場合があつたとしても（卽ち機）。此處が（卽ち位）卽ち佛法の大

意であるの、祖師西來意であるのと其の悟りに滯ほり執着して離れない樣なことであつたならば、決して自由のきくものではない。活潑々地の働きの出來るものではないに依つて、毒海に墮在すと丁度毒海中に落ち込んだ樣のものであつて到底助かる見込はないと云ふのである。敎家に七地沈空の難と申すがこのことであらう。偖。其の機が一度言語文字に顯はれたからには、必ず非凡拔群の氣象が具はらねばならぬ。一種特別の威嚴がほの見えねばならぬ。假使其の文字言句は尋常一樣世間通途のものでありたとしても、何かそこに云ふに云はれぬ氣品が具はつて居らねばならぬ、如何に大言壯語をはいても。如何程妙文佳句を並べたてゝも、其處に一點に威嚴がなく、其處に一分の氣品もなかつたならば是れ凡庸俗流の駄文に過ぎないので何等の價値もあつたものでないのである。垂示に語群を驚かさゞれば流俗に陷ると申されたのがこのこゝろである。忽ち若し擊石火裏に緇素を別ち、閃電光中に殺活を辨ぜば。これは機鋒の峻峭にして寸分の隙間もない有樣である。石と石とを擊ち合はせて、ピカリと火の飛ぶ其の一刹那に、暗黑裡中で能く物の黑白を見定め、又稻妻のピカピカッと閃く其の瞬間に殺すか活かすかの大問題を決着する位の俊發怜悧な機轉がありてこそ、驚天動地底の作略があると申されるのである。斯くてこそ初めて、十方を座斷して堅立千仞なるべし。孤危峻嶮で宇宙萬象を超越して、千佛萬祖にも窺知せしめず。天魔外道も寄り附けさせぬと申すことが出來るのである。還つて恁麼の時節あるを知るや吾々お互ひに何時かは必ず是くの如き時節に到らねばならぬことである。試みに擧す看よ。サテ次の公案を看よと例の通り公案を持ち出された。

第二節　本則

擧。蓮花峯庵主拈二拄杖一示レ衆云。看。頂門上具一隻眼。也是時人窠窟。古人到二這裏一。爲二什麼一不二肯住一。不可向虛空裏釘橛。權立化城。衆無語。千箇萬箇。如麻似粟。却較自代云。爲二他途路一不ロ得レ力。若向途中辨猶爭半月程。設使得力堪作什麼。豈可全無一箇。復云。畢竟如何。千人萬人只遣裡向全無一箇兩箇會。又自代云。柳樑橫擔不レ顧レ人。直入二千峯萬峯一去也。好與三十棒。凡爲他擔板。腦後見腮。莫與往來。

【讀方】　擧す。蓮花峯庵主拄杖を拈して衆に示して云く。看よ。頂門上に一隻眼を具す。也た是れ時人の窠窟。古人這裏に到つて什麼としてか肯て住せざる。虛空裡に向つて釘橛すべからず。權りに化城を立つ。衆無語千箇萬箇麻の如く粟に似たり。却つて些子に較れり。可惜許。一棚の俊鶻。自ら代つて云く。他の途路に力を得ざるが爲なり。若し途中に向つて辨ぜば猶ほ半月程を爭はん。設使ひ力を得るも什麼をか作すに堪へん。豈に全く一箇無かるべけんや。復云く。畢竟如何。千人萬人只遣裡に向つて坐却す。千人萬人中一箇兩箇は會せん。又自ら代つて云く。柳樑橫に擔ふて人を顧みず。直に千峯萬峯に入り去る。也た好し三十棒を與ふるに。只他の擔板なるが爲めなり。腦後に腮を見るは與に往來すること莫れ。

【字解】一。看よ。　庵主がキツト拈起した拄杖を見そこなはぬ樣にせよといふのである。

二。頂門上に一隻眼を具す。　此の庵主は實に眼力の高い人であると稱揚して、諸人庵主の頂門に眼があるから能く看せてもらうがよいと云ふ。

三。也た是れ時人の窠窟。これが多くの人の窠窟となつて、一度首を突込だが最後。中々脱出しうることが出來ぬと人の誤解して邪路に迷ふて居るのを愁んだものである。

四。　虛空裏に向つて釘橛すべからず。　今更庵主がそんな問題を提出されても。虛空に釘を打つやうなもので、何の答へもある筈がないと云ふ。

五。檻りに化城を立つ。　庵主が勿體らしく拄杖だの這裏だの言はれるけれど。未だ本拠所でない假りの休み場（半途の化城）に過ぎないと抑へる。化城と云ふは法華經に出て居ることで未だ本統に成佛せぬうちに暫時成佛の候補者になつた地位と云ふのである。

六。千箇萬箇麻の如く粟に似たり。　幾人居ても皆草木同樣であつて丁度伏見人形の陳列したやうなものである。

七。却つて些子に較れり。　大衆がクツトモスツトモ云はぬ處に却つて價値がある。と冷かしたものである。

八。可惜許。

九。一棚の俊鶻。　此の（八）（九）の二語を一つに見て、何れも俊發の隼鷹ではあるが。惜しいことには棚頭に在つて動くことが出來ないと云ふ。

一〇。若し途中に向つて辨ぜば猶ほ半月程を爭はん。若し庵主の言葉に附き廻つて居たならば。歸家穩坐は中々のことでまた半月餘りもかゝるほど道が隔つて居るであらう。

一一。設使力を得るも什麼を作すにか堪へん。　たとひ拄杖の助けを借りても途中に居ては何の所詮もないことである。

一二。豈に全く一箇無かるべけんや。　庵主は皆が不會と思ふて自ら代られたが。他人は兎も角。闖悟が此處に居るぞと云ふ。

一三。千人萬人只這裡に向つて坐却す。　畢竟如何と押し詰められては、誰も彼も腰を折らぬものはない。

一四。千人萬人中一箇兩箇は會せん。　然し千人萬人の中には一人や二人は會する底が有らうと云ふて先づ第一は闖悟といふ。

一五。棚樑横に擔ふて人を顧みず。直ちに千峯萬峯に入り去る。　棚樑は天臺山に產する材木の名で拄杖を作るに適當であると云ふことであるからそこで直ちにそれを拄杖の換へ名に用ひたものである。此の庵主何を思はれたものか。折角今迄拈したところの拄杖を横に引擔いで餘處目も振らずにスート山奥深く行方も知れずはいつてしまはれたと云ふので拄杖を拈起して一心に其の道理を研究しつゝあるかと思ふうちに、ハヤ横に引擔いで千峯萬峯に入り去つた處で、庵主が這裡に住せざる樣子が分明であると申したもので卽ち之れが垂示に謂ゆる機は位を離れて譯は群を驚がすとある味いである。

一六。也た好し三十棒を與ふるに。サスガは庵主であるから、その御褒美には三十棒でも與へるがよからうと云ふ。

一七。只他の擔板なるが爲めなり。　庵主が擔板漢であるから人をも顧ずに山奥へ入り去つたのである。實に不都合な老婆であるから決して容赦することは出來ぬと愈々庵主を鑽仰する。

一八。腦後に腮を見るは與に往來すること莫れ。　此の庵主はいかにも惡人の相をもつて居るから必ず路連れにはなるまいぞ。ウツかりと其のやうな人と道連れになつてあるくと如何なる災難を受けるかも知れませぬぞと注意する。これは俗話に人の背後から腮の見えるやうに突き出て居る人は惡人の相であると云ふことがあるから。それで腦後に腮を見ると申したものである。

第三節　本則提唱

蓮華峯庵主拈二拄杖一示レ衆云。古人到二這裡一爲二什麼一不二肯住一。下語云。拄杖子有二兩頭一。

權實の方ぞ。拄杖を本分と用ひて衆に示された方もあり、拄杖を擧揚して諸人を釣て見た方もあるぞ。之れ拄杖子に兩頭の有る處。先師の下語に、突出難レ辨。之れ一圓に本分に用いたもの。

衆無語。下語云。如レ麻似レ粟。

大衆あれども契はざる處を如レ麻似レ粟と云ふぞ。先師は飲レ氣呑レ聲。又。可レ痛可レ悲と着けられたぞ。

自代云。爲二他途路一不レ得レ力。下語云。魚行水濁。

他の途路とは本分なり。大衆の本分を心得ざるほどに擬議したぞ。此の本分をば得難しと云ふたれども。底には句中備へたる程に魚行水濁と下語したことぞ。先師下語に、無限輪鎚擊不レ開。

復云。畢竟如何。下語云。垂手不レ少。

又自代云。榔槾横擔不レ顧レ人直入二千峰萬峰一去。下語云。千峯勢向二岳邊一止萬派聲向二海上一消。

榔槾は拄杖ぞ。何も句中を收めて云ふたぞ。同じ收句の中でも此下は句中を收めた方に用ふるなり。勢と云ふ字萬派の聲と云ふ處を句中の怖しい方に用ふるぞ。此古則に限らず句中に收めた方には同心なり。先師の下語に。綠水磵中流不レ住。白雲片々嶺頭飛脚頭脚尾通二霄路一。先師云く。收めて千峰萬峰に入り去るとは云ふたれども權實あり辨じ來れ。辨じて云く。諸人が句中を知り得ぬ程に拄杖を擔で去るところ實なり。又如何と見たる方がある程に權なり。

第四節　本則評唱和譯

諸人還つて蓮華峰庵主を裁辨得すや。脚跟也た地に點せざることあり。國初の時、天台の蓮華峰に在つて庵を卓つ。古人既に得道の後、茅茨石室の中にして、折脚鐺兒の内に野菜根を煮て喫して日を過ごし、且つ名利を求めず、放曠として緣に隨ふ。一轉語を垂れて、且らく佛祖の恩を報じ佛心印を傳へんことを要す。纔に僧の來るを見れば便ち拄杖を拈して云く。古人這裡に到りて什麼としてか肯て住せざると。前後二十餘年、終に一人も答へ得るものなし。只這の一問、也た權あり實あり、照あり用有り、若し也た他の圈纉を知らば一揑を消せず。儞且らく道へ、什麼に因てか二十年此の如く問ふ。既に是れ宗師の所爲。何が故ぞ只一橛を守る。若し箇裏に向つて見得せば、自然に懶塵上に向つて走らず。凡そ二十年中多少の人有つてか他のために平展下語して見解を呈し伎倆を做し盡す。設ひ箇の道ひ得る有るも也た他の極則の處に到らず。況んや此事は言句の中にありと雖も、言句にあざられば卽ち辨ずること能はず。道ふこと見ずや、道本言無。

し、言に因つて道を顯すと。所以に人を驗する端的の處、口を下せば便ち知音、古人一言半句を垂るゝこと亦他なし。只儞が有ることを知るか有ることを知らざるかを見んと要す。他人の會せざるを見る。所以に自ら代て云く、他の途路に力を得ざるが爲めなりと。看よ他の道ひ得て自然に理に契ひ機に契ふことを。幾くか曾つて宗旨を失却せん。古人云く。言を承けては須らく宗を會すべし。自ら規矩を立つること勿れと。如今の人只管に撞將し去つて便了す。得たることは則ち得たり、爭奈せん顢頇儱侗なることを、若し作家の面前に到つて、三要の語を將て空に印し泥に印し水に印して他を驗せば、便ち見ん方木圓孔に逗つて下落の處無きことを。這裡に到りて一箇の同得同證を討ぬるに、時に臨んで什麼の處に向つてか求めん。若し是れ有ることを知る底の人ならば、懷を開いて箇の消息を通ぜんに何の不可かあらん。若し人に遇はざれば且らく卷いて之れを懷にせん。且らく儞諸人に問ふ。拄杖子は是れ衲僧尋常用ふる底なり。却つて道ふ途路に力を得ずと。古人此に到つて肯て住らず、其の實は金屑貴しと雖も眼に落ちては翳となる。石室の善道和尚、當時沙汰に遭ふ、常に拄杖を以て衆に示して云く。過去の諸佛も也た恁麼。未來の諸佛も也た恁麼。現前の諸佛も也た恁麼と。雪峯一日僧堂前に拄杖を拈して衆に示して云く。這箇只中下根の人の爲めにすと。時に僧あり出で、問ふて云く。忽ち上上の人の來るに遇ん時如何。峰拄杖を拈して便ち去る。雲門云く、我は卽ち雪峰の打破して狼藉なるに似ずと。僧の問未審和尚如何。雲門便ち打す。大凡そ參問は也に許多の事なし。儞外に山河大地有ることを見、內に見聞覺知あることを見、上に諸佛の求むべきことを見、下衆生の度すべき有るを見んが爲めなり。直に須らく一時に吐却して然して後十二時中、行住坐臥打成一片なるべし。一毛頭上にありと雖も寬きこと大千沙界の若く、鑊湯爐炭の中に居ると雖も安樂國土に在るが如く、七珍八寶の中に居ると雖も、茅茨蓬蒿の下にあるが如し。這般の事若し是れ通方の作者ならば、古人の實處に到つて自然に力を費やさず。他人の他底を構得すること無きを見て、復自ら微して云く、畢竟如何と。又奈何ともすることを得ず。自ら云く、柳樑橫に擔ひで人を顧みずして直に千峰萬峰に入り去る。這箇の意又作麼生。且らく道へ什麼の處を指してか地頭と爲さん。妨げず句中に眼あり、言外に意有つて自ら起き自ら倒れ、自ら放ち自ら收むることを。豈見ずや嚴陽尊者、路に一僧に逢ふ。拄杖を拈起して云く、是れ什麼ぞと。僧云く、不識。嚴云く。一條の拄杖も也た識らずと。嚴復拄杖を以て地上に劃すること一下して云く、還つて識るや。僧云く不識。嚴云く土窟子も也た識らずと。嚴復拄杖を以て擔で云く、會すや。僧云く不會。嚴云く、柳樑橫に擔つて人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去ると。古人這裡に到つて什麼としてか、肯へて住せざる。雪竇に頌あり云く。誰か。機に當る。擧するに賺らず。亦還つて希なり。峭峻を擢殘し。玄微を銷鑠し。重關重ねて巨に闢く。作者未だ歸を同じくせず。玉兎乍ち圓に乍ち缺く。金烏飛ぶに

似て飛ばず。盧毛は知らず何の處にか去る。白雲流水共に依依と。什麼に因てか山僧は道ふ。腦後に腮を見ばともに往來すること莫れと。纔に計較を作さば便ち是れ黑山鬼窟裏に活計を作さん。若し見得徹し信得及せば千人萬人自然に羅籠すとも住まらず。奈何ともすることを得ず。動着拶着自然に殺あり活あり。雪竇他の意に直に千峰萬峰に入り去ると會して、方に始めて頌を成す、落處を知んと要せば雪竇の頌を看取せよ。云く。

【字解】一。蓮華峯庵主。　蓮華峯は天台山であるとも云ひ或は盧山であるとも云ふが鳳潭の鐵壁雲片には、天台の桐柏山上に九峯あり其の中に蓮華峯と云ふ一峯があると申してある。其峰に祥庵主と云ふ人が住んで居られた。此仁は雲門大師の法を嗣いだ金陵の奉先道深禪師の嫡子で、青原下八世の法孫である。此の人は參禪の客を見れば直ちに拄杖を拈して古人遺裡に到つて。什麼としてか肯て住せざると云ふて拶着する外には他に一言も申されなかつたと云ふことで。これが二十年一日の如くであつたと傳へられて居る。これは、丁度俱胝和尚が一生涯常に參禪の客に對して一指頭を立てゝ示されたと言ふと同じ接し方である。處が祥庵主が二十年一日の如く多くの客に接しられたけれども遂ひに庵主の機に契ふた者はなかつたと云ふことである。偖爰に拄杖と云ふは前にも申した通り禪宗の師家たる人が常に手に携へて居るところの杖であるが。今は其の杖が直ちに宇宙萬象の本體。一切衆生の本性本心を代表して居るものである。云ひ換ゆれば此の一條の拄杖子が、如來であり、法性であり眞如であり、菩提であり涅槃であり、本來の面目であり一切諸佛の淨土である。拈すると云ふは、目の前に高く突き出して古人遺裡に到りて什麼としてか肯へて住せざる。遺裡は卽ち拄杖のことで謂ゆる菩提とも如來とも涅槃とも淨土とも、大悟とも見性とも名くべきものである。三世の諸佛も歷代の祖師も此の見性大悟の立ち場。菩提涅槃の地位には決して止息安住はして居ないので、之れを大悟却迷とも回光返照とも退歩却來とも還相回向とも名けることであるが。今は卽ち其の地に止住せずに必ず本の地位へ逆戻りするのは何故ぞと問ひ出したものである。

二。脚跟也た地に點せざることあり。　之れ圜悟が未だ充分に許されないところを申したもので脚下が地につかずに未だ浮き足であるぞと誡められたものである。

三。國初の時。　趙宋の太祖が始めて國を立てた時をさしたものである。

四。折脚鐺兒。　足あるを鐺と曰ふと申して、三足の溫酒器のことであるが。爰では釜や鍋の類をさしたものである。

五。古人既に得道の後。　三衣一鉢樹下石上と云ふのが佛祖の家風である。

六。若し也た他の圈續を知らば一揑を消せず。　圈續は絲や紐を卷く機のことであるから、若し吾々にして一生受用不盡底の一物を手に入れたならば恰も圈から絲を繰り出すやうに自由無碍で思ひのまゝに受用することが出來ると云ふのである。

七。只一槪を守る。　槪は一段の木也と申して棒チギレのことである。已に受用不受底の一物さへ手に入れたならば何も拄杖や棒片ばかりを守つて居らなくとも好いと云ふのである。

八。他のために平展下語して。　樣々に人のために文を講じ義をつけることであるが、果して眞意を得て居るであらうか大に疑ひなきを得ぬのであるが。誰か極妙を究めたものがあるかな。

九。只儞が有ること知るか有ることを知らざるかを見んを要す。　此れ何のあることを知り、此れ何のあることを知らざるぞと揑て見よ。之れ人人日用光中失却せず、飲食起居相離れざるの境界である。

一〇。古人云く。古人は石頭の希遷大師で。青原行思禪師の嫡子である。唐の貞元六年庚午十二月廿五日に壽九十二で以て示寂せられた。此の語は大師の著はされた有名な參同契に出て居る言葉である。

一一。只管に撞將し去つて。人の云ふことを早合點して其の儘似すましに得道したと稱するけれども是れ木偶にして冠せるもので、其の愚や實にあはれむべきである。

一二。三要の語を將つて。　三要の語は卽ち宗門の三印であつて（人天眼目雜錄に出づ）。一印は空に印し。一印は水に印し一印は泥

に印す。と云ふがこれである。之れは衆生の上中下の三根の機に應じて三印と分かつたものであるけれども實は一印の大道であつて二もなく三もないのである。空に印すれば全く沒縱跡。跡もなく手掛りも無い。水に印すれば少しくは手掛りあるに似たるも畢竟亦是れ水上の紋樣。泥に印すれば文彩が稍や顯はれる。是れを三根に配當して見るのである。是のことは人人日用先中に印することであるけれども、吾々は常々情塵意想のために晦まかされて、三要を具しながら然も三根の在ることを知らないけれども明眼の禪僧が若しも三要印開いて檢せられることになると忽ちにして勘破せられて赤裸々のまゝがわかることになるのである。

一三。且らく卷いて之れを懷にせん。　論語衞靈公篇に出て居る語で、其の文に君子なるかな遽伯玉。邦に道あれば則ち仕へ。邦に道なければ則ち卷いて之れを懷にすべしとある。これは有ることを知る底の人であるならば、關悟も帶をほどいて云つて聞かせやうが。所詮今時は無いからと云ふのである。

一四。金屑貴しと雖も眼に落ちては翳となる。　臨濟と王常侍との問答の時、王常侍の申した語である。幾程結構な金銀でも眼中に落ちこめば邪魔になる。如何に拄杖子がありがたくとも、その拄杖子に執りついてしまへば、それがハヤ毒海になつてしまふ。垂示に謂ゆる機位を離れざれば毒海に墮在と云ふのがこのことである。

一五。石室の善道和尙。　潭州石室善道和尙は長髭曠禪師の法を嗣いだ人で。唐の武宗の會昌の法難に遇ふた時は行者となりて石室に住して居られたと云ふことである。

一六。忽ち上上人に遇はんとき云云。　中下根の人の爲めには兎も角、上上根の人の爲拄杖は役に立たぬことか。峯拄杖を拈して便ち去る。役に立つか立たぬか。之れ作麼生。知る人ぞ知る。見得底の人は知らうぞ。

一七。雲門云く。　雪峯は是くの如く狼狽されたが。吾れは亦そうではないぞと弄する。

一八。地頭。　群庵主の落處落居の地を云ふのである。

一九。嚴陽尊者。　洪州武寧縣新興の嚴陽尊者は諱を善信と申した人で法を趙州の從諗禪師に嗣いだ人である。

二〇。土窟子も也た不識。　土を掘つたりヒネクツタリすることをさへも知らないかと云ふのである。

二一。雪竇に頌あり云く。　此頌は一發七終の格と申して、初めの誰かと云ふが第一句であつて、それから句毎に一字を增して結句は白雲流水共依依たりと七字に終つて居る。一頌の大意は、先づ誰かと呼びかけて、誰人か大悟徹底し得た人であるか。何人にせよ若し此の大悟徹底し得た人ならば。我が佛道の大道を擧揚するにあたりて、千言萬言決して錯ることはない答であるが。こう云ふ人は中々に得られるものではない。若しも一度此の境界に達し得た人であるならば、如何に孤危嶮峻で容易により附き難き處でも悉く打ち開いて平々坦々と何んにでも、寄り附くことが出來るやうにして然もそこになづみ滯るると云ふことはない。又銷鑠玄微と申して幽玄微妙なキリ〳〵一ばいの處でもよくトカシトロカシ合せて尋常一樣の處迄引きさげて來て誰にでもよく解るやうにせられるけれども然もそれに執着してヘバリ附くと云ふこともなく融通無碍の妙用を呈せられることである。之れが卽ち作者至人の用處と申して無作の大用と申すがこれであつて彼の天上の月が乍ちにして圓く乍ちにして缺くるが如く。又太陽が飛ぶに似て而も飛びもせず、止まるに似て而も止らざるが如きもので兎角一偏に依ることなく執着することのないのが至人不器の境界と申すものである。サテ吾れ雪竇も果して此の如き人はどこに居られるかは知らないけれども定めし流水にも從ふて任運自在に優遊自適して居らるゝことであらう。

二二。見得徹し信得及せば。　大活現成と申して大悟徹底して信力が極處に及べばと云ふことである。

第五節　類則提唱

其一　善導和尙

石室、善道和尙。當時遇沙汰。以挂杖示衆云。過去諸佛也恁麼。未來諸佛也恁麼。現在諸佛也恁麼。下語云。大火聚裡弄毛麼。

此古則には三句備つたぞ。拄杖を追つ取つて本分と用ひて本分の三世に渉りた處を示した方もあり。又拄杖が三世諸佛で有ふずる道理もなきに無いことを有る樣に云ふたは賊なり。又過現未と云ふは色相の上の沙汰よ。三句備はれば萬境界ある處を知らしめよう爲めぞ。

其二　雪峯中下根

雪峯一日僧堂前拈拄杖示衆云。這箇只爲中下根人。下語云。秤尺在手。

上根下根に要なし。諸人をはかり試みたぞ。拄杖を指して秤尺と云ふたぞ。

時有僧出問云。忽遇上人時如何。下語云。一鈎便上。

句中を心得ずしてウツカリ釣り針にかゝつたぞ。

峰拈拄杖便去。下語云。放過一着。

一棒打する處を打たざる程に放過一着ぞ。又云。泥裡有棘。雪峯此僧を好く勘解し濟いて、兎角云はずして出て去つたは怖しいぞ。

雲門云。我卽不如雪峯打破狼藉。下語云。知音更在青山外。

雲門こそ僧を打たれた程に打破狼藉なし。雪峯の拈拄杖去は打たと同じことよ。此れは雪峯の句中に知音して云ふたもの、語は相違して意は知音なり。

僧問未審和尚如何。下語云。隨語轉。隨機徵。

雪峯の句中に雲門の知音して云はれた句をば得知らずして、字面に就いて問ふたは鈍な僧也。

雲門便打。下語云。棒頭有眼。

好き打ち處なり。

其三　嚴陽尊者

嚴陽尊者路逢一僧。拈拄杖云。是什麼。下語云。秤尺在手。

僧云。不識。下語云。實頭人難得。隨語轉。

眞實の不識なり。

嚴云。一條拄杖也不識。下語云。要知痛痒。

拄杖をだに得知らぬか。一圓の奴ちやと云ふて、痛か痒いかを知らしめやうとしたぞ。

嚴復以拄杖地上箭一下云。還識麼。下語云。撥草瞻風。打水魚頭痛。打草驚蛇。

地上に箭したに要處なし。句中を知らしめようとてぞ。

僧云。不レ識。下語云。一死不二再活一。

嚴云。土窟子也不レ識。下語云。痛處下二針錐一。

土窟子はカナヅチの類ぞ。拄杖を土窟子に用ひて云ふぞ。土窟子をだに知らぬ鈍な奴ぢやと痛めて知らしめやうとしたぞ。

嚴復以二拄杖一擔云會麼。下語云。憐レ兒不レ覺レ醜。

直罰呵嘖すれども、心得ざる程に、爰では又いかにも柔和に會すやと落草爲人したぞ。

僧云。不レ會。下語云。鼠口終無二象牙一。

嚴云。柳樑橫擔不レ顧レ人直入二千峰萬峰一去。下語云。千峯勢向二岳邊一止萬波聲歸二海上一消。

色々に爲人すれども心得ぬほどに、拄杖を擔いで山中へ引込ましやうと云ふて收めたぞ。古抄に云く。箭すは拄杖をつきたてたるを云ふ。土窟子は拄杖をたてたる穴なり。又は土を堀るフグセ也。拄杖を云ふぞ。柳樑は柳樑木にて作りたる拄杖なり。

第六節　頌

眼裏塵沙耳裏土。懞懂三百擔。鶴々突々什麼限。更有恁麼漢。千峰萬峰不二肯住一。你向什麼處去。且道是什麼消息。落花流水太茫茫。好箇消息。閃電之機徒勞伺思。左顧千生右顧萬劫。剔二起眉毛一。何處去。脚跟下更贈一對眼。元來只在這裏。還截庵主脚跟麼。雖然如是也須是到這田地始得。打云爲什麼只在這裏。

【講方】眼裏の塵沙耳裏の土。懞懂三百擔。鶴々突々什麼の限りか有らん。更に恁麼の漢あり。千峰萬峰肯て住せず。你什麼の處に向てか去る。且らく道へ是れ什麼の消息ぞ。落花流水太だ茫々。好箇の消息。閃電の機徒らに伺思を勞す。左顧すれば千生右顧すれば萬劫。眉毛を剔起すれば何の處にか去る。脚跟下更に一對の眼を贈らん。元來只這裏に在り。還つて庵主の脚跟を截り得たりや。然も是の如くなりと雖ひ須らく是れ這の田地に到つて始めて得べし。打して云く什麼としてか只這裏に在りや。

【字解】一。懞懂三百擔。懞懂は無知の貌とも愚昧の貌とも申して善惡邪正も是非曲直も全く分らぬ姿である。それを三百擔も背負ひ込んで誠に重いことであらうと凡聖迷悟を驚過した本分の境界を大智は愚なるか如しと讃嘆したものである。

二。鶴々突々什麼の限りか有らん。鶴突は渾濁又は濁亂の義或ひは汚穢の貌で。庵主の眼裏は塵沙耳裡は泥土に充ちて居る有樣を何んとまあムサイともキタナイとも云つて見樣のない庵主ぞと云ふたものである。之れが卽ち抑下の托上で裡面から庵主の清淨高潔なる境界を讃嘆したもの。

三。更に恁麼の漢あり。更にと云ふが字眼で庵主の樣な無心の道人は今時には誠に珍らしいが又雪竇のやうな人もあると云ふのである。

四。你什麼の處に向つてか去る。何處へ往つたのであるぞと庵主に當つて。諸人此の去處を見てか。若し見得せば人人の去來も知れやうと會下に響かしたものである。

五。且らく道へ是れ什麼の消息ぞ。　此れは何んとしたオトヅレであらう皆さん能く聞いて置かれよと云ふ。

六。好箇の消息。　雪竇。落花流水と云はれるか。いかにも能く言はれた定めし觀音大士の靈告であらうと稱揚する。諸人氣を附けやれ。

七。閃電の機徒らに皆思を勞す。　兎や角云ふ中にハヤ時期を失ふから必ず間一髪を容ざる端的な見なければなりませぬと云ふ。

八。左顧すれば千生、右顧すれば萬劫。　四の五の分別せば萬劫にも埒は明くまい。

九。脚跟下更に一對の眼を贈らん。　贈の字は一本に增とあるが今の方が面白い。何の處にか去ると云つたとて、何も千里の外へ飛び去つたと云ふわけでもあるまい。眉毛を剔起するから見えないのであるから脚下の眼で見るが宜しい。若し其の眼が無られば一對お贈り申さうと云ふ。

一〇。元來只這裏に在り。何處へも行かぬこゝにあるから側見をせずに見るが宜しい。

一一。還つて庵主の脚跟を截り得たりや。　兎や角云ふのも面倒であるから、一層のこと庵主の脚跟を截り棄てゝしまへばよからう。さうすれば庵主はどこへも往かなくて宜しからうと云ふ。評して云く達磨面壁九年して屁糞るを難も猶西天に歸り片岡に來る。

一二。然も是の此くなりと雖も須らく是れ這の田地に到つて始めて得べし。諸人丸呑みにしてはなりませぬぞ。蛇の道は蛇と云ふから。必ず實參實究して其の境界に至られねばならぬ。

一三。打して云く什麼としてか只這裡に在りや。　前に這裡に在りと云ふて置たが。何故に這裡にあるのかと重々の警誡である。

【講義】　眼裏は塵沙耳裏は土。目汁鼻汁を垂れ流し終に洗面せず灌水せず、ムサイともキタナイとも云つて見樣のない此の庵主。愚なるが如く無智なるが如く、百不能のシミツタレの如くであるけれども然しながら是れが卽ち眞の絕學无爲の閑道人であつて、其身は蓮華峰上に居しながらも然も自由自在に十方沙界に周遊して、或る時は佛身を現じ或る時は比丘比丘尼の身を現し或は童男童女の身を現して度生說法をせられると庵主の境界が見聞覺知を超絕して幽玄とも微妙とも云ふて見樣のない淸凉高潔なさまを讃嘆したものである。千峰萬峰背て住せず。拄杖を橫に引攜いで馬所目を振らずスーッと山奧へ去つたと云ふから、偖ては山奧に幽居かと思へば其處にも亦背て住せず。到底行衞が知らぬ。落花流水はなはだ茫々。然らば落花紛々の處かと見やればさうでもなく。流水の邊かと思へばさうでもない。落花流水。春雨秋風。處定めぬ一笠一杖の身の偖も面白やな。時に殘月となり斷雨となり。時に紅葉と散り松風と吹く。これが卽ち不住の姿であつて、觀世音の普門示現と云ふがこのことである。茫々は其の涯際なきさまを申したものである。眉毛を剔起すれば何の處にか去る。眉毛を剔起するとは目を見張る姿で。今時にも久遠にもスツパリ落處の知れぬ庵主の電光石火の機を眉毛をつり上げ眼を見張つて見んとすれば、ハヤ千里萬里の隔りとなつて、何處へ往つたか全く去る處を知らず沒縱跡であると飽く迄も庵主の不住の有り樣を嘆美したのである。

第七節　頌評唱和譯

雪竇頌し得て甚だ好し。轉身の處有つて一隅を守らず便ち道ふ眼裏の塵沙耳裏の土と。此の一句蓮華峰庵主を頌す。衲僧家這裡に到つて。上に攀仰なく下已躬を絶す。一切時中に於ひて痴の如く兀に似たり。見ずや南泉道く、學道の人痴鈍の如くなるもの也た得難しと。禪月の詩に云く、常に憶ふ南泉の好言語、斯の如く痴鈍なるもの還つて希なりと。法燈云く、誰人が此意を知る。我をして南泉を憶しむと。南泉又道く、七百の高僧盡く是れ佛法を會する底の人なり。唯盧行者のみありて佛法を會せず、只道を會す所以に他の衣鉢を得たりと。且らく道へ佛法と道と相去ること多少ぞ。雪竇拈して云く、眼裏に沙を着ること得べからず、耳裏に水を着ること得べからず。或は若し箇の漢有つて信得及し把得住して人の瞞を受けざらんには、祖佛の言敎是れ什麼の熱碗鳴聲ぞ。便ち請ふ、高く鉢囊を掛け拄杖を拗折して一員無事の道人なることを管取せよ。又云く、眼裏に須彌山を着得し、耳裏に大海水を着得す、一般の漢あつて人の商量を受く。祖佛の言敎龍の水を得るが如く虎の山に靠るに似たり。却つて須らく鉢囊を挑起し横に拄杖を擔ふべし。亦是れ一員無事の道人なり。復云く、恁麼も也た得ず、不恁麼も也た得ず。然後沒交涉。一人を選んで師と爲んことを要す。正に是れ這般の生鐵鑄就する底の漢ならば、何に故ぞ或は惡境界に遇ふ。他の面前に到りて、悉く皆夢の如くに相似たり。六根有ること知らず、亦旦暮有ることを知らず。直饒這般の田地に到るも、切に忌む寒灰死火を守つて黑漫漫の處に打入し去ることを。也た須らく是れ轉身の一路あつて始めて得べし。見ずや古人道く、寒巖異草の青を守ることなれ、白雲に坐却するも宗妙ならずと。所以に蓮華峰庵主道く、他の途路に力得をざるが爲めなりと。直に須らく是れ千峰萬峰に去つて始めて得べし。且らく道へ什麼を喚でか千峰萬峰と爲す。雪竇只他の椰樑橫に擔て人を顧みず、直ちに千峰萬峰に入り去ると道ふことを愛す。所以に頌出す且らく道へ什麼の處に向てか去る。還つて去處を知得するもの有りや。落花流水太だ茫々、落花紛々、流水茫々、閃電の機眼前是れ什麼ぞ。眉毛を剔起して何の處にか去る。雪竇什麼としてかも也た他の落處を知らず。只山僧が適ま來つて拂子を擧するが如んば、且らく道へ卽今什麼の處にかある。儞諸人若し見得せば、蓮華峰庵主と同參、其れ或は未だ然らずんば、三條椽下七尺單前に試みに去つて參詳して看よ。

【字解】一。痴の如く兀に似たり。　兀兀は不動の貌と申して。一見愚痴蒙昧なるが如く遲鈍なるが如きを云ふたものであつて、卽ちボンヤリと又ウツカリとした貌である。

二。南泉道く、　南泉普願禪師のことである。南泉鍾に箇の痴鈍の人を覓るに不可得なり。全く無しとは道はず、中に於て選つて少なしと申してある。

三。禪月の詩に云く。　禪月の號は蜀の王衍より賜る處で。字は德隱名は貫休と申した人である。和安寺圓眞禪師の法を嗣いだ人である。水墨の技に長じて殊に羅漢の妙手であつた。梁の乾化二年に壽八十一で示寂せられた。此詩は其の詩集に出て居る山居二十首の中の千岩萬谿路傾欹と云ふ詩の末後の二句である。

四。法燈云く。　金陵清涼の泰欽法燈禪師は法眼文益の法を嗣いだ人で青原下九世の法孫である。開寶七年の六月に示寂せられた。

五。唯虚行者ありて。　虚行者は六祖慧能大師のことで大師は虚と云ふ姓の生れてあつたから虚氏の行者と云ふたものである。南泉の語に且らく五祖黄梅弘忍大師下の五百人のうち只虚行者一人のみ佛法を會せず文字を識らず只道を會すと云ふがあり。又池州の崔使君五祖大師に問ふて云く。徒衆五百何を以てか能大師獨り衣を受け信を傳へ、餘人什麼としてか得ざる。五祖云く。四百九十九人は盡く佛法を會す唯能大師のみありて是れ過量の人也所以に衣信を傳ふと云ふ因緣がある。

六。什麼の熱碗鳴聲して。　土瓶や鍋で湯がブク〳〵となることでたわいもないこと、無意味なことぢやと云ふ程の意味である。

七。一員無事の道人。一員は一人と云ふ義。道人は得道得悟の人の義、

八。眼裏に須彌山を　着得し耳裏に大海水を　着得す。之れは六根互具互融して自在無碍なるありさまを申したものである。

九。什麼も也た得ず。順境逆境。把住放行共に不得のさまを申したものである。

一〇。生鐵鑄就す。　生鐵を鑄て種々の器具を製する場合には生鐵と器具とが不離不合不一不異であるがその如く道人の境界は物に依離せぬから全く無執着である。

一一。切に忌む寒灰死火を守つて黑漫々の處に打入し去ることを。　機位を離れずして毒海に墮在する底のことで。たとひ出生入死自在底の田地に到り得るも苦し其の位に執着したならば寒灰死火を守るも同じことで、少しも自在がきかないから迷ひの境界と更に異るところはないのである。

一二。古人道く。　鄂州大陽山の警言禪師は棗山緣觀禪師の法嗣であつて青原下の九世洞山下五世の法孫である。寒巖異草の青を守ること莫れと云ふはよし向上の正位に到着し得ても、それに執着し滯つたならば之れ寒巖異草の青を守つたもので。電光石火の機とは申せぬと云ふのである。

一三。三條椽下七尺單前。　禪堂のことである。

第二十六則　百丈大雄峰

第一節　本則

舉僧問百丈。如何是奇特事。言中有響。句裏呈機。驚殺人。有眼不曾見。丈云。獨坐大雄峰。凜凜威風四百州。坐者立者二俱敗缺。僧禮拜。作家宗師。何故來。言不豐。令不虛行。僧禮拜。怜悧衲僧。也有恁麼人。要見恁麼事。丈便打。

【讀方】　舉す、僧百丈に問ふ。如何なるか是れ奇特の事。言中に響有り。句裏に機を呈す。人を驚殺す。眼あれども曾て見ず。丈云く獨坐大雄峰。凜々たる威風四百州。坐者立者二俱に敗缺。僧禮拜す。怜悧の衲僧。也た恁麼の事ありて恁麼の事を見んと要ず。丈便ち打つ。作家の宗師何故に來言豐かならず。令は虛りに行せず。

【字解】　一。奇特の事。　元來佛法に奇特とか不奇特とか申すことがあるであらうかどうであらう又衲僧門下に果して奇特の事とか不奇特の事とか云ふことがあるであらうかどうであらう。一體その奇特の事と云ふは抑もどんなことであらう。

二。言中に響あり。　此僧何うやら一物ありそうであるから百丈の鼻でも撮りて捏あげるかも知れないと云ふ。

三。句裏に機を呈す。　雲門は句裡藏鋒と申して居られる。イカサマ全くの門外漢では無さそうであると云ふ。

四。人を驚殺す。其の問ひぶりがイカにも勇ましいから、恐らくは佛祖門下の勇士であらう。

五。眼有れども曾つて見ず。　此僧明盲目と見へて脚跟下の事が見へぬらしい搜りて見るとよいと云ふ。

六。獨坐大雄峯。　大雄峯は百丈山のことである、百丈山は大智禪師が主人公であるから、獨坐大雄峯。爰はおれの獨り天下であると申されたのであるから、此れが阿彌陀佛ならば獨坐極樂世界と云はれ。釋迦如來ならば獨坐靈鷲山と言はれるこ

とであらうと思ふ。然しこれが果して奇特のことであらうか。又こは何の奇特もないことであらうか。爰は是非とも究究して見ずばなるまい。

七。凛々たる威風四百州。　三千界に君臨し玉ふ御威光は實に凛々しいものであるがこれは抑も百丈禪師の鼻孔から吹き出したものであらうと云ふ。

八。坐者立者一俱に敗缺。　立つて問ふものも坐して答ふるものも已に問答に涉つては敗缺である。

九。怜悧の衲僧。　悧口なことぢや。甘く斬り込まれたと云ふ。

一〇。也た恁麼の人ありて恁麼の事を見んと要す。　横綱と横綱との取り組みのやうである。この僧ほどのものがあればそ、眞に百丈らしい機鋒をも見ることが出來るぞと云ふ。

一一。作家の宗師何故に來言豐かならず。　ソコ打たいでは打つ處があるまい。好い打ち處である。然しチト喰しくはないかと云ふ。

一二。令は虛りに行ぜず。　此の如き法王の命令は無意味に行はれるものではない。

第二節　本則提唱

僧問二百丈一如何是奇特一事。下語曰。句裡呈レ機劈面來。

奇特不奇特は色相の上の事なり、天より降つたる馬の靴は奇特ではあれども役に立たぬ。根本の上には何の奇特があらふぞ。一やう有りそうに問ふたは句中ぞ。先師の下語に有レ人來捋二虎鬚一。句裡呈レ機。

丈云、獨坐大雄峰。下語云。深辨來風。鑑在機前。

根本に到りては奇特と云ふことなし。百丈の大雄峰に獨坐して居るこそ奇特の事よと句中を勘辨して云へり。先師は提不レ起。萬里絕二同路一。

僧禮拜。下語云。陷虎之機。

此僧コヲ者で殊勝に候とて禮拜したぞ。先師下語に入レ水見二長人一。

丈便打。下語云。頭正尾正。正令當行。蹶二虎頭一收二虎尾一。

向上の眼から善く見かけて打つて收めたところ。先師下語に利劍斬レ人。

第三節　本則評唱和譯

機に臨んで眼を具して危亡を顧みず、所以に道ふ虎穴に入らずんば爭か虎子を得んと。百丈尋常虎の翅を挿むが如くに相似たり。這僧也た死生を避けず敢へて虎鬚を捋でゝ便ち問ふ。如何なるか是れ奇特の事と。這の僧也た眼を具す。百丈便ち他のために擔荷して云く、獨坐大雄峰と。其の僧便ち禮拜す、衲僧家須らく未問已前を意を別ちて始めて得べし。這の僧の禮拜尋常と同じからず、也た須らく是れ具眼にして始めて得べし。平生の心膽をして人に向つて傾けしむることなれ、相識は還つて不相識の如し。只這の僧問ふ如何なるが是れ奇特の事と。百丈云く、獨坐大

雄峰。僧禮拜す。丈便ち打つ。看よ他の放去する時は則ち一時に俱に是、收來するときは則ち蹤を掃ひ跡を滅す。且らく道へ他便ち禮拜する意旨如何、若し是れ好なりと道はゞ、甚に因つてか百丈便ち他を打して什麼か作さん。若し是れ不好なりと道はゞ、他禮拜して什麼の不得の處かあらん。這裏に到りて須らく是れ休咎を識り緇素を別ち千峰頂上に立向して始めて得べし。這の僧便ち禮拜す。虎鬚を捋るに似て相似たり。只轉身の處を爭ふ。賴ひに百丈の頂門に眼有り肘後に符有りて四天下を照破し深く來風を辨ずるに値ふ。所以に便ち打す。若し是れ別人ならば、他を奈何ともすることなし。這の僧機を以て機に投じ意を以て意を遣る。他所以に禮拜す。南泉の云ふが如くんば普賢文殊。昨夜三更佛見法見を起す。各三十棒を與へて三鐵圍山に貶向し去るゝと。時に趙州衆を出でゝ云く。和尚の棒誰をしてか喫せしめん。泉云く、王老師什麼の過か有る。州禮拜す。宗師家等閑に他受用の處を見ずんば、纔に當機拈弄の處に到つて自然に活潑潑地なり。五祖先師常に說く、馬前の相撲の如くに相似たり。儞但常に見聞の聲色をして一時に坐斷せしめて把得定し作得主せば、始めて他の百丈を見んと。且らく道へ放過する時作麼生。雪竇の頌出するを看取せよ。

【字解】一。虎穴に入らずんば爭か虎子を得ん。　此句は師學に掛けて見るが宜しい。何にも苦勞をせれば本物にならぬ。一番鎗の功名は命を的にした上でなければ得られないのである。皆さん無價の摩尼寶珠を得たかつたらば是非とも、龍穴に入るの苦勞をなめねばなりませぬぞ。

二。未問以前の意を別ちて始めて得べし。口前のアヲ丈けでは役に立たぬから是非とも言外に會する處があらねばならぬ、五藏六腑を取り出して一々點檢しなければならぬ。

三。平生の心膽をして人に向けて、傾けしむること莫れ。相互に知音底の者であつて見れば何も多端に說くには及ばず。一句一言身振り手眞似の上で千言萬語にも勝る深意をくみとることが出來る。之れが親子知音の味ひである。

四。相識は却つて不相識の如し。親子師學の上には何も多言はいらぬ。顏見た計りで充分である。疎ひ樣に見ゆる心が卽ち眞の相識である。

五。若し是れ好なりと道はゞ。一本に若し是と云はゞ百丈又他を打して什麼にかせん。若し不是と道はゞ他禮拜して其の不得の處があらんとなつて居る。此の方が宜しからうと思ふ。

六。百丈の頂門に眼あり肘後に符あり。　符は驗なり證なりで物を仔細に調べて見ることである。百丈には千手千眼の働きがあるから自由自在に物を勘破することが出來ると云ふのである。

七。機を機に投じ云々。　自己の機を以て百丈の機に投じ、自己の意を以て百丈の意に投ずると云ふのであるから畢竟機機相投することである。

八。南泉の云ふが如くんば。南泉和尚の上堂の語である。文殊普賢昨夜三更に相打し人ごとに二十棒を與へて院を逐出し去らしむ。趙州云く、和尚の棒誰をしてか喫せしめん。師曰く、且らく道へ王老師の過甚處の處にか在る。州禮拜して出づと云ふ因緣である。王老師は南泉の自稱で南泉は鄭州新鄭の人。姓は王氏と申したから王老師と言ふのである。

九。馬前の相撲。　擬議すれば則ち失すと云ふことで問に髮を入れぬ端的のところを申したのである。又地に倒るれば便ち了すと云ふ語に見れば打してしまへば萬事休すと云ふ意味である。

第四節　類則提唱

其一　文殊普覽

南泉云。文殊普賢昨夜三更起二佛見法見一、各與二二十棒一貶二向二鐵圍山一去也。下語云。似二截レ釘斬レ鉄。彷彿把二定要津一。

二十棒を與へて二鐵圍山の闇き處へ去らしめんと云ふたは、截斷のやうなれども句中が面ぞ、さてこそ似と彷彿の字を用ひたぞ。

時二趙州出衆一云、和尚棒教レ誰喫。下語云。要レ捋二虎鬚一。

泉云、老師有二什麼一過。下語云。何不レ行レ令。

言句に涉ふより何せに打たぬぞ。王老師は南泉のことぞ。

州便禮拜。下語云。略虎之機。

殊勝に候と云ふて陷て禮拜した也。

第五節　頌

祖域交馳天馬駒　五百年一間生。千人萬人中有一箇半箇。子承父業。化門舒卷不レ同レ途　已在言前。渠儂得自由。還他作家手段。電光石火存二機變一。劈面來也。左轉右轉。還堪レ笑人來埒二虎鬚一。好與三十棒。重賞之下必有勇夫。不免喪身失命。放過闍梨一着。

【讀方】　祖域交馳す天馬駒。五百年に一たび間生。千人萬人の中に一箇半箇有り。子は父の業を承く。化門の舒卷途を同じうせず。已に言前に在り。渠儂自由を得たり。他の作家の手段に還す。電光石火機變を存す。劈面來也。左轉右轉。還つて百丈爲人の處を見るや也た無や。笑ふに堪へたり人來りて虎鬚を埒づることを。好し三十棒を與ふるに。重賞の下には必ず勇夫有り。免れず喪身失命。闍梨に一着を放過す。

【字解】　一。五百年に一たび間生。　孟子に堯舜より湯に至つて五百有餘歲。聖人と云はれる程の人は五百年に一人しか出ないものぞと申してあるが今此の百丈も實に其の聖人の資格のある人である。

二。千人萬人中に一箇半箇あり。　然しながら千人萬人の中には大德の宗匠が一人位は有りそうなものぢやがと闍悟老人が坐下を見廻はされたところである。

三。子は父の業を承ぐ。　サスガは馬大師の秘藏息子丈けあつて實に天馬駒の概があると云ふ。

四。已に言前に在り。　それは雪竇が申される迄もなく疾に存じて居りますと云ふ。

五。渠儂自由を得たり。　渠儂は他也と申してカレと訓ずる文字である。舒べやうと思へば舒べ卷かふと思へば卷くと實に思ひの儘の接化振りである。

六。他の作家の手段に還す。　還は任なりでマカセルと云ふ程の意味であるから此の教化の仕方は實に自由自在であつて百丈ならでは出來ぬことであるからマア彼れ一人の獨占であると稱揚する。

七。劈面來也。　間に髮を容れずヒシヤリと打つた機變の見事さ。實に敬服の至りである。此語は會心のときに思はずフ

ッと出るので云はゞ拍手喝采とでも云ふところである。

八。左轉右轉。　自由無碍の有り樣は球の盤中に走るが如くである。

九。還つて百丈爲人の處を見るや也た無や。　只表面の作用計り見た分では役に立たぬから百丈の心はそも〳〵如何と參究して見なければならぬ。

一〇。好し三十棒を與ふるに。此僧中々の傑物であるから三十棒の御褒美を與れてやらうと云ふ。

一一。重賞の下には必ず勇夫あり。これは黃石公の語で、芳餌の下には必ず懸魚あり。重賞の下には必ず死夫ありと云ふ文句である。コヤ三十棒を與へてやれば必ず勇猛な學人が出るであらうと云ふ。

一二。免れず喪身失命。　誠に危險いことである。虎が一口に咬み殺すであらうと百丈の惡辣の手段を托上したもの。

一三。闍梨に一着を放過す。　此僧はまだ虎には騎れないやうであるからモカ一憤發せねばならぬと云ひ。又諸人好い手を打つて見やれ。一手許してやるからと云ふ風にも取れる。

【講義】　祖域交馳す天馬駒。六祖の遺誡に、向後一馬駒を出して、天下の人を踏殺し去ること有らんと云ふ語があるが。丁度道一禪師は、其の讖に當ると云ふので、時人が馬祖と呼んだと申すことである。其の馬祖の法を嗣いだ百丈であるからそこで天馬駒と云ふたもの。天馬と云ふは千里の駒で、前漢の武帝の時に、始めて大宛國から五色の母馬が來て、其の子に出來たのが天馬子であると云ふことである。馬二歳なるを駒と云ふから駒は二歳の馬のことである。今百丈禪師が大機大用を一時に行して、佛祖位中、七竪八横と十方世界を縱横無盡に駈け廻る勢ひは實に凄ひ位で恰も天馬の空を駈け廻るが如くである。化門の舒卷途を同じうせず、百丈の學人接化の有り樣は把住放行、舒べつ卷きつ、自由自在思ふが儘の働きであり、他の宗師方とは同じ途轍を踐んで居られぬ。こゝが天馬駒の天馬駒たる處である。電光石火機變を存す、彼の一僧の百丈の言下にスカサズ禮拜したところはいかさま自由を得た活漢には相違ないけれども、百丈が其の間に一髮を容れずにピシャリと打たれた機變の見事さは實に閃電光の如く擊石火の如くであつて誠に心地のよい作略であると飽く迄百丈を讃美したものである。笑ふに堪へたり人の來りて虎髮を捋づることを。然るに一僧ありて此の機鋒峻嶮な百丈の處へ、會釋もなく出かけて行つて、如何なるか是れ奇特の事と問端を起し、又獨坐大雄峯と云ふ百丈の一言下にスカサズ禮拜してのけた處は、譬へばたけりくるつた猛虎の鬚を捋づるがやうなもので其の冒險の有り樣が實に面白い。嬉しいことであると雲竇が大ひに囃し立てゝ。更に坐下を見廻して。皆さんは何と思はれるか知らんが、此の一僧の働き振りは。如何にも立派で俊發な作用には相違ないが。然し仔細に檢點し來れば、腹のよれることで老人は可笑くてこたへられぬ。看よ此の僧には、虎鬚を捋づる底の機轉はあるけれどまだ虎頭に騎る底の分がない。虎頭に踞くまつて虎尾を收むる底の概がない。それでこの雪竇のお臍に茶がわいて仕方がないと十成を許さゞるところが雪竇の如何にも慈悲深重なところである。

第六節　頌評提唱和譯

雪竇見得透して方に乃ち頌出す。天馬駒は日に行くこと千里。横行竪走。奔驟すること飛ぶが如くなるを方に天馬駒と名づく。雪竇百丈の祖域の中に於ひて、東に走つて西に向ひ西に走つて東に向ひ、一來一往、七縱八横、殊に少碍なく天馬駒の如くに相似て善能く交馳し方に自由の處を見ることを頌す。這箇自ら是れ他の馬祖の大機大用を得たり。見ずや僧馬祖に問ふ。如何なるが是れ佛法の大意、祖便ち打して云く。我れ若し儞を打たずんば天下の人我を笑ひ去ることあらん。又問ふ。如何か是れ祖師西來意、祖云く、近前來儞に向つて道はん、僧近前す。祖劈耳に便ち掌して云く、六耳謀を同じくせずと、看よ他恁麼に大自在を得ることを。建化門中に於いて或は卷きつ或は舒べつ、有る時は舒べて卷處に在らず、有る時は卷舒俱にあらず、所以に道ふ塗を同じうして轍を同じうせずと。此れは百丈に這般の手脚あることを頌す。雪竇道く、電光石火機變を存すと。這の僧擊石火の如く閃電光に似て只些子機變の處にあることを頌す。巖頭道く、物を卻るを上となし物を逐ふを下と爲す。若し戰を論せば、也た轉處に立在すと。雪竇道く、機輪曾つて未だ轉せず、轉ずれば必ず兩頭に走ると。若し轉不得ならば什麼の用處かあらん。大丈夫の漢也た須らく是れ些子の機變を識つて始めて得べし。如今の人只管に他に欺を供して他に鼻孔を穿却せらる、什麼の了期かあらん。這の僧電光石火中に於いて、能く機變を存して便ち禮拜す。雪竇道く、笑ふに堪へたり人來つて虎鬚を埒づることを、百丈一箇の大蟲に似て相似たり。笑ふに堪へたり這の僧去つて虎鬚を埒づることを。

【字解】一。近前來。洪州泐潭の法會禪師、馬祖に問ふ。如何なるか是れ祖師西來意。祖曰く、低聲近前來。聲が低うてわからぬからモツと寄つて來やれと云ふ。

二。六耳謀を同じうせず。三人集れば文殊の智慧と云ふから、能く相談して見よと云い。又。人人思ひ思ひであるからとても相談は出來まい。又よし相談したところで駄目であるから人人各自に自省して見た方が宜しいと云ふ。

三。機輪曾つて未だ轉ぜず、轉ずれば必ず兩頭に走る。機は乃ち千聖の鑰機。輪は是れ從本已來諸人の命脈と申して諸佛も衆生も本來具有して居るところの本心本性のことである。其の本心本性は本來無心無相のものであるから如何にあらはるゝとも如何に應じるとも曾つて未だ本位を動轉すると云ふことはないが。若し一絲毫でも動轉することになれば見よ忽ち迷とか悟とか苦とか樂とか、生死とか涅槃とか云ふやうに必ず兩頭に走りて本分に背くことになるであらうと云ふ。

第七節　類則提唱（其二）

其二　僧問馬祖

僧問二馬祖一云。如何是佛法、大意。下語云。問得可二始得一。

祖便打云。我若不レ打レ儞天下人笑レ我去在。下語云。會不二虛行一。

棒にも虚の棒と罰棒とあり。此棒は僧の不足の處を打つた程に罰棒なり。此答は明眼の者にも、不明眼のものにも。何れにもはづれぬ答話ぞ。最も殊勝ぞと大燈以後先師なども讃美なり。私に云く。根本の上には問ふことのあるやうに思ふて問ふた程に。咎めて打つたときは不明眼にかゝり。句中に當てゝ打た時は明眼にかゝるぞ。

其三　又西來意

又問如何是祖師西來意。下語云。問得可二始得一。

祖云。近前來向レ儞道。僧近前。祖劈耳掌云六耳不レ同レ謀。下語云。勘破了也。深辨二來風一。

六耳不レ同レ謀とは獨りして云ふことを、三人して別々に聞くことぞ。又六耳は三人を云ふ方もあるぞ。謀は句中ぞ。

第二十七則　體露金風

第一節　垂示

垂示云。問レ一答レ十。擧レ一明レ三。見レ兎放レ鷹。因レ風吹レ火。不レ惜二眉毛一則且置。只如入二虎穴一時。如何。試擧看。

【讀方】一を問へば十を答へ。一を擧ぐれば三を明す。兎を見て鷹を放ち、風に因つて火を吹く、眉毛を惜まざることは且らく置く、只虎穴に入る時の如んば如何。試みに擧す看よ。

【字解】一。一を問へば十を答ふ。　潙山香嚴に問ふ。我聞く汝百丈先師の處にありて、一を問へば十を答へ、十を問へば百を答ふ。此れは是れ汝聰明靈利意解識想生死の根本なり。父母未生の時試みに一句を道へ看ん、師一問せられて直ちに得たり茫然なることなと云ふ因緣がある。

二、風に因つて火を吹く。　力を用ゆること多からずと云ふ意味である。

【講義】此の垂示は宗師の作略と申して、人の師たるものが、能く其の學人の機を鑑みて自由自在に接化する有樣を述べたものである。一を問へば十を答へ一を擧れば三を明かす。學人が來つて一問を發すれば十疑百疑自から永解する樣に答へ、一事を擧げて答ふれば、二事三事其れに關する事柄が自然に會得の出來るやうに示してやる。兎を見て鷹を放ち風に因つて火を吹く。丁度

獵をするものが兎を見れば鷹を放つてやり、鹿を見れば犬を飛ばせてやると云ふ樣に、應病與藥其の根機根機を見徹して根機相應の敎化をなして、少しも其の機に逆らはずに學人を接得してやれば、恰も火を起す時に風の方向をみて其の力を利用すれば、一向力を費やさずして樂に火が起ると同樣。力を勞せずして功多く、能く接化の目的を達することが出來る。そこで佛法を誤まつて說いたものは其の罰で眉も鬚も落ちてしまふと云ふことであるが、そう云ふ眉毛を惜まざる底の宗師は且らく御預りとして、只虎穴に入る時の如くんば如何、最も俊發怜悧な機轉を有して、向上の一大事を參究せんとする學人に對して、隨類隨機自在自由に接得しうる底の知識分上の作略は如何、爰に一つ實例があるから試みに擧す見よと公案に結歸したものである。

第二節　本則

擧僧問二雲門一。樹凋葉落時如何。是什麼時節。家破亡人亡。雲門云。體露金風。擎天挂地。斬釘截鐵。

淨躶躶赤洒洒。平步青霄。

【讀方】擧す僧雲門に問ふ、樹凋み葉落つる時如何。是れ什麼の時節ぞ。家破れて人亡び人亡びて家破る。雲門云く、體露金風。天を擎へ地を挂ふ。斬釘截鐵。淨躶々赤灑々。青霄に平步す。

【字解】一。是れ什麼の時節ぞ。　樹凋み葉落つるに是れ何の時節ぞ。春陽開花是れ何の時節ぞ、今日今時是れ何の時節ぞ。喫茶喫飯是れ何の時節ぞ。と審細に參究せねばならぬ。

二。家破れて人亡び人亡びて家破る。　理悉き辭窮まりて思慮分別も及ばざる處。此れ何の境界ぞ。

三。體露金風。　これは秋景を提起して宇宙の全體を眼前に見せて來問にそなへたものである。體露金風は美はしき露と心地よき風。是れ玄か是れ妙か、是れ心か是れ境か。と參究して見なければならぬが、然しあれの此れのと評論すべきものでない、只幾たびも聲朗かに樹凋み葉落つる時體露金風と誦し去り誦し來つて眞妙味の味はれるのを待つより外はない。

四。天を擎へ地を挂ふ。　天地萬〻只是れ體露金風であるぞと。底と蓋がぴたりと合つて少しも隙間のない答話であると讃嘆する。

五。斬釘截鐵。　これはフツ、りれじきつてしもうことであつて、即ち要津を把斷して凡聖に通ぜざるの味いである。

六。淨躶々赤灑々。　躶は又裸に作る。生れながらの丸はだかと云ふことで觸目全眞。體露金風の此の儘か法身の如來さまであると云ふのである。

七。青霄に平步す。　秋晴の好天氣。山には紅葉野には稻、萬里一點の雲りを止めず實に會心の好風景である。

第三節　本則提唱

僧問二雲門一樹凋葉落時如何。下語云。斬釘截鐵。萬里一條鐵。

樹凋み葉落つは截斷ぞ。何も無ふなる處を句中を以て問ふたもの、先師下語に言中有レ響。

門云、體露金風。下語云。邇界不二曾藏一。

體露金風は本分を指して云へり。樹凋葉落は截斷ぞ。截斷してのくれば本分に歸する處を體露金風と云ふぞ。截斷してのくれば體があらはれてあるぞ。又云く。樹凋葉落は秋ぞ。秋は金が司(一)どる程に金風と云ふぞ。先師曰く、雲收三萬岳一。月上中峰。日出乾坤耀。

(一)木火土金水の五行の中では秋は金に當る故に秋風を金風と云ふとなり

第四節　本則評唱和譯

若し箇裏に向つて薦得せば、始めて雲門爲人の處を見ん。其れ或は未だ然らずんば、舊に依つて只是れ鹿を指して馬となし、目瞎し耳聾す。誰れ人か這の境界に到らん。且らく道へ雲門復是れ他の話に答ふとせんや、復是れ他のために酬唱すとせん、若し他の話に答ふと道はゞ、錯つて定盤星を認む。若し他の爲に唱和すと道はゞ、且得沒交涉、既に恁麼ならずんば、畢竟して作麼生。儞若し見透得せば、衲僧の鼻孔一揑を消せず、其れ或は未だ然らずんば、舊に依つて鬼窟裡に打入し去らん。大凡そ宗乘を扶豎せんには、也た須らく是れ全身擔荷して眉毛を惜まず虎口に向つて身を横へ他の横に拖き倒に拽くに任すべし。若し此の如くならずんば、爭か能く人の爲にし得ん。這の僧箇の問端を致す。也た妨げず嶮峻なるを。若し尋常の事を以て他を看れば、只箇の閑事を管する底の僧に似ん。若し衲僧門下に據り命脈裏に去つて覩る時は、妨げず妙處あること

を。且らく道へ樹凋み葉落る是れ什麼人の境界ぞ。十八問中此れ之れを辨主問と謂ふ。亦之れを借事問と謂ふ。雲門一絲毫を移易せず、只他に向つて道ふ。體露金風と。答へ得て甚だ妙なり。亦敢へて他の問頭に辜負せず。蓋し他の問處に眼あるが爲めに、答處も亦端的なり。古人道く、親切を得んと欲せば、問を將つて來つて問ふこと莫れ。若し是れ知音底ならば、擧着せば便ち落處を知らん。儞若し雲門の語脈裏に向つて訊ねば、便ち錯り了れり。只是れ雲門の句中に、多く人の情解を惹くことを愛す。若し情解の會を作さば、免れず我が兒孫を喪することを。雲門恁麼に賊馬に騎りて賊を趁ふことを愛す。見ずや僧問ふ、如何か是れ非思量の處、門云く、識情測り難し、這の僧問ふ、樹凋み葉落つる時如何。門云く、體露金風と、句中妨げず要津を把斷し凡聖を通せざることを。須らく他の一を擧すれば三を明かして三を擧すれば一を明むることを會すべし。儞若し他の三句の中に去つて求めば、則ち腦後に箭を拔かん。他の一句中に須らく三句を具すべし。函蓋乾坤句。隨波逐浪句。截斷衆流の句。自然に恰好なり。雲門三句の中、且らく道へ那句を用ひてか人に接せん。試みて辨じて看よ。頌に云く。

【字解】一。鹿を指して馬となし。　史記に、秦の趙高が鹿を指して二世に示して曰く馬也。二世曰く、丞相誤つて鹿を指して馬となすとある故事によつたものであつて取り違へて馬鹿を見るぞと云ふ程の意味に用いたものである。

二。錯つて定盤星を認む。　定盤星は權衡の目もりのことである。品物の輕重にかゝはらず、何時も同じ目もりを見て居

るやうでは決して眞の目方がわかるものでないから、そこを言句上にのみ解を求むるもの丶愚さに比況したものである。

三。舉寃して作麼生、是れもそうでない、あれもそうでないと拂つたならば、終局なんとしたものであらう。

四。虎口に向つて身を横へて他の横に拖き倒に拽くに任すべし。是れは宗師家の學人を接化するに當りては、全身を全く打ち任せて、只對機のまに〳〵接化せねばならぬと云ふことを申したものである。

五。開事を嘗する底の僧に似ん。　徒らに文章を弄する詩作り坊主と一般ならんとのこと。

六。十八問中此れを辨主問と云ふ。　汾陽禪師の十八問の中では第五番目の探拔問卽ち辨主問に當ると云ふのであつて、卽ち雲門大師が秋色を借りて本地の風光を弄される處に付いて辨主と云ひ借事と申したものである。

七。古人道く。首山省念禪師の上堂の語である。

八。非思量の處。　言語思量の及ばぬところはどんなものと問ふてきたから直ちに其の問をおつとつて答へたものであるから所謂敵馬に騎りて敵を追ふと云ふ論法である。

九。腦後に箭を拔かん。死中に活を得ることもあらふぞと云ふのである。

一〇。須らく三句を具すべし。　雲門の三句と稱して有名なるものであるが。三句はもと德山緣密圓明禪師の上堂の語であつて卽ち我れに三句の語あり、汝諸人に示す一句は函蓋乾坤。一句は截斷衆流。一句は隨波逐浪。作麼生か辨ぜん、若し辨得し出ですんば長安路上輥々地ならんと申してある。これは禪僧の言句には必ず句が備はると云ふことを申したものである。

第五節　類則提唱

其一　雲門非思量

僧問雲門如何是非思量處。門云識情難測。下語云。竪第三世横貫十方。

三句の躰調備つたぞ。識情は色相。難測は本分。句中も備るなり、識情の外に測るものゝあるやうに云ふたは句中なり。

第六節　頌

問既有宗深辨來風。答亦攸同豈有兩般。如鐘待扣。功不浪施。三句可辨上中下。如今是第幾句。須是向三句外薦取始得。一鏃遼空中。過也。竪着。箭過新羅。大野兮涼飈颯颯普天匝地。遼覺骨毛竪麽。放行去也。長天兮踈雨濛濛風浩浩水漫漫。頭上漫漫。脚下漫漫。君不見。少林久坐未歸客更有不嘗鹹漢。帶累殺人。黃河頭上渴將濁來。靜依熊耳一叢叢開眼也著。合眼也著。鬼窟裏作活計。瞎耳聾。誰到這境界。不免打折你版齒。

【讀方】問既に宗あり。深く來風を辨ず。箭は虛りに發せず。答も亦同じき攸なり。豈兩般あらんや。鐘の扣を待つが如し。功みだりに施さず。三句辨じつべし。上中下。如今是れ第幾句ぞ。須らく是れ三句の外に向つて薦取して始めて得べし。一鏃空に遼る。中れり。過なり。竪著。箭新羅を過ぐ。大野兮涼飈颯々。普天匝地還つて骨毛の卓竪することを覺ふるや。放行し去れり。長天兮踈雨濛々。風浩々水漫々。頭上も漫々脚下も漫々。君見ずや少林久坐未歸の客。更に不嘗鹹の漢あり。人を帶累殺す。黃河は頭上より濁り來る。靜かに熊耳の一叢〻々に依る。開眼も也た著。合眼も也た著。鬼窟裏に活計を作す。眼瞎し耳聾す。誰か這の境界に到らん。免れず你が板齒を打折せらるゝことを。

【字解】一。深く來風を辨ず。　雪竇能くも此の僧の來問の高風を辨じて頌せられたと云ふ。

二。箭は虛りに發せず。　サスガに徒射は無い。好い作略である。

三。豈に兩般あらんや。サスガは雲門大師である。底蓋合つた答話の具合は如何にも見事なものである。

四。鎚の扣くを待つが如し。　大は大に應じ小は小に應じて根機相應の接化の仕方は實に自由なものである。

五。功みだりに施さず。來問にキシツと合つた樣子は誠に敬服の外はない。

六。上中下。　三句と云へば。上中下の三句であらうか是れ如何なる句でどう云ふやうに辨じたものであらう。

七。如今是れ第幾句ぞ。　那の一句であらう第一句か第二句か。或はマタ一句に三句を具足して居るのであらうか。

八。須らく是れ三句の外に向つて薦取して始めて得べし。　三句の上中下のふと云ふ杓子定規の下で會得することは出來ぬ。若しも吾々にして此の差排のもとに會得しやうとしたならば夫れは依つても付かぬ方角違ひであるから必ず句外に點頭するやうにしなければならぬ。

九。中れり。體露金風と放たれた箭は、見事に金的を貫きましたと云ふ。

一〇。過なり。ハヤ行先が明からなくなつてしまつた。天竺へでも行つたであらうかと驚いたふりをする。

一一。盤著磕著。　盤ば塞也と申して穴へ土を塡めてヒツシリ其の穴を塞ぐこと。磕は兩石相擊撃で石と石とが打當つてカチツと音のする樣子であるからつまり、問話と答話とがピタリと合つて一の間隙もない處を形容したものである。

一二。箭新羅を過ぐ。縱跡が知れぬも道理。東海へ落ちましたと云ふ。

一三。普天匝地。　颯々たる涼颱の限りなきありさまを申したもので。天下至る處に靑風明月ありと云ふも同じことである。

一四。還つて骨毛の卓竪することを覺ゆるや。　どんな人でもこの涼風にゾッとしたならば、少しは目が醒めましやうと云ふ。皆樣皮下に血はありますかな。

一五。放行しされり。　餘り丸出しに見せ過ぎるやうはあるぞと云ふ。

一六。風浩々たり水漫々たり。　何處も彼處も風だらけ水だらけでどこへも逃げ出して見やうはありませぬと云ふ。

一七。頭上も漫々脚下も漫々。　頭上も脚下も水、ソレ目を開いて見。耳を立てゝ聞いて御覽うじ。卽今死生の巷であることがわかるであらうと云ふ。

一八。更に不唧唧の漢あり。　久坐末歸の客。　此の鈍漢奴未だうろついて居られるか早く西天に歸れば好いにと云ふ。ナセカ禍兒孫に及ぶからのことである。

一九。人を帶累殺す。　罪の無い人迄を苦しめるから、長居は御無用早くお歸りになつたが宜しいと云ふ。又云く。諸人取り差へるなよ。長居ちやないぞ。偶像ちやぞ。ウツカリ眞似て坐死するなよと枯木死灰裡に坐死するものを誡めたのである。

二〇。黃河は頭上より濁り來る。此の逢磨大師は曾つて西歸せず、曾つて東來せず。久坐末歸と千古萬古坐禪三昧に入つて居られる。此れ我宗獨得の宗風であつて恰も黃河は其の源頭から濁り流れて東海の水が皆黃色に濁つて居ると同樣である。

二一。開眼も也た著。合眼も也た著。　彼の熊耳の一叢々は人が見なくとも聞かなくとも依然として一叢々であつて、更に眼見耳聞には用はな無いと云ふ。

二二。鬼窟裡に活計を作す。　イヤ少林とか久坐とか色々に云ふけれども畢竟は餓鬼同士の振舞講であるから後がつゝきましまいと云ふ。

二三。眼瞎し耳聾す。誰れか此の境界に到らん。　此逢磨は生來眼なく耳なく手なく脚なき人であるから、眼見耳聞を離れて此の久坐末歸の境界に到られればならぬか、偖誰かそう云ふ人があるであらうかと云ふ。

二四。兎れず你が板齒を打折せらるゝことを。　皆さんへたな坐禪に浮き身をやつして居ると此の圓悟が前齒をへし折りまするぞと云ふのであるが、これは逢磨大師が敎家の人から鍼灸をうけて前齒を打ち折られたと云ふ故事によつたものであ

る。

【講義】問既に宗あり。此の僧は尋常一樣の衲子ではないと見へて。樹凋み葉落つるの時如何と問いかけた處は。已に十分の宗旨が具はつて居る。立派な問話であると一僧の來問を頌する。答も亦た同じき攸。又雲門の答へも如何にも立派なもので底と蓋とがピタリと合ふた處などは。中々常僧の企て得べき處ではない。實に自由自在の接化のし方で、イカサマ雲門ならでは出來ぬ仕事であると雲門の答話を頌する。三句辨ずべし。然し此の樹凋み葉落つる時如何といふに對して雲門がスカサズ體露金風と答へられた處は此れは三句の中では函蓋乾坤の句であらふか。隨波隨逐の句であらふか。或は又截斷衆流の句であらふか。偖ては一句に三句の躰調悉く具はつて居るのであらうか。爰は是非とも辨別して見なければならぬ。　一鏃空に透る。雲門の體露金風と無造作に答へられた有樣は、恰も一筋のカブラ箭がシュウと虛空遙かに飛び去つた樣であるが偖あの箭は果して中つたであらうかどうであらう。是非調べて見なければならぬ。大野凉殿颯々。これは雪竇が餘才を弄されたもので本則の頌は已に濟んでしもうたのである。天地宇宙の大野に凉殿が颯々と吹き、長天兮疎雨濛々。一陣の秋雨が濛々と降り下りて居るさまは實に趣味の深い好風景である。これは徧界曾つて藏せずと、盡天盡地只是れ體露金風であると明歷々露堂々の有樣を謠つたものであつて次の句はこれに付いて雪竇は思ひ出すことがあると故事を謠ひだしたのである。君見ずや少林久座未歸の客。靜かに依る熊耳の一叢々。少林は嵩山の少林まで達磨大師の居られた處である。熊耳山は大師を葬つた處で陝州縣の西南に在つて、兩峰並び聳へて居る樣子が丁度熊の耳のやうであると云ふので熊耳山と名けたのである。そこで達磨大師は、何も隻履を携へて翩々として西印に歸へられたと云ふでもなく、亦大和の片岡に在つて聖德太子の出遊に遇はれたと云ふわけでもない。常在熊耳と常に熊耳山に在つて嚴然として座して居らるゝことであるが、何んと皆さん相見が出來ますかなど云ふて、不去不來今古不易の活達磨が、五百塵點劫の其の往昔より靜かに熊耳峰の叢林中に身を寄せて居られる。此れが衲僧の老爺であり吾れ人の乃祖であるから、吾々は是非とも實參實究して此の達磨大師に相見し奉らねばならぬと云ふのである。

第七節　頌評唱和譯

古人道く、言を承けては須らく宗を會すべし、自ら規矩を立すること勿れと。古人の言虛りに設けず、所以に道ふ。大凡そ箇の事を問んには、須らく些子の好惡を識るべし。若し尊卑去就を知らず、淨觸を識らずして、口に信せて亂道せば、什麼の利濟か有らん。凡そ言を出し氣を吐くには、須らく是れ鉗の如く鋏の如く鈎有り鎖あるべし。須らく是れ相續不斷にして始めて得べし。這の僧の問處宗旨あり。雲門の答處も亦然り。雲門尋常三句を以て人を接す。此れは是れ極則

なり。雪竇這の公案を頌すること大龍の公案を頌すると相類す。三句辨ずべし、一句の中に三句を具す。若し辨得せば則ち三句の外に透出せん。一鏃空に遼る。鏃は乃ち箭鏃なり。射得て太だ遠し。須らく是れ急に眼を着けて看て始めて得べし。若し也た見得分明ならば、以て一句の下に大千沙界を開展すべし。此に到つて頌し了れり。雪竇餘才あり、所以に展開し頌出して道ふ。大野分凉颯颯々長天分疎雨濛々と。且らく道へ是れ心か是れ境か、是れ玄か是れ妙か、古人道く、法法隱藏せず古今常に顯露すと。他問ふ樹凋み葉落つる時如何。雲門云く、體露金風と。雪竇の意は只一境と作す。如今眼前に風拂々地、是れ東南の風にあらずんば便ち是れ西北の風。直に須らく便ち恁麼に會して始めて得べし。爾若し更に禪道の會を作さば、便ち沒交渉。君見ずや少林久座未歸の客、達磨西天に歸らざるの時九年面壁す、靜悄悄地、且らく道へ是れ樹凋み葉落るか、且らく道へ是れ體露金風か。若し這裏に向つて古今凡聖を盡くして、乾坤大地打成一片ならば、方に雲門雪竇的々爲人の處を見ん、靜に熊耳の一叢々に依る。熊耳は卽ち西京嵩山の少林なり。前山も也た千叢萬叢。後山も也た千叢萬叢諸人什麼の處に向つてか見ん。還つて雪竇爲人の處を見るや。也た是れ靈龜尾を曳く。

【字解】一。古人道く。　雲居弘覺禪師の上堂の語である。僧家言を發し氣を吐かば須らく來由有るべし。將つて等閑なること莫れ。這裏是れ什麼の所在ぞ。爭か容易を受けん。凡そ箇の事を問はゞ須らく些子の好惡を識るべし。若し尊卑貴賤を識らず觸犯を知らずして、口に信せて亂道せば也た利益なけんと申してある。

二。鉗の如く鋏の如く鈎あり鎚あるべし。　ハサミをかけクサリをかけてハズレヌ樣に相續するの義である。弘覺禪師の語に鉗の如く鋏の如く鈎の如く鎚の如くにして須らく相續不斷ならしめて始めて得べしと見へて居る。

三。此れは是れ極則なり。極は至極の義であるから之れが爾の至極のり手本とすべきものであると云ふ。

四。大龍の公案。　碧巖集百則の中第八十二則目の大龍堅固法身の則か、此の則と頗る語勢は能く似て居ると云ふたものである。

五。風拂々地。　拂々は風動の貌と申して風がソヨ〳〵と吹くことである。

六。是れ東南の風にあらずんば便ち是れ西北の風。　風に二つはないから必ず方角に向つて尋ねるやうなことをしてはならぬ。只卽今是れ何の風ぞ是れ何の時節ぞと尋ねて見よと云ふ。

七。靜悄々地。　悄々は憂心なり賢人の愁恨なりと申して秋のサミシキ心持ちのことである。或は閑寂靜寂の貌とも申してある。

八。嵩山少林寺。　登封縣の西。熊耳山を去ること三百餘里の處にありて後魏の孝文帝の時天竺の沙門佛陀禪師が創建せられたものである。嵩山は五岳の中嶽で總べて三十六峯より成り、東を大室西を少室と云ふて相距ること十七里。少室の高きこと八百六十丈と云ふ。其の少室に達磨の居られた處が少林寺で、其の北麓の講堂の後の立雪亭と云ふが二祖が雪中に立つた古跡である。又少林寺中に達磨洞と云ふがある、爰が石壁九年の遺跡であつて內に高サ三尺許の達磨像が安置してあると云ふことである。

九。前山も也た千叢萬叢。　雪竇は靜かに依る熊耳の一叢々と云はれるが、熊耳は前山も一叢々、後山も一叢々であるか。このうちドコに依つて居ちるゝのであらう。マサカ三尺の石像が眞の達磨大師でもあるまい。諸人何處で大師に相見じやうのと云ふ。

一〇。靈龜尾を曳く。　莊子に出づるたとへである。迹を拂つて生すと云ふことに用ゆることになつて居る。

第二十八則　南泉不是心佛

第一節　本則

舉南泉參二百丈，涅槃和尙一、丈問。從上，諸聖還ヲ有下不ニ爲レ人說一底，法上麼和尙合知。壁立萬仞。還覺齒落麼。泉云有落草了也。孟八郎作什麼。便有恁麼事。丈云。作麼生是不ニ爲レ人，說一底，法看地作麼生。看他手忙脚亂。將錯就錯。但試問看。泉云。不是心不是佛不是物果然納敗闕。果然漏逗不少。丈云。說了也莫與他說破。他從錯一平生。不合與他恁麼道。泉云。某甲只恁麼。和尙作麼生輥有轉身處。與長卽長。與短卽短。理長則就。丈云。我又不ニ是大善知識一。爭知レ有ニ說不說一。看他手忙脚亂。藏身露影。去死十分。爛泥裏有刺。恁麼那廉我。泉云。某甲不會乍可恁麼。輥值不會。會卽打倆頭破。輥值這漢只恁麼。丈云。我太煞爲レ倆，說了也雪上加霜。龍頭蛇尾。作什麼。

【讀方】　舉す。南泉百丈の涅槃和尙に參す。丈問ふ從上の諸聖還つて人の爲めに說かざる底の法ありや。和尙まさに知るべし。壁立萬仞。還つて齒の落つることを覺ゆるや。泉云く有り。落草し了れり。孟八郎にして什麼かせん。便ち什麼の事あり。丈云く。作麼生か是れ人の爲に說かざる底の法。看よ他作麼生。看よ他の手忙く脚の亂るゝを。錯を將て錯に就く。但試みに問ひ看よ。泉云く不是心不是佛不是物。果然として敗闕を納る。果然として漏逗少からず。丈云く說了也。他のために說破すること莫れ。さもあらばあれ一平生を錯まることを。他のために恁麼に道ふべからず。泉云く某甲は只恁麼。和尙作麼生。輥ひに轉身の處あり。長に與すれば卽ち長にし

て短に與すれば卽ち短なり。理長すれば卽ち就く。丈云く。我又是れ大善知識にあらず。爭でか說不說あることを知らん。看よ他の手忙く脚の亂れたるを。身を藏して影を露はす。死を去ること十分。爛泥裏に刺あり。恁麼に那ぞ我を瞞すや。泉云く某甲不會。乍ちに恁麼なるべし。賴ひに不會に値ふ。會せば儞が頭を打破せん。賴ひに這の漢の只恁麼なるに値ふ。丈云く。我太煞儞が爲に說き了れり。雪上に霜を加ふ。龍頭蛇尾にして什麼をか作さん。

【字解】一。百丈の涅槃和尙。百丈慧海禪師の法を嗣いだ人諱は法正と申した人で常に好みて涅槃經を讀誦せられたから世人が涅槃和尙と稱したと云ふ。後師の後を承けて百丈山の山主となられたから百丈の涅槃和尙と申すことである。武翊黃の所撰にかゝる涅槃和尙の碑に、師諱は法正其善く涅槃經を講ずるを以ての故に涅槃を以て稱となすとある。然るに今爰の涅槃和尙は其の人ではなくして、馬祖の法を嗣いで百丈慧海とは法兄弟であつて然も同じく百丈山に住して居られた惟政禪師のことであるとの說がある。此の方が宜しい。さうすると南泉普願禪師とは法兄弟の間柄であるから、何でも南泉和尙が百丈惟政和尙を勘檢しやうと云ふので問答に出かけて往つたのを、惟政和尙もサルモノであるから早くも其機を見て取つて機先を制してお先きへと、問端を起したものと見へる。

二。和尙合に知るべし。其樣な法が有るか無いかは、他人に問ふまでもなく和尙は定めし御存じであらふ。

三。壁立萬仞。不說底の法とはこれ何の法ぞ。佛に賴んでも鼻は曲らず。達磨に賴んでも耳では見られまい。容易に寄り附くことは出來まい。

四。還つて齒の落つることを覺ゆるや。百丈其のやうに口をきいては、齒が冷へ樣が。落ちはせぬかなと云ふ。これは饒舌に過ぎると齒が落ちると云ふ故事によつたものである。

五。落草し了れり。有るの無いのと埒もないこと。あればそも如何やうなもの。無くんば是れ何故ぞ。諸人試みに辨じ來れ。

六。孟八郎にして什麼かせん。晉の時代に孟八郎と云ふ亂暴な男があつて、道理に由らずして事をなしたと云ふ事がある。そこで亂暴なとか竦略なとか云ふ程の代〻言葉は孟八郎と云ふ語を使ふことになつたと云ふので、古人も道理に由らずして以て事を作す者を孟八郎と曰ふと申して居られる。爰では圜悟が南泉の有りと云ふたのを叱つて、此の疎忽もの奴、ドフして其の樣なことを言ふか卒畧な申し分であらうと抑へたのである。

七。便ち恁麼の事あり。イヤ無いと云ふ理由もありますまいと南泉の眉を持つた。之れは學人をして一方にのみ取り附かせぬ樣にとの圜悟の老婆心切である。

八。看よ他作麼生。百丈の一拶に對して南泉和尙は何と云ふであらふか。皆さん是れ南泉にのみ任せて置くべきではありませぬぞ。人人自ら參究して有りや無しやを究めればならぬ。

九。看よ他の手忙く脚の亂るゝことを。百丈に向つては、百丈はヒドク取り亂して問はるゝが。然て〳〵忙がし走なと云ふ處。南泉に對しては、諸人あれ看られよ、大方南泉が、大狼狽することであらふにと云ふ。

一〇。錯を持て錯に就く。喧嘩兩成敗と云ふがイカサマ兩方とも錯ひだらけで偖々見苦しいことである。

一一。但試みに問ひ看よ。然し南泉が平氣で有りと云はれるから、物は試しに、如何なる法があるか問ふて見るも宜しからうと云ふ。

一二。不是心不是佛不是物。これは其の時代に盛んに論究せられた法門であつて、其のおこりと云ふのは此の南泉和尙や百丈禪師の師匠に當る馬祖大師が、常々に卽身卽佛と云ふことを言はれたに就いて。或時のこと、一僧が馬大師に向つて和尙什麼の爲めにか卽身卽佛を說く。何故に老師は卽心卽佛を問はれるかと問ふた。馬祖はこれに答へて、小兒の啼を止めんがためなり。イヤほんの小兒だましよと云ふた。然るに其僧は、更に馬大師に向つて、啼止む時如何。その小兒が啼き止んだ後はどうしますと云ふ。馬大師は非心非佛と答へられる。其の僧は更に進んで、其の卽心卽佛と非心非佛との二種を除いた人が來たら何うしますと云ふ。馬祖は伊に向つて不是物と道はれて答へられたと云ふことである。ところが馬大師は申す迄もなく當代に於ける敎界の大立物であるから、忽ちに當時の大問題となつて、諸方の叢林は申すに及ばず至るところで、

類りに商量せられるやうになつた。これを今極通俗に申して見ると、今も昔しも同じことで、多くの人は佛は十萬億土の向ふに御坐る、自心の外にあると思ふて、兎角色々の詮索をするものであるから、釋尊が、阿彌陀佛こゝを去ること遠からずと說かれた、又是心是佛と說かれたのである。馬大師が卽身卽佛と云はれたも畢竟此の意味に過ぎない。ところが又一類の愚人があつて、其れでは此の心が其の儘に佛であつて心の外には更に佛はないものであると執着する者が出來る。これは病を直すための藥から又候ふ一種の病を起したものである。ソコデ今度は此の病を直すために非心非佛。卽ち心にも非ず佛にも非ずと病も藥も倶に排除してしまふた。然るに今度は更に又大馬鹿者が出で來た。成る程然らば宇宙間の萬物こと〴〵く其の儘で十成など、心と佛とを離れて物に執着する者が出來てます〳〵其の病氣がひれくれて來る。そこで止むことを得ず、今度は不是物とこれ物にもあらずと言はればならぬ、馬大師が不是佛と申された心はこゝにあるのである。今南泉老人は此の三段の不是を一つにして不是心不是佛不是物、これが從上の諸賢が人のために說かざる底の法でありますと答へられたのであるか、これは果してさうであらうか。お互によく參究して見なければならぬ。

一三。果然として敗闕を納る。　サテコソ南泉イカイ婆々談義をせられた。大敗北であるぞ。

一四。果然として漏逗少なからず。　ソレ又しても前後採り漏した長談義をせられると抑へる。

一五。說了也。　大層な御說法で御坐りましたナ、有り難いこと。其れが不說底の法で御坐るかアハヽと冷やかす。

一六。他のために說破すること莫れ。　云はずとも知れたことであるが。百丈貴公も又餘計な說法をせられる。說き過ぎてはありませぬかと云ふ。

一七。從他一平生を錯まること。　南泉のやうな饒舌な男が一生を錯まつたからとて自業自得であるから少しも構ふことはいらぬで說了也など、餘計な御世話をやかなくとも宜しいと云ふ。

一八。他のために恁麼一道ふべからず。　イラヌ御世話をやいて餘計な口をきくまいぞと云ふ。

一九。賴ひに轉身の處あり。　南泉和尙が其の儘捏り返へした處は如何にも好い拔け手であると稱讚する。

二〇。長に與すれば卽ち長にして短に與すれば卽ち短なり。　サスがは南泉であるから相手次第で自由自在に働かれると云ふ。

二一。理長すれば卽ち就く。　兩雄の眞劍勝負とあれば誠に絕妙の見物である。強い方へ團扇をあげましやうと云ふ。

二二。看よ他の手忙く脚の亂れたるを。　百丈のうろたへた有樣を見よ。脚下があぶないと顏をしがめる。

二三。身を藏して影を露はす。　諸人何やら藏くれたそうなオヤ影が見ゆると云ふ。これは說不說あることを知らずと云ふ言下に、不說底の玄旨が見へると云ふ意である。

二四。死を去ること十分。百丈危い處で九死一生の大事であるから、能く落ちついて決してウロたへなさるなと云ふ。十分は卽ち一寸であるから、日本で申せば板子一枚であると云ふことになる。

二五。爛泥裏に刺あり。　柔かな泥の中にも棘があるからサツカリと踏み込んで怪我をするなよと申してお互に脚下を注意せればならぬと申したものである。

二六。恁麼に那ぞ我を瘸すや。　百丈の語にだまされるなよ。スカをクハサれるぞと注意する。

二七。乍ちに恁麼なるべし。　是非ともにさうあるべき筈である。

二八。賴ひに不會に値ふ。　不會で仕合會得などしてなんとしやうと云ふ。

二九。會せば儞が頭を打破せん。　夜なをし〳〵。危いことである。理窟に滲れば命がないと仰せやるが。いかにも心得またと云ふ。

三〇。賴ひに這の漢の只恁麼なるに値ふ。　幸ひに南泉がおとなしく不會と云ふたからよいが若しも會する所があつたとすれば餘程厄介なことになつたであらうと云ふ。

三一。雪上に霜を加ふ。　先きには南泉のことを說了也と言ふた百丈が今度は自ら我はなほだ說了也と云ふ。丁度雪上に霜を加へたやうなもので實に餘計なことであると云ふ。

三二。龍頭蛇尾にして什麼なか作す。最初に百丈から喧嘩を買つて置きながら、今說了也と云ふて引込むなどゝはサテ〳〵見苦しいこと。尾だれになつたと云ふ。

第二節　本則提唱

南泉參二百丈一、涅槃和尙問二丈一、從上諸聖還有不爲二人說一底法麼。下語云。挽鈎搭索。

是は本分の方ぞ。サレドモ是れ泉を試みたところ。根本の上に人の爲めの說法ぢや不說法ぢやと云ふて何事があらうぞ。不說法底の法ありやと云ふたが句中ぞ。先師下語に探竿影草。句裏藏レ鋒。

泉云、有。下語云。有レ問有レ答。如二鐘ノ有レ扣。

泉和尙怜悧なことぞ。法ありやとの問に有と答へたは、之れ有問有答なり。先師下語に、書亦不レ通信亦不レ達。

丈云、作麼生是不二爲レ人、說一底、法。下語云。捉レ襟見レ肘。

先師下語に、春風逼レ戸寒。言中辨レ的。

泉云。不是心不是佛不是物。下語云。實頭人難レ得。

隨分と思ふて云へり。實頭なぞ。先師下語に、風吹不レ入水洒不レ着。

丈云、說了也。下語云。何不レ行レ令。

一棒與ふる處ぢやものをと、傍人からした下語ぞ。先師下語に、倚レ天長劍逼レ人寒。覿面難レ瞞。

泉云、某甲只恁麼。和尙作麼生。下語云。還把二鎗頭一倒刺レ人來。

先師下語に。獨掌不二浪鳴一。箭鋒相拄。

丈云、我又不二是大善知識一。爭知レ有二說不說一。下語云。有二意氣一時添二意氣一。

百丈の此前怖ろしい句中を云ふたを、意氣と云ふ。又爰で我は大善知識ではなし。爭でか說不說を知らんと云ふたは、一段怖るべき句中が備るゆへ。意氣あるの時意氣を添へたものぞ。又此の前泉の有と云ふたに當つて云ふた心もあるぞ。先師下語に藏レ身露レ影。

泉云某甲不會。下語云。不二風流一處也。風流。一死不二再活一。

根本に到つては不會と云ふことも無きを不會と云ふたは不風流ぞ。然れども少し面白き處あるを故に風流と云ふたもの。先師下語に同坑無二異土一。眼看二東南一心在二西北一。同類相應。

丈云、我太煞爲レ儞說了也。下語云。雖有レ不レ獃二倒禪床一。

棒喝を行すべき處に、行させる處を見かけての下語ぞ大圓禪師は龍頭蛇尾とつけられたぞ。先師下語に寶劍光寒。斬レ釘截レ鐵。